
名探偵コナン～キッドside～

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン〜キッドside〜

【Nコード】

N1827B

【作者名】

ペロコ

【あらすじ】

これは、怪盗キッドから見たコナンとの戦いです。原作と合わせてお読みください。なお、自分の読みたいお話だけ読むというのも1つの読み方だと思います。ちなみに、「漆黒の星」からスタートし、「奇術愛好家」、「世紀末の魔術師」、「黄昏の館」を収録。「奇術愛好家」以外は最後にちよつとオマケあります。オリジナルを少々含んではいますが、楽しんでいただけたら嬉しいです。

始まりの挨拶

オレは高校生怪盗、黒羽快斗・・・

なぐんでどっかのアニメみたいに始めてみたけど、普通は高校生が怪盗なんてやってるわけねーよな。

まあ、やり始めた経緯はこの際置いて・・・。

さてと！

P O M

みなさま、こんにちは。怪盗1412号、通称怪盗キッドです。

これから始める物語は、あの小さな探偵君と私の戦いの物語です。

ここでいくつか注意があります。

まず1つめ。

このお話は「名探偵コナン」のキッドsideとしてお送りします。なので、セリフがかぶっていることが多々ありますが、ご了承下さい。

2つめ。

このお話は、私キッドの語りでお送りする形になります。

「」がついていないところは私が思っているのだと考えた上でお読みください。

最後に3つめ。

今から始まるこのお話。TVで放送されたもののみでお送りします。原作ですでに書かれていても放送されていなければ、そこはカットさせていただきます。

あ、映画の方もですよ！

さあ！以上の点をふまえて、それでも読みたいという方は最後までお付き合いよろしく願います。

それではまたお会いしましょう！！！！足先に本編へと向かっておきます。
では！

P
O
M

始まりの挨拶（後書き）

ということではじめてしまいました。ペロコです。

連載小説「名探偵コナン」キッドside「」です。

マイペースですが少しずつ更新していくので、最後までお付き合いをお願いします。

漆黒の星¹（前書き）

とりあえず、ブラックスターからスタートさせていただきます。

漆黒の星 1

「快斗ー！」

朝から元気なこの声は、オレの幼馴染の青子。

「快斗ー?! 起きてるんでしょー!!? 早く行こうよー！」

そう、今日オレ、黒羽快斗は青子と一緒にある宝石を見に行くのである。

その名も”ブラック・スター漆黒の星”!!

鈴木財閥の秘宝の黒真珠……。そして、今度のオレの獲物でもある。

「今行くから待ってるー!!」

「分かったー!!」

オレが階段を降りていくと、青子が玄関で待っていた。

「早く行こー!!」

「おう！」

「それにしても雨かぁ……。まだ春先だから雨だと少し肌寒いね。」

「ああ……。」

今……。今すれ違った高校生ぐらいの女の人2人……。片方は確かあの鈴木財閥の……。
だとすると、もう1人は……

「ちよつと聞いてる!?!」

「あ……。ああ……。聞いてるよ。アホ子はアホだなんて話だろ!?!」

「バ快斗! そんなにアホアホ言わないでよ! 青子、アホじゃないもん!」

「ケケケ……。」

つと、そんなこんなで米花美術館到着

「わ〜！きれ〜い！！」

「・・・そうだな・・・」

これ・・・ニセモノじゃねえか……。となると、やっぱり予告状はああして。

そして・・・

「それにしても珍しいね、快斗が宝石見たいなんて・・・」

「・・・まあな。たまにはいいじゃねえか。」

次の獲物だから・・・なんていえるわけねえって。まだ予告状出してねえし。

そして、次の日。オレは鈴木財閥と警察宛に予告状を出した。

” A p r i l f o o l

月が二人を分かつ時

漆黒の星の名の下に

波にいざなわれて

我は参上する

怪盗キッド”

漆黒の星1（後書き）

どうも、ペロコです。

第1話は、快斗が予告状を出すまで・・・ということで書かせてもらいました。

少しずつですが更新していくので、よろしくお願いします。

漆黒の星2

いよいよ今日は予告日。美術館に仕掛けた盗聴機によると、何やらあの”毛利小五郎”とか言う”探偵”が的外れなこと言ってたけど・・・。

あいつ、本当に”探偵”か？

白馬のほう張り合いあるっての・・・。

まあ、今はその白馬探偵もロンドンに戻っておいでときてる！
今回も楽勝ですな

そうそう、オレは現在東都タワーの上にいます
なんか寺井ちゃんが「やめろ」とか言ってたけど・・・。

そういえば、あの時計台の時のジョーカー・・・。青子が「工藤君のおかげね！」

なんていうから、「誰だ？それ・・・」って言ったら

『謎めいた殺人事件を次々に解決してる高校生探偵』なんだってさ。
つたく・・・何で怪盗相手に殺人専門の探偵が来んだよ・・・。
ん？じゃあ、あの時紅子が言ってた”光の魔人”って・・・。

ふん・・・？でもアイツ、あれ以来姿見せてねえよな・・・。
ま、やりやすくて助かるけど・・・あのときの緊張感、楽しかったのにな

白馬じゃ物足りないんだもん！！白馬には悪いけどね。
アイツの行動パターン、いつも一緒だからな・・・。

おっと・・・寺井ちゃんが心配してるし、そろそろ行きますか！
「狙いはビッグジュエル、鈴木財閥の至宝”ブラックスター漆黒の星！」
そう宣言し、オレは東都タワーから飛び立った・・・。

このときオレはまだ気づいてなかったんだ……。　（まあ、当たり前だけど）

まさか予告状を解いたガキが中継点である、杯戸シティホテルにいるなんてな……

漆黒の星2（後書き）

どうも、ペロコです。

とりあえず、飛び立たせてみました。

それから、時計台の事件についてなんですが……。軽く触れる程度にさせていただきました。

あくまでも、これはコナンとキッドの対決のお話なので……。

ご了承ください。

漆黒の星3

その一つの小さな”影”は、近づくにつれて、はつきりと見えるようになってきた。

最初は「違う・・・気のせいだ・・・。目の錯覚か。」と思ってたけど、やはりそれは錯覚なんかじゃなくて・・・。

何やらその”影”は、誰かと電話をしているらしい。ま、いいや。

と思って着地したら、その小さな”影”は、はじかれたようにこっちを見た。

うわ・・・。ちっせえ・・・。小学生？

あ、電話切った。相手がかawaiiそうだ。ま、どうでもいいけど。とりあえず、

「ボウズ・・・何やってんだ？こんなところで・・・」

それもガキがこんな時間に1人で・・・と心の中で加えておく。すると、

「花火！！」

なんてかわいい（？）答えが返ってきた。

いや、そういう意味じゃなくて・・・いや、そうなんだけど・・・なんてあきれてたけど、そこは自慢のポーカーフェイス！！ちよつとやさつとじゃ崩れません！と思ってたら、

「あ、ホラ！ヘリコプター！こっちに気づいたみたいだよ！」

なんて言いやる。ホー・・・それが狙いだったってわけね。やるねえ、このガキ。

「ボウズ・・・ただのガキじゃねえな・・・」と本音がポロリ。すると、

「江戸川コナン・・・探偵さ・・・」

く・・・空気が変わった！？何者だ、コイツ！まじで”ただのガキ”じゃねえや。

探偵？フ・・・おもしれえ・・・。それにコイツ、背中に何隠してるんだ？

バレバレだよ・・・マジシャン相手にするのに慣れてねえな。

ここはひとつ、盛大にやらせていただきますか。

それでは、It's ショータイム！！

漆黒の星3（後書き）

みなさまこんにちは。ペロコです。

とりあえず、ようやくコナンくんが出せました。

コナンくんと会ったときにキッドが何を思ったのか、謎だったのか、とりあえず、そこを自分なりに解釈してみました。
はい、キッドさまのショーの始まり、始まり！

漆黒の星4

オレはスーツから無線を取り出し、

「えゝ．．．。こちら茶木だが！杯戸シティホテル屋上に怪盗キッド発見！」

とか、

「えゝ、ワシだ、中森だ！キッドは屋上だ！」

などと、声帯模写をやったら．．．お？驚いてる、驚いてる．．．。まあ、普通は機械使うところだしね。

それにしても、ポーカーフェイスがなつてないねゝ、探偵君？

「これで満足か？探偵君．．．」

つて言つたところで、中森警部、到着ゝ

「これはこれは、中森警部．．．お早いお着きで．．．」つて言つたら

予告状解いてたつてさ。さつすが、長い付き合いなだけあるね

おお！！なんか、いっぱい来た．．．。気合い入ってるなゝ、中森

警部。

「今夜はあなた方の出方を伺つただの下見．．．。

予告状にちゃんと記したはずですよ？April foolつてね．．．」

おつと！忘れてた。ここで呆けてる探偵君に一言．．．

「よお、ボウズ．．．知ってるか？怪盗は鮮やかに獲物を盗み出す創造的な芸術家だが．．．探偵はその跡を見てなんくせつける、ただの批評家に過ぎねーんだぜ？」

では！

P O M

本物の予告状はきちんと置けたし、さつさと帰りますか。

それにしてもあのボウズ・・・何者だ！？おかげで事が運びやすかつたけど・・・。

もともと警察を呼び出すつもりだったしね。

只者じゃねえよ、あのガキ。調べる必要があるそうだな・・・。

” 4月19日

横浜港から出航する

Q・セリザベス号船上にて

本物の漆黒の星を

いただきに参上する

怪盗キッド”

漆黒の星4（後書き）

キッド、逃走しましたー！！

いやー・・・。書いてる本人が1番楽しんでもかもしれないです。

キッドのあの「よおボウズ・・・」のセリフは本当に気に入ってるんです！

キザですよねー・・・。

そこがすきなんですけどね

漆黒の星5

予告日の4月19日までの準備はとてつもなく、しんどかった。

まず、鈴木家に盗聴器を仕掛けたオレの愛鳥(?)のハトを飛ばし、模造真珠が大量に注文されたという情報をゲットとなると……ふふふ。

そして、もう1つの情報……。もちろん、あの”探偵”のこと。白馬とはまた違った雰囲気のある”探偵”は、あの毛利小五郎のところに

居候として住んでいるらしい。

名前は、名乗っていたとおり、江戸川コナン。偽名かと思ったんだけどね(笑)

しかし、その正体は、はっきり言って、全てが謎。怪盗顔負けだよ、まったく……。

そういえば、毛利小五郎といやあ、あの青子と一緒に真珠を見に行った時に

すれ違った鈴木財閥のお嬢さんと一緒に歩いてた娘……。

あれが、毛利小五郎の娘の”毛利蘭”ね……。

うわぁ……。空手の使い手だって！優勝経験有りかぁ……。すごいなあ。

な〜んか、おもしろいことになってきた

彼女になって、”探偵”のことをもう少し観察していたいな。

……。よし、決定

ということ、彼女の服のサイズを知るためにクリーニング屋へバイトに入り、

サイズの情報をゲット

詳しくはわかんないけど・・・。

こういうのって、『役得』って言うていいのかな？（笑）
さてと！！

準備OKだね　あとは、当日に1つだけ・・・ね

4月19日、予告日当日。

オレは茶木警視の声を使って、鈴木史郎氏に電話で
出航を2時間遅らせることを伝えれば。全て完了！

さあ、探偵くん・・・勝負といこうか・・・

漆黒の星5（後書き）

ようやくです！！ようやく、キッドとコナンの対決がメインの場所までやってきました。

時間かかりすぎですね、スイマセン。

いったいどれぐらいかかるのか、不明ですが、最後までお付き合いよろしくお願いします。

漆黒の星6（前書き）

想像の世界が広がっています。

漆黒の星6

オレは当初から予定していた通り、まずは鈴木史郎氏に変装して入船した。

そこで挨拶をしていたら後ろから奥さんが出てきて、真珠をつけるようにみんなに言いながら

「それはおろかな盗賊へ向けた私からの挑戦状・・・

さあ、みなさん、胸にお付けください！本物はもちろん1つ、あとは成功に作られた模造真珠です。さあ、盗れるものなら盗ってみなさい！！」

というセリフを背にして俺はパーティー会場を抜け出し、トイレへ。

そこで史郎氏のマスクをはずし、警官の1人に化ける・・・
これで第1段階終了

そろそろ、探偵くんがニセモノだと気づいて探しにくると思うんだけど・・・

と思つてたら、来た来た。

さてと・・・その危なっかしい探偵くんの最も身近にいる彼女なら、彼を迎えに探しているはず・・・行きますか。

甲板に出ると、目当ての彼女はすぐに見つかった。

「こんな所を歩いていると危ないですよ」と声をかけると、素早く構えやがった。

さつすが空手の使い手！！でも、警官だと知って安心したのか、構えを解いて

「ちよつと人を探してるんです。小学生の男の子、見ませんでした？」と聞いてきた。

「ああ、キッドの変装道具を見つけた子ですか？彼ならもう戻りますよ」

おそろくね。

「あ、そうだったんですか？」

オレはクスツと笑って

「弟さんですか？」と、答えを知っているのに、聞いてみた。

「あ、いえ。うちで預かってる子なんですけど・・・すぐにどこか行っちゃって・・・」

よかった。ちゃんと戻ってて。ありがとうございました。」

「あ、服にホコリついてますよ」と言いつつ、指に挟んだ麻醉針をさす。

「あ・・・ありがとう・・・ごさいま・・・」

うおっと！危ねえ・・・。倒れさせるところだった。

さて、ボートの上に彼女も移動させだし、彼女に変装させてもらって・・・。

まったく・・・探偵くんももっと彼女に気をつけてないとねえ。

こうやって、いつ何時怪盗が狙うか分からないと？なんてね（笑）

よし、そろそろ戻りますか・・・

漆黒の星6（後書き）

はい、キッドは蘭ちゃんに変装いたしました！

いったいいつ変装したのか勝手な想像ですが、こんなんでも許してもらえるでしょうか？

次から、パーティー会場に蘭ちゃんの姿で侵入したキッドとしてお話が進んでいきます。

では、次からもお楽しみ下さい。

漆黒の星7

オレがその場に戻ると、ちょうどこのお嬢さんの話をしていた。

オレってば、グッドタイミング

ほほを赤らめて「どーせ方向オンチですよ!」と言えば、何も疑われなかった。

警戒心ないんだなあ・・・。

すると、茶木警視が前に出てきて、オレが変装するのを防ぐために”合い言葉”を決めろってさ・・・。もう遅いよん　ここにいるしとりあえず、足元にいた探偵くん、合い言葉をどうするか、もちかけてみる。

「じゃあ、僕がホームズって言ったら・・・」

「私はルパンね!」

・・・あ・・・マズイ。普通はワトソンだよな・・・。

やべえ・・・ついクセで・・・と内心焦ってたら、急に証明が消えた。

すると、なんかキッドの格好したやつが現れた!!

・・・オイオイ・・・オレ、あんな派手なことしねーよ。いや、するか? (笑)

奥さんが銃で撃つたみたいだけど、アレもマジック。

・・・あ、やっぱりね。

まあ、オレはあんな風にはならないぜ?

それにしても、探偵くん気づかなさすぎー!! つまんない! と思っただら

気配が出てしまったのか、急に振り向いた。

あつぶねえ……。気配には敏感なわけね。嬉しいことだね。

とりあえず、この手元にしのばせてあるカード。

前でマジックショーやろうとしてる真田氏のに貼りつけて

みんなに見せてあげますか。
鈴木財閥のお嬢さんと一緒にその中からカードを引いたように見せかけてね……。

さあ、探偵くん……。ゲームスタートだよ

”クレオパトラに魅了されたシーザーのごとく
私はもう貴方のそばに……

怪盗キッド”

漆黒の星7（後書き）

こんにちは、ペロコです。

ようやく、キッド行動開始です。

ここまで長かった〜！

”漆黒の星”は、あと3話が4話ぐらいの予定です。
お付き合いよろしくお願いします。

あと、評価もお願いします。

漆黒の星 8 (前書き)

かなりセリフが原作とかぶってますが、許してください。

漆黒の星 8

It's ショータイム!!

オレは胸につけた真珠を下に落とし

「誰か拾ってください!!」と言った瞬間、用意してあった別の真珠を大量にばらまく。

今のところ、こっちの予定通り 混乱したすきに朋子さんの体を支えるふりをして

胸につけた真珠を・・・よし、GET!すると、鈴木財閥のお嬢さんが気づいたらしい。

指摘すると・・・

「きゃああああ!!」

うわっ!ビックリしたあ・・・。そんな悲鳴あげなくても。

というか、警部!いまさら奥さんのが本物だって気づくなんて遅すぎ まだまだだね。

さてと!用事は済んだし、あとはハンググライダーで逃げるだけ!・・・と思っていたら、急にあの探偵くんの手をつかまれた。それも、

「わかったんだよ!怪盗キッドの正体が!」

なぐって爆弾発言かましやがる。

まあ、いいよ。その推理、しっかりと聞かせてもらおうか、探偵くん・・・。

オレは探偵くん連れられて機関室へとやってきた。

とりあえず「ちょっと、コナン君?ここ、機関室よ!本当にこんなところに怪盗キッドがいるの?」ととぼけてみる。

すると探偵くんはその質問を回避^{スルー}して、宝石言葉について聞いてき

た。

知ってるかって？そりゃ、知つてるとも！・・・なんて答えられるはずもないので、聞き返す。すると、きちんと説明してくれた。

「真珠の宝石言葉は『月』と『女性』。これにあてはまるのは『鈴木朋子』さんだけ・・・だから本物はあの人が持ってたってわけさ！」

「へー。でも、なんでキッドの正体がそれで分かるの？」

とさらにとぼけてみると、すぐに「カードだよ・・・」との答え。

それも、マジックのタネまで見破っていたかあ・・・やるねえ。そして

「まさか、怪盗キッドの正体はあの真田っていうマジシャン・・・」とさらにさらにとぼけてみると、

「違うよ！あの人奥さんに近づいてないもの・・・」と否定の言葉。その間もずっとサッカーボールをけり続けている。うまいじゃん、と思つたらやめた。

そして、核心をつくセリフ。

「その人物は床にカードをばらまかせ、拾うフリをしてカードを一枚抜き、メッセージを貼り付けた・・・そして、それを手のひらにしのばせて、あたかもカードの束から引いたかのように見せかけたんだ・・・だよね？蘭ねーちゃん・・・いや、怪盗キッドさんよお！！！」

おお・・・。急に雰囲気が変わった。

さすが探偵。

漆黒の星8（後書き）

はい、止めちゃいました。ここで。

全部書くとあまりにも長くなってしまうので。ご了承ください。
さて、コナンさんの推理後編は次話ということになります。
お楽しみに！

漆黒の星9

探偵くんの推理は続く。しかもそれはおもしろいくらいに全てが正解で……。

しかも、あの日二セモノだから盗らなかったことまでバレてら。

よし……こうなったら……

「わ、わかったわ。そんなに疑うんなら、電話でここに警察の人を……」

「呼びましょう」と続けたかったのに出来なかった。

ついさっきまで探偵くんの足元にあったはずのボールが電話にぶつかって、電話が……

電話じゃなくなった……。

こいつ……。マジでやべえよ。足は凶器か？

この得意のポーカーフェイスも固まるって言ったら分かってくれる？

「ビルの屋上で消えたときと同じ手は使わせねーよ……。あの時お前が警察を呼んだのはオレへのあてつけじゃない……。あの閃光の中で素早く警官に扮し、彼らの中にまぎれ、姿をかくすためだ！ハンググライダーで今にも飛ぶかのように見せかけてな！」

あ、バレてたってことね……。

「それにこの場に人を呼ぶなんてヤバなマネは無しだぜ？こっちはこの警戒の中、たった1人で乗り込んできた犯罪の芸術家に敬意を表して一対一の勝負を仕かけてやってんだからよ……。そう……。優れた芸術家のほとんどは死んでから名を馳せる……。お前を巨匠にしてやるよ、怪盗キッド……。監獄という墓場に入れてな……」

……。へえ……。芸術家……。気にしてくれてたんだ、あの時言ったこと。

怪盗としては嬉しい限りだけど、タイムアップ時間切れかな？

「フ・・・参ったよ、降参だ・・・」

宝石を放り投げ、パーティーをめちゃくちゃにしたことを謝る。
でもこれだけじゃ終わらないぜ!?

「あ、そうそう・・・この服借りて救命ボートに眠らせてる女の子・
・早く行ってやらねーとカゼひいちまうぜ? オレは完璧主義者な
んでね」

と言って下着を引っ張り出したら、顔が真っ赤になっちゃった、あ
いつ。おもしれえ。

ま、今の隙に・・・

閃光弾!!

では、さらばだ!

また会いたいねえ・・・あの”探偵”・・・

漆黒の星9（後書き）

ハイ、コナンさんの推理後編でした。

楽しんでいただけましたか？と言っても、原作どおりなんですけどね。

とりあえず、次回で「漆黒の星」編は終わりです。

次回も読んでください！！

漆黒の星10

「ふえーつくしよい!!」

くそ・・・あのガキのせいで泳いで帰るしかなかったじゃねえか・・・。

カゼ引いたらどうしてくれんだよ。寒い・・・。

4月の海はまだ寒^{さみ}いんだな・・・。勉強になりました。

あゝあ・・・。寺井ちゃん、迎えにきてくれねえかな・・・。
・・・お？あの光・・・。

「寺井ちゃん!!」

「ぼっちゃま!ご無事で何よりです・・・。さあさあ」

「ふゝ助かったぜ。サンキューな寺井ちゃん。」

「いえいえ、ぼっちゃまに何かあつたら寺井は・・・寺井は・・・」

(寺井ちゃん・・・)

「それより、宝石は?」

「ああ・・・。失敗した。」

「は?今『失敗』とおっしゃいましたか?」

「ん?ああ・・・」

「そうですか・・・。それにしても、なんだか嬉しそうな顔をして
おりますね」

「ああ・・・。おもしろい”探偵”に会ったからな」

「”探偵”と言いますと・・・?」

「正体不明の小学生だよ・・・」

「小学生!?!」

「ああ・・・。おもしろかったよ、また会いたいな・・・」

寺井ちゃん、これは本当だぜ?あんなスリルたまんねえよ・・・。

翌日。

オレは見事に力ぜを引いた。

「ひーつくしょん!!」

「まったう、セリザベス号を見に行つて海に落ちるなんてバカみたい!!」

とは、青子のセリフ。

「うつせえなあ・・・」

あのがきのせいで泳いで帰るしかなかったんだよ・・・
なんて青子に言つてもしょうがないから言わない。

「バカは力ぜ引かないつて、あれ嘘ね!」

「おい、それどういう意味だよ!?!」

「そのまんまの意味よ、バ快斗!近づかないでよ、うつるから!」

「こんな力ぜ、すぐに治・・・ふえつくしょい!」

うー・・・寒氣してきた・・・。

ん?なんか後ろであの探偵くんの気配がしてるけど・・・。

まあ分からないだろうね、向こうには。こっちはしっかりと気配消してるし。

くそお・・・今度会つた時は覚えてろよ!!

「オマケ」

「なんじゃこりゃー!!」

盛大な叫び声は、新聞を見たせい。

あの探偵くんが1面トップ記事となり写真つきで載っていたのである。

『怪盗キッドを撃退!?!』とか、『たった1人で漆黒の星を死守!』とか・・・。

オレは撃退された覚えはねえし、「死守」って・・・。

オレ攻撃してねえぞ?精神的ダメージはあったかもしれないけど。

次の対決はオレの勝利で1面を狙うから覚悟しとけよ?探偵くん・

漆黒の星10（後書き）

とりあえず、「漆黒の星」はこれにて終了いたしました。

次は、「奇術愛好家」です。

キッドのお話、まだまだ続くので、楽しんでもらえたら何よりです。
それでは、今後もしょろしく願います。

奇術愛好家1（前書き）

大変長らくお待たせしました。
奇術愛好家編スタートします。

奇術愛好家1

オレがそのチャットを見つけたのは、偶然だった。

もともと、キッドとしての情報集めはパソコンから手に入れることが多かったけど、

たまたまマジックのサイトも見てみようと思い、のぞいたのがそのサイトだった。

名前は”奇術愛好家連盟”。そのサイトの中のチャットに参加してる人の中で気になる人物を1人発見したんだ。

それは「イカサマ童子」というHN。ハンドルネーム

これは、春井風伝さんがデビュー当時に使っていた名前だった。

調べてみたら、すぐに分かった。彼本人だったのだと・・・。

オレはそのチャットに参加し、「レッドヘリング」というHNで彼がやると言い出した脱出マジックの前日に励ましメールを送っていた。

彼はそのマジックに失敗し、亡くなってしまったけれど・・・。

そんなことがあった1カ月後ぐらいに、そのチャットのメンバーでオフ会をやることが決まった。

もちろん、参加するという返事を出しておいた。気になることもあったし・・・。

オレは、怪盗キッドという名前を並び替えた”土井塔克樹”という名前で参加することにした。

気になることは次の2点。

「イカサマ童子」は、亡くなったはずなのにまだチャットに参加し

ていること。

そして、もうひとつ・・・。

「魔法使いの弟子」というHNで入ってきた、あの鈴木財閥のお嬢さん。

もしかしたら、あの探偵くんのことか聞けるかもしれないしね。

という理由から参加したオフ会のはずだったのに、殺人事件に巻き込まれることになってしまったんだ・・・。

奇術愛好家1（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

先日、「早く書いてー！」というメッセージをいただき、至急執筆に取り掛かせていただきました。

遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

さて、奇術愛好家……。これも、キッドがカッコいいんですよ！ということで、ラストをどんな感じにするかは決めてあったんですが、殺人事件の描写がどうにも出来なくて……。どうやら、事件の話は苦手みたいですネ、うち。

そんなわけで、軽い言い訳をしつつ、これからも頑張っていくのでどうか暖かい目で見守ってやってください。

お願いしますm（――）m

奇術愛好家2

オレがそのペンションに着いた時には、あのお嬢様と、「影法師」さんと「脱出王」さんが来ていなかった。

とりあえず、荷物を置きに部屋へ上がらせてもらおう。
すると、

「お待ちしましたよ！」というオーナーの声が。

お、来たかな？

窓から眺めてみると、なにやら人ばかり……。

おや、探偵くんまで……。ん？マスク？風邪でも引いてるのかな？
とりあえず、下に降りてみるか……。

お嬢様に「あれ？もしかして『魔法使いの弟子』さん？僕ですよ、土井塔克樹！」

ん？なんかがつかりしてる？何期待してたんだか……。

「やっぱり女の子だったんだね〜！感動」

すると、「僕も泊まっていいい？」と探偵くんの媚びた声。

探偵くん……。ダダこねるんだ……。

あの対峙の時はそんな様子、少しも見せてなかったのに……。意外

さてと、探偵くんも帰ったところで、ボードリーダーである「脱出王」さんに連絡してみることになった。……が、電話にでんわ……。

もちろん、この時点で死んでるなんてこと、分かるわけなかったんだけどね……。

とりあえず、自分の部屋のベッドシーツをかえるために再び部屋へ。

。。

フウ・・・ずっと変装してるのはしんどいや・・・。体も重いし・・・。

それにしても、探偵くんが現れるとは思わなかったな・・・。ハハハ。

ビックリするじゃん!!

そして、そのオレをさらにビックリさせる発言が飛び出したのは、昼食の時だった。

奇術愛好家の集まりだけあって、やっぱり話のネタといえば

「尊敬する日本のマジシャン」。

さりげなく、オレの親父　黒羽盗一を出してくれたオーナーに感動!

で、やっぱりオレも親父は尊敬してるわけで・・・。

って感じで、続いていって鈴木財閥のお嬢さんの番になった時、

「そりゃー、もちろん怪盗キッド様よ!」なんて言うもんだから

一瞬気配が出掛かってしまった・・・。あつぶね。気づかれてないと思うけど・・・。

「日本人かどうか分からないし・・・。」とごまかしても、オレと言い張る彼女。

確かこの間オレに自分ちの宝石狙われてなかったっけ・・・? いいのか? お嬢さん・・・

奇術愛好家2（後書き）

みなさま、どうも読んでくれてありがとうございます。ペロコです。
はい、やっちゃいました！！

快斗くんのダジャレ攻撃！

いったい何人の人が笑い、何人の人があきれたのか……。自分でも予測不可能ですね……。あきれたのが多いに決まっていますよね。・。コテコテのダジャレ、失礼しました。

ぜひぜひ「自分はこうだった！」と報告してくれたら嬉しいです。
最後の快斗の疑問は、いつもうちが園子ちゃんに思っていることです。いいのか？と……。代弁してもらいました。

それでは、みなさん、次は奇術愛好家3でお会いしましょう！
ペロコでした。

奇術愛好家3

。そんなビックリの昼食も終わり、再び電話をしようと思ったら・・・
つながらないらしい・・・。まったく、どーなってるんだ！？
そんな中、毛利さんが玄関先へ・・・。どうしたんだろ？

そしてそれが分かったのはその3分後。毛利さんが探偵くんを抱えて中に入ってきた時。明らかに熱が上がっていきそうなその様子にオレは

「まず君の部屋のベッドへ運ぼう。タオルで汗をふいといてあげて」と言い残し、俺の部屋へ大急ぎで戻る。

まったく、こんな時に役立つとは思っていなかったけど・・・。解熱剤。

どこで何が起きるか分からないもんだねえ・・・。

毛利さんの部屋へ急いで向かう。

「見たところただの風邪だと思うので、薬を飲ませて安静にすればすぐ楽に・・・」

『なると思いますよ』という言葉の前に、鈴木財閥のお嬢さんの鋭いツツコミ。

「見たところって？」というので遮られてしまった。

けっこうイタイとこつくねえ・・・。まさか『銃で撃たれたのを自分で手当てしたことある』なんていえるわけないし・・・。

「僕、医大生なんです！」とごまかしておいた。ハハハ・・・。

オーナーの提案で再度、「脱出王」さんに連絡を取ろうとするが・・・

。。

やっぱり電話がどこかで断線しているらしい。

ということで、仮のリーダーを決めることになったんだ。

すると、浜野さんの提案でマジック風に決めることに……。

鈴木財閥のお嬢さんに目隠しをして、そして、田中さんが紙に名前を書いていく。

そしてそれを田中さんは鈴木財閥のお嬢さんに渡す。

浜野さんが、×、の印を描くように指示した。なんでも、は仮のリーダー、×は宴会部長（ここでのオレの抗議は軽く流された）、は風呂焚き係らしい。

すると浜野さんは『予言』とか言い出して、次々に当てていく……。

が黒田さん、が田中さん。

ここまでではよかった。

になったとき、浜野さんは『予言』でオレと言い出したのだが、なんと実際は浜野さん自身！とりあえず、部屋を追い出すようにして、ネタを考えてきてもらう。

それにしても、このマジック……

奇術愛好家3（後書き）

たびたび話していますが、更新が遅れて申し訳ありません。ペロコです。とりあえず、奇術愛好家3は楽しんでいただけたでしょうか？今回は、コナンが再びここ、ペンションに戻ってきたというのと、浜野さんのマジックですね。

前者はコナンの手当てをしていた時の快斗のごまかし「医大生」と言う言葉がけっこう気になってまして・・・。

後者は快斗がどのあたりでマジックの仕掛けに気づいていたかということですね。まあ、うちの読み？は最初から！ということなんですけど・・・。みなさんはいかがですか？というか、最後に言うじやんって？はい、そうですね・・・。

それでは、こんなのろまな作者ですが、これからよろしく願います。また、何かメッセージなど送ってくださいとすごくありがたいです。お願いします。

それではまた。

奇術愛好家4（前書き）

ようやく事件が・・・！

奇術愛好家 4

オレの疑問をよそに、とりあえずそれぞれの人が自分の役割につくことになった。

浜野さんは自室へ、田中さんは風呂焚き場へ。

そして、黒田さんとオレはここで晩御飯の準備。

オーナーはワインを取りにワイン蔵へと向かった。

鈴木財閥のお嬢さんは、探偵くんの様子を見に行った。

さて、準備も順調に進み、みんなほちばちと帰ってきた。

まだ来ていない「影法師」と「脱出王」さんの話をしていたら、急に

「来ないよ・・・」

という探偵くんの声がした。

なんと、「脱出王」さんが自宅のマンションで殺されたと言っ
たのだ！そして

「殺された西山さんのそばにあったコンピューターのモニターに伝
言が残されてたんだ・・・」まずは1人目、影法師”ってね・・・」
という探偵くんの衝撃的な告白！！

わざわざそれを伝えるために戻ってきたという・・・。

そして、田中さんの「浜野さんも二人の口論に口を挟んどばつち
りを受けてたわね・・・」というセリフに、浜野さんに伝えようと
いうことになった。

浜野さんの部屋に入ると彼はおらず、そのかわりに窓が開いていた。
すると、その外には・・・！！

みんな外に飛び出し、オレを先頭に彼の元へ行く……が……。

「来るな！来ても無駄だ……もう死んでるよ……それにこれ以上、現場を荒らしたくない……」

すると探偵くんが後をついで、

「見て分らない？死体はロτζから10m以上離れてるし、その死体の周りには、今駆け寄ったあの人の足跡しかないんだよ？」
と詳しい説明をしてくれた。さすがだな。

「そう……これは翼を持たない人間には到底成し得ない犯罪……不可能犯罪だ……」

オレたちの間を冬の冷たい風が通り抜けた……

奇術愛好家4（後書き）

こんにちは、ペロコです。

奇術愛好家4はいかがでしたでしょうか？いよいよ事件が起こりました。この日は快斗にとつて、災難な日でしたでしょうね・・・。

さて、昨日はサンデーにて「まじっく快斗」が4年半ぶりに掲載されたということで、かなりハイになっておりました、ペロコでございます。いやあ・・・。本屋でうちを見かけた人がこれを読んでいる中ではないのを祈りますね。すごい顔でニヤニヤしてたと思うので、通報されてしまう可能性もあったわけであります（笑）

さて、奇術愛好家4のお話ですが・・・

ここでは事件が起こったというのを中心に書かせていただきました。毎回悩むのですが、どこで区切れればいいのかと。原作の方では続いていても、ここでは区切ってしまったていたりするので、イライラされてるかたとか、いらっしやいます？けっこう不安なのですね。1話がだいたい、600～800字ぐらいでいつも書かせていただいているのですが、短いのでしょうか？

何か意見・感想などありましたら、メッセージまたは感想にてお知らせください。

それでは、これからよろしくお願いします。

奇術愛好家5（前書き）

快斗の意味深なセリフが続きますが・・・。
心境はこんな感じでいかがでしょうか？

奇術愛好家5

『これは翼を持たない人間には到底成し得ない犯罪・・・不可能犯罪だ・・・』

「確かにそうね・・・こんな広い裏庭の真ん中に足跡を残さず移動するなんて出来ないわ・・・」と田中さん。

「どーして殺されなきゃいけないの!？」と、毛利さん。

「理由はまだ分からない・・・今言えるのは死因が絞殺だということ。誰かが細い系のようなもので、首を絞めて殺し、ここに運んだということだけさ・・・このロッジの近辺にいる誰かがね・・・」

・・・はっ!! オレは何をべらべらとしゃべってるんだ! ? それも探偵くんの目の前で!

いくらなんでも、一般人がここまで詳しく話せるわけねえってのに・・・。

すると、探偵くんが「つり橋は落とされた」なんてすごいこと言うもんだからつい、

「つまり僕たちは外界と完全に隔離されちゃったわけだね・・・」
と思わずつぶやいてしまった・・・。探偵くん、怪しいと思ったよね・・・。さすがに。

もう・・・ポーカーフェイスさままだよ。ボロボロだ。

とりあえず、中で助けが来るのを待つことになった。

すると、園子嬢が、「浜野さんが殺されたのは自分のせい」みたいなこと言うから、気にすることはないと励ましておいた。そう、宝

くじと同じようなものなんだから……。
それに……それにあのマジックは……

……つと、探偵くんいわく、「ここで待ってたら警察呼んできてやる」と毛利迷探偵に言われたらしい。警察かぁ……。話すの避けたいよな……。

とりあえず、みんなで浜野さんたちが殺された原因を探ってみることにした。

で、すぐに結論。

『チャット』

つまり、「影法師」さんが犯人ということ……。

「もし、『影法師』さんが犯人だとしたらあの不可能犯罪をしたことになります……。僕たちの目の前で血塗られたマジックショーをね……。」

奇術愛好家5（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

奇術愛好家5を読んでいただきありがとうございます。年の瀬に、とりあえずここまで投稿させていただきました。いかがでしたか？ けっこうキザなことを連発する土井塔さん。心境はいかなものかと推測してたら、結果『焦り』ということになりました。

いくら事件が起こったとしても、普通の人間があそこまで死体の状況を確認できるとは思えませんね。「医大生」と名乗っていたとしてもです。ということ、ポーカーフェイスで焦りを隠していたということにさせていただきました。

次のお話はもちろん年が明けてからということになりますが、次は今までもより文字数を増やすつもりです。一気にお話が進みますので、どこまでいくのかなと予想を立ててみてください。

あ、いやですか？失礼しました。そこは、ご自分の判断におまかせします。

では、来年もキッドsideをよろしく願います。そして、感想・意見などお待ちしてます。

奇術愛好家6

『僕たちの目の前で血塗られたマジックショーをね……』

こんなオレの発言のせいでみんな固まってしまった。ヤベ……。不安がらせてどーすんだよ……。

すると天の助けか、田中さんが「羽織るものがほしい」と言い出し、さらに毛利さんが探偵くんに着せるものを取りに行くと言い出したので、ついていくことにした。

用心深く部屋のドアを開ける。

田中さんの「部屋に入るぐらいでビクビクしなきゃいけないなんて……」というセリフがいかにも的を得ていた。

着替えながら探偵くんは毛利さんにいなかった時のことを聞いている。

と、田中さんが早くしてほしいと頼んだので、中断された。

さて、次は田中さんの部屋。部屋に向かう時オレは必死に考えていた。

「影法師」が本当にこのロッジに潜んでいると考えるのは難しい。

オレたち以外に人の気配がしねえ……。なら、誰が犯人？

それにもうひとつ気になるのはあのマジック……。あれは……と考えていたらパリン！！とガラスの割れる音がして、ボーガンの矢が壁に突き刺さる。

そしてなぜか田中さんが窓を開けてしまう！

何やってんだ！と思い止めようとしたら今度は下でパリン！と音が。そして園子嬢の悲鳴！！

あわてて階段を駆け下り、そこへ行くと鏡に矢が！そして、窓が開いていた……。

・・・と、田中さんがやってきて、外に飛び出してしまった。

「どこの誰だか知らないけど、コソコソ隠れてないで出てきなさいよ！」と

叫んでいる・・・。すごい度胸。いや、感心してる場合じゃないんだけどさ。

つてあれ？足跡だらけ。

するとオーナーがボーガンを見つけた。

よって、オレ達の中に犯人はいないということになったのだが・・・
「くそっ！！」

探偵くんが振り返ったが気にしない。これはオレの問題だから・・・。

なんであのマジックの時に少しでも疑わなかったんだ！
そしたら・・・くそっ！！

とりあえずみんな戻ることになった。

と、横で園子嬢が滑ったから慌てて受け止める。

「大丈夫？」と聞くと「ええ・・・」と答えた。

本当、おっちょこちょいなお嬢さんだな・・・

奇術愛好家6（後書き）

みなさま、明けましておめでとうございます。ペロコです。

新年明けて2日目。奇術愛好家を更新させていただきました。この小説、続々と読者数が増えており、なんとも嬉しい限りです。

さて今回。

前回少し長めと言ったのですがたいして変わらないことが判明しました。やはり長い文章はなかなかかけないのですよ。スイマセン。話の内容としましては・・・。

やはり最後の快斗の意味深な行動の解明に全力をそそいだのですが・・・分かっていただけましたか？

どう解釈すればいいのか、かなり悩みました。快斗は反省してたんですね。あのマジックの時のことを。

一応、詳しく書くのは伏せさせていただきます。

最後にきちんと書くので・・・。

さて、ロッジに戻ったあとのみんなの行動。

今回はセリフが多くなりそうです。

では、今年もよろしく願いますね。

評価・感想お待ちしております。

奇術愛好家7（前書き）

会話が多いですね。今回は。

誰がどのセリフを言ってるのか分からなければメッセージでもください。お答えさせていただきます。

と言っても、マンガを見ればすぐに分かるのですが・・・。

ではどうぞ・・・

奇術愛好家 7

とりあえずロツジに戻ってきたオレ達に探偵くんは事件当時のアリバイを聞いてきた。

探偵くん行動開始だな。

やはりみんな外に犯人がいると思っているのか、探偵くんの行動を怪しがる。

ので、助け舟。

「そうだね、この際はつきりさせとこう。オレはその頃黒田さんと食器を並べて宴会の準備をしていたよ。・・・ですよね？黒田さん。」

「例えば、あとは次々と話がつながっていく。」

「ええ・・・並べ終わった後キッチンに行って手伝いを・・・」

「手伝いつて？」と探偵くん。

「荒さん（オーナー）に言われてツマミを作ってたんだ」

「黒田さんがキッチンにいる時土井塔さんは？」

「あ、ああ・・・宴会用に持ってきてたクラッカーを取りに部屋へ。」

・・・

「へー・・・クラッカーねえ・・・」

な、何だよ、その疑いの目は！？本当のことだよ！

はっ！まさかもう正体見破っちゃってたりする？

と、園子嬢が「コナンくんの具合を見に蘭の部屋へ行った」と言うのと、毛利さんが答えて「二人でこのリビングに降りてきた」と言った。

田中さんは「薪で風呂を沸かしてた」、オーナーは「ワインを取りにワイン蔵へ」という。

時間は約8分。オーブンを使っていたから間違いないそうだ。

「でも、ワインを取りにいくのに8分もかかる？」と探偵くんの抗議。

「ワイン蔵に新しい鍵をつけたのを忘れてて、部屋に録りに戻ってたから・・・」

「新しい鍵？」

「なんなら直接見てみます？」

ということで、みんなでワイン蔵へ・・・

前に泥棒に入られてしまったそうだ。ちなみにオレではない！！すると探偵くんはついでに風呂焚き場まで見たいと言い出した。ひさしに登れば、誰でも2階にいけることが分かった。

・・・ん？あれ？探偵くんがいない？またあのボウズ・・・勝手に・・・

と思って探しに行ったら、思ったよりすぐに見つかった。

なにやら必死になって考え込んでるせいか、まったくオレに気づいていない。

ということで、からかい半分に、

「操作は順調に進んでるかい？探偵くん？」と尋ねたら

「まあ、ぼちぼち・・・」だつてさ。

毛利さんたちも追いかけてきたので、おろしてやる。

すると園子嬢にマジックのことを詳しく聞いていた。

ということは、だいぶ分かってきたのかな？探偵くん・・・

奇術愛好家7（後書き）

はい！みなさま、こんにちは。ペロコです。

奇術愛好家もかなりの人気があるのか、たくさんの感想やメッセージありがとうございます。本当に励みになります。今、宿題に追われているのですがそんなことほったらかしにして書いています（大丈夫なのか？）

さて、話を戻しまして、今回前書きにも書きましたが、ひたすら会話が多いです。まあ、事情聴取みたいな感じですからしょうがないんですけどね。あともう1回セリフだらけになるのが、コナンさんの推理シーンですね。これはもう少し先になると思いますが。

それと、コナンくんが疑いの目を土井塔さんに向けた時のマンガでの土井塔さんのこの「・・・」のセリフ。心の中ではこんな風に思っていました！！と自分で推理（笑）いかがですか？

毎回言うことなんです、本当に不安なんですよね。

こんな風に思っていないんじゃないか！？と反発の声とかきそうで・・・。今のところきてませんが。嬉しいかぎりです。ご賛同してくれる方々、本当にありがとうございます。

そして、これからこのキッドsideをお願いします。

それでは、感想・評価・メッセージなどお待ちしております。

奇術愛好家 8

中に入って、コーヒーを入れて落ち着くことになった。

と、オーナーがワインを持ってきた。「軽く一杯」ということらしい。

すると、探偵くんがワインを手にとって・・・ってあれ？表情が変わった？

あの時オレを追いつめたあの笑み・・・もしかしてこの事件解けた？
と思つてたら急に冬休みの仕事をやりたいと言ひ出すし・・・。
見間違ひだったのかな？オーナーについていった探偵くん。

そんな彼の姿は、5分後消えていた・・・。

オーナーによると、トイレにはおらず、しかもボーガンの矢までなくなっているらしい。

どういうことだ！？

まさかあの探偵くんがやられることはないと思つただけど・・・。
と、探偵くんの悲鳴2階で！！ドタドタとみんなで階段をのぼっていく。

ようやく発見した探偵くんにホッとしたのもつかの間。

またしても窓ガラスが割れてボーガンの矢が！

そして急に探偵くんは外に飛び出し右側の林へ。

ようやく追いつき、毛利さんにつかまれた探偵くん。

あれ？笑つてる？

と、園子嬢に呼びかける。「うまくいったよ！」と。

すると、急に園子嬢が・・・これつてもしかして噂に聞いた・・・
園子嬢が毛利さんにボーガンを取るように言い、浜野さんの部屋へ

行くように指示した。

そして言った。

「私と蘭とで再現するのよ……今夜この裏庭で犯人が演じた血塗られた奇術ショー^{マジック}をね……」と……。

探偵くんが後ろで園子嬢の声を出してるみたいだけど……。あの機械……。何!?

とりあえず、ボーガンを持って毛利さんが走っていく。

そして、オレはついていく。そばにあった木に盗聴器をしかけて。

「長いヒモとハサミがあれば、この不可能犯罪は可能になるのよ……」

と前置きし、探偵くんの推理ショーがスタートした。

盗聴器の状態も良好だね

オレはそのセリフを背に毛利さんのあとを追いかける。

さて!

じつくりと聞かせていただくのか、探偵くん?

奇術愛好家8（後書き）

みなさまこんにちは。ペロコです。

今回も読んでくださってありがとうございます。

さて今回。

奇術愛好家でコナンが動き出しました。ようやくです！ただけ時間がかかってんだ！？と文句の声が聞こえてきそうですが・・・スイマセン。

自分でもかなりゆっくりになってしまってるなと思っているのですが・・・2,3日に1話のペースですね。最近は。学校が始まったらもつと難しくなると思うので、もつと早くやりたいのですが・・・申し訳ないです。言い訳がましいですね。

コナンの推理は次回からということになります。今回は前置きだけで・・・。

大体、あと3話ぐらいかな、奇術愛好家は。

それでは、これからもしよろしく願いますね。

評価・感想お待ちしております。

奇術愛好家9（前書き）

はい、いよいよやってきました！コナンの推理ショー
かなり原作に忠実に書いてるつもりですが・・・。

多少は省略・言い換えなどあります。

ご了承ください。

では、どうぞ（＾＾）

奇術愛好家 9

盗聴器から探偵くんの推理が入ってくる。

「まず、二本のボーガンの矢の後端に穴をあけておき、そこにヒモを通して小さな輪を作って結び、その二つの輪にあらかじめ長さを測っておいたヒモを通すのよ！ヒモの中間に別の二本のヒモを結^ゆわえつけた長いヒモをね！そして輪に通した長いヒモの両端をベランダの手すりに結びつければ準備OK。後は、矢を1本ずつボーガンで撃ち放つだけ・・・」

という声をバツクに毛利さんのいる部屋へ・・・。

探偵くんのいる木の根元を狙うのか・・・。了解

「待った！」と言って、毛利さんの手を止める。

「僕が代わりに撃つてあげるよ！こういうの得意だから・・・」
トランプ銃使つてりやね・・・。

「いいかい、園子探偵？」と尋ねると、了承の返事。

「んじゃー、お言葉に甘えて・・・」

パシュッ！

お！「ビンゴ」

そして、もう1本をちょうど向かいの木の根元に撃てば・・・

「矢によって作り出されたヒモの形が、まるでヨットのマストに張られた二枚の帆を形どるように・・・」だそうだ。

そして、フトンを縛ったヒモについている小さな輪に、ヨットのマストに当たる二本のヒモの片方を通す。

そのフトンベランダからロープウェイのようにおるせば・・・

「死体は見事、裏庭の中央に・・・」

浜野さんの場合は、ベルトの穴に通したらよいこと。

後始末は・・・

「ヨットのマストにあたるもう1本のヒモを矢に結び付けて、左右どちらかの林の上空めがけて撃ってちょうだい！ベランダに結びつけたヒモを切るのと同時にね！」

という指示に従って撃てば・・・

ヒモだけ抜けたんだな、これが・・・。

しかし、問題が1つ。矢が木にささったままということ。

「だから犯人はつり橋を燃やして私達を外界から隔離したのよ！警察が来る前に矢を回収するために・・・そうでしょ？犯人の田中貴久恵さん？」

って言うてる探偵くんの声を聞きながらオレは毛利さんを眠らせて隣の部屋へ今のうちに運んでおく。

おそらく、ここに探偵くんがやってくるだろうから・・・

奇術愛好家9（後書き）

こんにちは、ペロコです。

いかがでしたか？コナンの推理第1部。セリフが多いのが特につらいですね。

コナンが一方的に話してるのですが、キッドの心情を間ではさむのがけっこう難しいんですね・・・。

次のお話もこんな感じで続くと思いますが、またよろしく願いますね。

それでは、次はなんと、21話目なんですな。全部で。ビックリです。

応援してくれてるみなさま、ありがとうございます。

奇術愛好家10（前書き）

コナンの推理第2部です。

投稿するまでに時間がかかり、間が空いてしまったので、どこまでいったか分からないという方は、戻ってお読みください。
でも、最後の一言は冒頭に書いてるんですけどね。

では、コナンの推理をどうぞ

奇術愛好家10

『そうでしょ？犯人の田中貴久恵さん？』

田中さんはやはり否定していた。『自分は襲われた』ではないかと。しかし、探偵くんにとってみれば『仕掛けは簡単』らしくて……。

「窓の上の壁にホツチキスのハリを打ち込みそれにヒモを結わえつけ、そのヒモの適当なところにオモリをつけ、あまったヒモを上階の手すりの柱に通し、窓の下から部屋の中に入れればいいこと。

そして、そのヒモをベッドの上で固定し、洋服で隠しておけば、服を取るフリをしてヒモを切ると、窓ガラスが割れ、それと同時に隠しておいたボーガンを背中越しに撃ち、矢に気をとられているすきに、ヒモを再び引つ張り上げ、カーテンを開けガラスが割れているのを見れば、外から矢を撃ち込んだように見えるって寸法よ！」

……なんとまあ、すごいトリック。でも、あの後風呂場にも……

「あの仕掛けも同じく簡単！」と前置きして、推理再開。
要約させてもらおうと……

オモリのついたヒモを風呂場の窓の上にホツチキスで止めて、ヒモを手すりから上に通し、ストッパーをつけ窓の下にはさむ。

すると、窓を開けストッパーを外せばガラスが割れる。

矢はあらかじめ撃ち込んでおけばOK。

そして、オレらが風呂場へ向かっているスキに仕掛けを回収。

ちなみに、林の中で見つかったボーガンは、田中さんがあらかじめ

つけておいた足跡にみんなが気をとられているすきに放り投げたもの。

田中さんがあの時しりもちをついたのは、木にささった矢をぬいた反動。

しかし、田中さんはまだまだ食い下がる。『風呂を炊いていたから』と。

「あの時、浜野さんの奇術^{マジック}のサクラをやったあなたなら、誰が何の係になるか分かってたはずよ！」

そう。あのマジックは、印を仕込んだ紙の順番を知ってる者が紙に名前を書き、それを奇術師^{マジシャン}が言い当てる手品。

田中さんは印をつける園子嬢に、かけないペンを渡したのです！！つまり、園子嬢は目隠しをしていたし、また周りのみんなは書けないペンだと気づかず、園子嬢が書いたものと錯覚させるマジック。

よく分かったなあ・・・話聞いただけなのに。

「そんなに言うならあるんでしょうね！？証拠が！！」

「あら、証拠ならあるわよ、あなたのブーツの中に矢の後端に輪がついたもう1本の矢がね！わたし見ちゃったのよ・・・ここにきてあなたが矢をブーツの中に入れるのをね。影法師もおそらく、事件の罪をかぶってもらったために田中さんが作り出した架空の人物。もともと、『田中貴久恵』の名もIDも、別の人のを使ってるかもしれないけどね・・・」

「『田中貴久恵』もそのIDも正真正銘私のものよ・・・あなた達にそそのかされて死に急いだ『春井風伝』の孫娘のね・・・」

奇術愛好家10（後書き）

みなさん！はい、ペロコでございます。

奇術愛好家10話目ですね。キリのいいところで、漆黒の星と同様に、10話目で終わらせたかったものの、「長すぎはうちの作品に似合わない！」と勝手な判断の結果、またしても伸ばさせていただきました。スイマセン。それでも、今までの話よりも文字数多いんですよ？

さて、今回は、コナンの推理第2部と勝手に命名し、話を書かせていただいたのですが……。いかがですか？途中、キッドの要約とさせていただいたのは、あまりにも「」が多くなりそうだったからという単純なことなのです。まあ、原作をそのまま写すわけにはいかないのです。

さあ！今回は、奇術愛好家ラストです。

終わり方……。これでいいのか？と自分でも疑問なのですが、受け入れてくれる事を祈って……。

それでは、次のお話「奇術愛好家11」でお会いしましょう（＾－＾）ノ

奇術愛好家11（前書き）

奇術愛好家いよいよ最終話です。
お楽しみください・・・

奇術愛好家 11

『春井風伝の孫娘のね・・・』

「は、春井風伝の孫娘!?」と驚きの声が聞こえる。

春井風伝さんは、田中さんのIDを使い、「イカサマ童子」として交信していたらしい。それに気づいたのは、遺品を整理していた時。そして、今回の動機は・・・

「許せなかったのよ・・・おじいちゃんが事故死した後の西山さんと浜野さんのあのコメントだけは・・・!」

そう、そのコメント、オレも覚えてる・・・

“ いやー、舞台の上で死ねて彼も本望でしょう（笑） ”

“ 年寄りの冷や水ってヤツですか?（^^;） ”

・・・確かにヒドかった。

しかも、春井風伝さんは、あの脱出マジックが成功したら正体を明かすつもりだったらしい・・・。

「でも、彼は気づいてたみたいよ・・・あのショーの前日におじいちゃんに励ましのメールがきてたから・・・」

「彼って?」

「土井塔くんよ・・・」

「でも、どーして彼が!?!」

と、聞いてたら廊下からコツコツと足音が・・・

「それはおそらく彼も奇術^{マジック}の使い手だからかな?

土井塔克樹はアナグラム・・・文字を並び替えると・・・」

「怪盗キッド!!」

カチャとドアが開くと、そこには探偵くんの姿。

「見事な推理だったぜ、探偵くん？」

「蘭はどこだ？」

開口一番それかよ・・・せつかく褒めてんのに・・・

「隣の部屋でかわいい顔して寝てるよ。どうもあの手の顔には弱くてね・・・」

青子に似てるんだよ、あの幼い寝顔が・・・。

「レッドヘリング・・・おまえのハンドル通り、惑わされるところだったぜ・・・」

おいおい、別に惑わすつもりは無かったし、ここに来たのは、イカサマ童子が交信を続けているのを不信に思ったから。

そして、園子嬢におまえのこと聞けるかと思ったからだよ・・・

まあ、後者の方は口に出して言うことじゃねえけどな。

「彼女を一目見て孫娘と分かり、サクラの事も見抜けたが、まさか殺人とは・・・気づいた時には手遅れ。情けねーぜ・・・」

「感情的な性質は時には推理を妨げ、真実から遠ざける・・・止めたかったよ、今回の殺人は・・・」

それは違うだろ？

「オレは探偵じゃねーし、お前は風邪でぶっ倒れてた。仕方ないさ・・・」

って言ったところで、救助のヘリの到着。もうお別れの時が来たようだな。

「また会おうぜ、名探偵・・・世紀末を告げる鐘の音が鳴り止まぬうちに・・・」

P O M

と、ハンググライダーで飛んでいく。ヘリとすれ違う。

キザって思われてもいいさ……。

探偵くん、気づいたかな？

初めて“名探偵”と呼んだことに。

オレはお前の実力認めてるよ。あの事件、しっかりと解決してみせたじゃねーか。

それにしても……

本当にあのボウズ……小学生か！？

奇術愛好家11（後書き）

こ、こんにちは。ペロコです。

いかがでしたか？今回で、奇術愛好家編は終了でございます。

ラストは・・・いまだに自分でも疑問を感じた終わり方なのですが、これでいかがですか？何度も練り直して、結局この形で落ち着く事になりました。

キッドが「名探偵」と呼んだのは、これが初めてなのです！ということに気づき、こうなりました。

感想が怖いですが・・・

感想・評価お待ちしております。

これからもキッドsideをよろしくお願いします。

小休憩 1

みつなさん！

こんにちは！黒羽快斗です 楽しんでいただけてるでしょうか？

最近、読者数が、2800人を突破しかなり舞い上がっているペロコが横で「喜びの舞」を踊っております・・・。

ここは、みなかったことにしてあげてください・・・。

黒羽快斗の切実な願いです。というよりも、見なかったことにしておいたほうがよろしいと思います。もう、それは言葉に出して表すのも難しいほどのものでしたから・・・。

P O M

みなさま、こんにちは、怪盗キッドです。

雰囲気を変えるために引っぱり出されました・・・。

さて、この度は、読者様からたくさん応援メッセージなどいただき、先日「奇術愛好家」が終了いたしました。

こうやって改めて登場させてもらったのには、理由^{わけ}がありまして・・・。

簡単に申し上げますと、ちょっとした休憩場なのです。

長々と語りをやっていますと、最近本誌にも載り、忙しいので疲れてるんですよ。

ということ、このように休憩の場を設けさせていただきました。

さて、休憩と言っても、あまり話すことはありませんが・・・。

そういえば、前回の終わり方、いかがでしたでしょうか？私が彼のことを“名探偵”と呼んだのは、あそこが初めてなのですね。

まあ、あの事件をすぐに解決したあの推理力・そして、毛利さんが

危険だと知った時に、風邪を引いていようと戻ってきた時の行動力・
・。

この時はただ者じゃないとしか考えてませんでした。次会った時にその正体に気づくのですね・。

・・・もう、お分かりですね？次は、「世紀末の魔術師」をお送りします。

今これを読んで「えゝ！？」『黄昏の館』じゃないのゝ！？』と思われる方、申し訳ありません。
冒頭にて、私が述べた挨拶、覚えていきますでしょうか？

『原作ですでに書かれていても放送されていなければ、そこはカットさせていただきます。』

あ、映画の方もですよ！』

これです！この『映画』というのには、「『世紀末の魔術師』をやりますよ」という意味も含まれていたのです。

ということで、次回からは「世紀末の魔術師」をお話させていただきます。

映画だったということで、かなり長めになることが予想されます。
なかなか話が進まなくて、たまにさぼってしまうこともあるかもし

れない、勝手な作者ペロコですが、「よろしく願います」と言
っていました。

では、また次にこういった休憩の場が設けられた時はお会いしまし
よう！

ちなみに、ペロコの言うところによると、「題名に『1』について
いますが、またやるかは未定」なのだそうです・・・。

小休憩1（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

ちよつと息抜き程度に書かせていただきました。

快斗&キッドのちよつとした裏話的なお話。

あ、ちなみに、「喜びの舞」は本当に踊ってたんです。キッドの音楽、あるじゃないですか？あのBGM。サントラに収録されてるやつなんですけど……。あれにあわせて適当に踊ってたら、弟に見され、冷めた目で見られました……。

本当に、2800人というかなりの方に読んでいただけて嬉しい限りです。ありがとうございます（＾－＾）ノ

さて、次は「世紀末の魔術師」をお送りします。

これは、コナンⅡ新一というのがキッドにバレるということで、避けられないお話なので……。

「黄昏の館」だと考えておられた方、スイマセン。

では、これからもよろしく願いますね。

構想は、少しずつ考えておりますが、まだ確定していないので……

。という始まり方にすべきか……。

ではでは、次のお話「世紀末の魔術師1」でお会いしましょう。

世紀末の魔術師1（前書き）

ようやく、スタート！世紀末の魔術師！

まずは、冒頭のキッドのシーンからいってみましょう

ではどござ〜

世紀末の魔術師 1

みなさん、こんばんは。毎度おなじみ怪盗キッドです。

今宵の狙いも、もちろんビッグジュエル！

米花美術館に展示されているトパーズ“月夜の輝き”をいつものように華麗に盗み出すことに成功し、今、私の自慢の羽根、ハンググライダーで米花町上空を飛行中……。

もちろん、おなじみの中森警部がパトカーを何台も走らせてこの私を追いかけて来てます。

ちよつと疲れたので、休むために立ち寄ったとあるマンション。

すると、ベランダの戸がカラカラと開いて、そこには1人の小さな女の子の姿が。

その女の子は

「あなた、誰？ドラキュラさん？」って聞いてきたんだけど……。
ド、ドラキュラって……（泣）

しかし、ポーカーフエイスをばつちりとはりつけ、膝まずき、左手を手に取りながら

「いや……飛び続けるのに疲れて羽根を休めていた、ただの魔法使いですよ、お嬢さんv」

と、バツチリとウインク付きで決める。

……と、次の瞬間、このベランダをライトが照らした。

私のせいとはいえ、住人に迷惑がかかるのでは？と思いつつ、「じゃあ、またな。お嬢さん」と、あいさつをして、ハンググライダーで飛び立った。

その後、警察を振り切り、パンドラではなかった宝石もきちんと持ち主に返しておいた。

とりあえず、今日の仕事も無事終了^{ショー}。

家に帰ると、寺井ちゃんが部屋で待っていた。なんだか、オレに相談があるらしい……。

その相談内容を聞いたオレはさっそく、計画を練りだした。

そして、翌日キッドの予告状を出すことになる。

また、この仕事をしている間に、新たな真実を知ることになった。

あのベランダで会った女の子が、小さな探偵くんの知り合いだということ。

そして……

その探偵くん“江戸川コナン”工藤新一”であること……。

これらは、あのベランダでの1件から、1週間以内で知ることになるのだが……

オレはこの時全く分かっていなかった。そう、全く……

まさか、オレが狙われるなんて誰が知ることが出来たのだろうか・

・

世紀末の魔術師 1（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

いよいよスタート、「世紀末の魔術師」。最初始める時に、みなさん感想などで「黄昏の館」とか、「空中飛行」のお話のことを話されるので、どうしようか迷ったのですが、やっぱり、新一の正体がバレる上では、これは抜けない！ということで決めさせていただきました。

さて、映画冒頭のキッドと歩美ちゃんのシーン。

盗まれた宝石は、勝手なネーミングですので、つつこまないでいただきたいです。いかにセンスないかが分かりますよね……。あはは。

この時キッドは、歩美ちゃんのことを知らなかったということにさせていただきました。

あと、寺井ちゃんの相談事。

あとに続くキッドの語りから、エッグ関連だと予想は出来ますよね？まあ、確かにそうなんですが。

こちらでは、控えさせていただきます。次のお話できちんと説明させていただきますね。

あつ、これは、うちの勝手な設定なので……。後で文句を言われてもそれは困ります。

それでは、また次のお話でお会いしましょう。これから、このお話よろしくお願いします。

世紀末の魔術師2（前書き）

快斗、大阪到着です。

世紀末の魔術師 2

“ 黄昏の獅子から暁の乙女へ

秒針のない時計が12番目の文字を刻む時

光る天の楼閣から

メモリーズ・エッグをいただきに参上する

世紀末の魔術師

怪盗キッド”

そんな予告状が警視庁に届いたのは8月19日のことだった。

その翌日の8月20日、オレは仕掛^{タネ}をしかけるために、大阪へと向かった。

それにしても・・・すごい人だな、おい。

東京も毎日そりゃ、すごい人だけどさあ・・・ここまで活気はねえよな。

あ、一緒に来てくれてるのは寺井ちゃんです
その日1日かけて、様々な仕掛^{タネ}を仕込んでおく。

「ぼっちゃま・・・寺井の頼みを聞いてくれてありがとうござい
ます・・・」

「ああ、別にいいよ。今のところ何か狙ってる宝石があつたわけじ
やねえし・・・」

寺井ちゃんの知り合いに、沢部って人がいるんだけど、その人が仕
えてる香坂夏見さんの曾祖父の書いたエッグの絵が、今回発見され
た51個目のエッグと違うということで、彼女には内緒で寺井ちゃ
んに頼みにきてたらしい。詳しくは知らないけど・・・。実際に会

ったわけじゃねえしな。

そう、今回の獲物は、インペリアル・イースター・エッグ。ロシア、ロマノフ朝時代に作られた秘宝。今までに50個発見されてるんだけど、今回発見された“メモリーズ・エッグ”は、ちょうど51個目となる。

その所有者は何ともご縁のある、鈴木財閥。

そのエッグは大阪にて展示されてるということで、こうしてやってきてるんだけどね。

毛利小五郎氏にも依頼が行ったらしくて、大阪にやってくるようだ。つまりは、あの小さな名探偵も。そして、毎度お馴染み中森警部は、ヤル気満々なのを、しっかりとこの目で見てこっちに來たから、来るだろうね。

まあ、今回彼が警備するならきつと・・・

結局、中森警部は、21日に、毛利氏は22日に大阪にやってきた。情報収集のためにオレの愛鳥を飛ばしておいたし、これで準備は完ペキ！

さあ・・・ここは大阪。

いっちょ、派手にいきますか!!

世紀末の魔術師2（後書き）

みなさま、こんにちは。いつも読んでくれてありがとうございます。ペロロです。

さて、もう25話目となる「キッドside」、今回の「世紀末の魔術師2」はいかがでしたでしょうか？

前回お話した寺井ちゃんの頼みごと……。お分かりになりましたか？ここは、うちオリジナルの設定なので……。って、前に言ったと思いますけど、文句は、受け付けません。あ、もちろんお褒めの言葉はかなり歓迎させていただきます（笑）

はい。ということで、寺井ちゃんの頼みごととは、この後出てくる香坂夏見さんの執事の沢部さんにエッグのことで相談されてたんですね。

最後、キッドがエッグを盗もうとした理由をコナンくんが追求する時に、「エッグが夏見さんの曾おばあさんのものであると知ってた」みたいなことを言ってたので、どうやってそれを裏付けるか必死で考えた結果がこれです。

「調べた」とか、いくらでも言い訳？は出来そうなものなんですが、あえてこうさせていただきました。反応がかなり気になりますね。

あ、キッドの活躍は次のお話からとさせていただきます。延び延びでスイマセンね……。

それでは、これからこの小説「キッドside」をよろしく願います。

メッセージ・評価・感想をいただけたらかなり跳んで喜びます。

うちはほめて伸びるタイプなので……（笑）

で、伸びたかどうかは、みなさんが受け取った印象どおりです！

世紀末の魔術師3（前書き）

かなり遅れてスイマセン。

ようやく、第3話目投稿することが出来ました。

これから、かなりペースが落ちるかもしれませんが。

1週間に1話は最低でも投稿するように心がけていきたいと思えます。

それでは、キッド様のショー、スタートです

世紀末の魔術師 3

飛ばした愛鳥のハトに取り付けた盗聴器から、中森警部の声が入ってくる。

どうやら、ニセモノを展示室に移し、ホンモノは中森警部が自分の目で見張るという作戦のようだ。

よしっ！読みどおりの展開　しかし・・・オレの変装見破るには、そりゃホッペをつねれば一発だろうけど・・・。痛そーだなあ・・・。

もう、見て無くても光景が目には浮かぶな！！

それにしても、探偵くんは今回の暗号、まだ解けてないのかな？
まだまだだね、探偵くん・・・？こんなんじゃ、予告どおりにいたいちゃうよ

辺りは暗くなり、夜。時刻は、7時をちよつとすぎたころ。

今、私のいる場所は、“光る天の楼閣”通天閣。

どうやら、探偵くんは今回の暗号が解けなかったらしく、ここに来る気配はない。

オレの愛鳥もしっかりと役目を果たして帰ってきた。

盗聴器を外して、耳にあてる。・・・が、特に新しい情報はなし。

ちてと・・・

「レディース・アンド・ジェントルメン!!」

うわ・・・気持ちいい・・・

「さあ・・・ショーの始まりだぜ・・・」

まずは・・・と、リモコンを取り出し、ピッ！とな。すると、ヒュルルル・・・と大阪城で花火が盛大に打ちあがる。

「さて、お次は・・・」

と、またリモコンを取り出し、ピッ！変電所にしかけておいた、爆弾が爆発！

街中が夜の闇に包まれていく・・・。さてさて？

「法円坂・・・ミカド病院・・・ホテル堂島センチュリー・・・天満救急医療センター・・・ホテルチャンネルテン・・・浪速TMS

病院・・・関西ホテルザワールド・・・お！ビンゴ」
発見！行きますか・・・

さて、向かつてる間に軽く説明しておきますと・・・
今回の予告時刻は、7時20分。予告状冒頭の、“黄昏の獅子から
暁の乙女へ”の、12番目の文字は「へ」。これで、最初の2行は
解読完了

また、“光る天の楼閣”は、今いた通天閣のてっぺんが光の天気予
報になってるところから。

それから・・・花火を打ち上げたのは、通天閣から目をそらせるた
め。

変電所を爆発させたのは、自家発電に切り替えさせるため。
ホテルや、病院以外ですぐに自家発電に切り替わった所こそ、警部
のいる場所。

・・・お分かりかな？

なんて考えてるうちに、到着。

窓から、催眠ガスを打ち込み、警部たちを眠らせて、今回も楽々とゲット

で、逃げようと思ったら・・・下にバイクが1台。乗ってる人は・・・ヘルメットで顔が見えないけど、私と同年？
と、思ってたら・・・

「キッド！！！」

と、探偵くんの声が。近づかせないように、煙幕のカードを打ち込み、その隙に逃走！

目的地は大阪湾の近く。そこで寺井ちゃんが待つてるから・・・。

大阪飛行を楽しんでいたら、赤いレーザーポイントが・・・！
ハッと気づいた時、咄嗟に避けたが、ほんの少しモノクルをかすめてしまい、

「あ・・・オレ、狙われたんだな・・・」

と思った瞬間、地に落ちていく感じがして、そのまま気を失った・・・

世紀末の魔術師3（後書き）

ペロコです。

前書きにも書きましたが、かなり遅れて申し訳ありません。ちょっと立て込んでおりまして……。テストに追われる日々がこれからも続くと思うので、なかなか投稿できなくなるかもしれません。

ここで謝っておきます。スイマセン。

さて、気分を改め今回は、キッド様ショー〜墜落まで。「レディース」のセリフは、英語表記にするか迷ったのですが、カタカナにさせていただきました。

そして、軽く暗号の解説を入れました。今までは入れてなかったんですが、飛んでる間のシーンはこんな事を考えてたということで・

・（ハハハ）

さて、キッドは何とか盗み出すことに成功し、（ここでは平次のことを知らないということにさせていただきました。ヘルメットもかぶってたしね）大阪湾に向かって飛びます。

その道中（空中？）、狙撃されるんですね（泣）一瞬銃口のほうを向くので、気づいていたということにしました。でも、避け切れなかった。

なんだか、キッドの語りとして書くのには、あんまり詳しくかけないということで、かなり短いですが……。まあ、気を失ったということで。

さて、次回！かなりハイペースに物事が進む予定です。最後の方に力を入れたので。

墜落してしまったキッド……。その安否は！？（って、知ってますよね……。；）

では、感想などお待ちしております!!

世紀末の魔術師 4

「ま！坊ちゃま！！大丈夫ですか、坊ちゃま！！」

え？寺井ちゃん・・・？目を開けると、そこには心配で仕方が無い様子の寺井ちゃんの姿が。

「坊ちゃま！大丈夫ですか！？」

「あ、ああ・・・オレ・・・？」

「ああ！！よかった！坊ちゃまに何かあったら、この寺井、盗一さまに顔向け出来ません！！」

「寺井ちゃん・・・大丈夫だから。とりあえず、落ち着いて。ここは？あれからどうなったの？」

「は、はい・・・。えっと、ここは泊まっているホテルでございます。坊ちゃまが撃たれたのを見て、落ち合う場所から駆けつけ、坊ちゃまを救い出しました。ただ、モノクルと、エッグ、それに坊ちゃまのハトは・・・。あの江戸川コナンという少年がいたために、取りにいけませんでした。申し訳ありません。」

「そうか・・・。オレを撃ったヤツは？」

「それも・・・申し訳ありません。なにぶん、暗かったもので・・・」

「そう・・・モノクルは探偵くんが・・・。まあ、別にオレって断定できるような指紋なんかはないと思うけどね。」

「中森警部様に、渡しておられました。どうなさいますか？」

警部のところか・・・。つてことは警視庁だよなあ・・・。どうする、オレ！？

エッグの方は、探偵くんが持つてゐるなら大丈夫だろう、おそらく。モノクルは・・・

「今、警視庁で休暇取ってる人がいないかどうか、調べてくれる？
夏休みだし、1人ぐらいいるだろうから。」

「分かりました。ということは、取り戻しに行かれるのですね？」
「当ったり前だろ？キッドはアレがなくっちゃね！」

ということ、とりあえず再び寝て翌日。

寺井ちゃんの調べで、警視庁の白鳥って人が休暇で軽井沢にいるらしい。

白鳥って人なら、聞いたことあるなあ。どつかのお坊ちゃまだっけな。なら、ちようどいい！

そして、その人に化けてモノクルを取り戻しに行くために、東京へ。

警視庁。一般人なんかはやっぱり入るのに戸惑うところ。特にオレなんかは怪盗なんてもんをやってるしね。まあ、今は「白鳥」って人堂々と・・・。

証拠品保管室。

様々なものが立ち並ぶなか、オレのモノクルを発見。しかもラッキ―なことに、誰もいないんだな！オレってば運が良すぎ！

ちゃっっちゃともらって、警視庁を出る・・・はずだったのに！！

「あ、目暮警部！」

そう、あの1課の警部さんに出会っちゃったんだよ。

「白鳥くん！休暇で軽井沢じゃなかったのかね？」

まあ、そうだな、ホンモノは。えーっと・・・

「別荘にいてもヒマなんで・・・事件ですか？」と聞くと、
「ちょうどいい！君も一緒に来てくれ！」
そりゃそうだよな。あっちゃ・・・。

つてなことで、成り行き上、一緒に事件現場についていくことになった。

まあ、オレとしてはこの遭遇は幸運だったのかもしれないけど。この時はもちろん、「やっべー」としか思っただけだった。

でもこの後、鈴木財閥の船の上で衝撃の新事実を知ることになる・・・

世紀末の魔術師4（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。やはり1週間ぶりの更新となりました。本当、だらだらと進んでスイマセン。

さて、今回のお話。快斗、意識が戻るゝ目暮警部たちに会う編ですね。一気にドドドと進みました。軽く寺井ちゃんに説明をもらって状況を知ったのでは？と勝手な想像。そして、警視庁への乗り込み。

警視庁内部の状況はハッキリ言って知らないので、これもまた想像。こんな感じかな〜と・・・。

警視庁で目暮警部に会ったのは不可抗力とさせていただきます。もちろん、目的があって近づいたのかもしれませんが・・・。とりあえず、成り行きということで！

さて次回。再び探偵くんと対面。といってもあんまり（全くかも・・・）お話しませんけどね。

またしばらく更新できないかもしれませんが、今後ともよろしく願いますm（――）m

世紀末の魔術師 5

へりで向かう途中、事件が起きたというその状況について詳しく聞いてみた。

「現場は、鈴木財閥の船の上。毛利君がまたおるようだ……。あの疫病神め……！」

アハハ……。 “疫病神” ね……。

そんなに殺人事件に縁があるんだ……。いくら探偵だからって、そんなに事件に巻き込まれるもんじゃないだろうに……。警部さんも大変なんだな。」

警視庁のへりが、その鈴木財閥の船の上に降りる。でっけえ……。毛利探偵と、鈴木史郎氏が待っていた。

「警部殿！お待ちしておりました！！」

「……たく。どうして君のいくところに事件が起こるんだ！？」
「いやあ……。神の思おもし召しというか……。」

神……。？神って……。

「毛利さん自身が神なんじゃないですか？……。死神という名の……。」

そう。死神！

いくら探偵とはいえ、行く先々で殺人ばかり起こってたらお先真

つ暗だよ。

まさに一寸先は闇。

目の前には闇しか広がってない世の中になっちゃうよ。

彼が神 死神であるかぎり、事件は後を絶たないと思うな。

さて、被害者は、寒川^{さがわ}竜さん、32才。フリーの映像作家だそうだが、彼・・・エッグ狙ってた人だよね？

そこへ、毛利氏の気合いの入ったコメント。

「これは、強盗殺人で、犯人が奪ったのは指輪」だという。
なんでもその指輪は、あのニコライ2世の三女、マリアの指輪らしい・・・けど・・・。
でも・・・

「指輪を取るだけなら、首から外せばいいだけでしょ！でも、部屋を荒らして枕まで切り裂くのはおかしいよ！」

そう！あまりにもぐちゃぐちゃなこの部屋。おかしすぎる！

．．．って、おかしいのは探偵くんのほうだよ．．．。
小学生なのに、こんな考えすぐに出来るもんじゃないよ．．．。変
だ．．．変すぎる．．．。

すると、鑑識さんが西野さんのボールペンを持ってきた。
ということ、西野さんに事情を聞く事に．．．

世紀末の魔術師5（後書き）

みなさまこんにちは。ペロコです。

えつと・・・世紀末の魔術師、本当に久しぶりの更新！！遅くなりました・・・。

今回は、ヘリにて鈴木氏の船に降り立ちます。

あの「死神」のセリフ、何を思っただのか必死に考えて、考えて・・・でも、あんな感じにしか思いつかなくて・・・。どうなんですかね？本当のところは。

前回、あとがきにて「探偵くんと対面」と書かせていただきましたが、最後にちょっとだけ・・・でしたね、もしも期待してた方がいたらスイマセン。

でも大丈夫！次回はコナンくんが行動に・・・
そして・・・！？

次回もお楽しみに！

感想などいただけたら嬉しいです。

世紀末の魔術師 6

警部さん・毛利探偵による西野さんへの質問が始まった。

「西野さん、このボールペンはあなたのものに間違いありませんね！？」

「は、はい……。でも何で寒川さんの部屋に？」

「遺体を発見したのはあなたでしたな？」

「そうです……。食事の用意が出来たので呼びに行っただけです。」

「その時、中には？」

「いいえ……」

「じゃあ、何で部屋に入っていないアンタのボールペンが中に落ちてたんだ！？」

「分かりません……」

「では、犯行当時のあなたのアリバイは？」

「えーっと……。7時10分頃、部屋でシャワーを浴びて、その後一休みしてました。」

もし西野さんが犯人なら、オレを撃ったのも彼なのか……？

すると、高木刑事が「ビデオテープがなくなっていた」と報告に来た。

それを聞くと、あの探偵くんが走ってどこかに行ってしまった。そして、その後を毛利さんが追う……。しゃあねえ。

「警部、犯人は銃を持っている可能性があります。彼女たちを連れ戻してきます」

「うむ。分かった。頼んだぞ。くれぐれも用心することだ。」

了解、と軽く手を上げて彼女を追いかける・・・と！電話？

探偵くん、電話中なのか・・・？ま、とりあえず・・・と毛利さんの肩をポンとたたくと、素早く空手の構え・・・そーいや、空手やってたんだっけな。

「白鳥刑事！」と目がまん丸。こういうところは青子そっくりだ・・・。

「蘭さん、銃を持った犯人がうろついているかもしれません。早くみんなのところに戻って下さい！！」

って、彼女、空手やってるしある程度は大丈夫だとは思っけど、銃が相手じゃね。

「でも、コナンくんが・・・」と言いかけるのをさえぎり、

「彼はぼくが連れ戻しますから！！・・・任せてください。」

と、無理やり追い返す。さて・・・

探偵くんの電話内容気になるなあ・・・。こんな時にどこに電話？ということ、気配を消して探偵くんの隣の電話ボックスの近くに盗聴器（それも、かなり高性能なやつ！）を取り付け、その場を離れ、スイッチオン！！

「・・・目を撃つスナイパーじゃと？分かった！調べてみる！10分後にまた電話をくれ！」という老人の声。電話の切れる音。ふーん・・・10分ね・・・。

と思って気を緩めたせい、探偵くんが飛び出してきた！あわてて隠れたものの、かなり危なかった・・・。本当、気配に敏感なんだな・・・。

さて、10分間どうしようかな。と、ぶらぶら散歩。

あ！と思いつき、向かった先は、救命ボート置き場。まあ、いざって時のためにね。

結局、救命ボートは一艘なくなっていたけど・・・

世紀末の魔術師 6（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

はいー！！ようやく、事件が動き始めました……。どれだけスロースペースなんだ！？という感じもいたしますが。

今回は、警部さんたちの質問→電話の盗聴編。

いかが……。ですかね？最近、キッドがどう思って動いてるのか想像しにくい場面に入ってきてるんですけど……。やっぱり、裏にかくのは難しい感じがしますね、書いてて思ったのは。まあ、いまさらなんですけどね。

まだ、この段階では探偵くん＝新一と気づいてないということになります。

正体がバレるのは、次回のお話。

ここが書きたくて、今回この「世紀末の魔術師」をやることに決めتانですが……。みなさんの反応が怖いです。うち自身のオリジナルなので、こうだったとはつきり言っ言えませんが！

なので、その辺りの文句は受け付けないので、そこだけご了承ください。

また次のお話を投稿するまで時間が空くと思います。

そんな次のお話、事件はつきり言ってそんなに進みません！下書きは出来てるのですが、もう1度チェックをして、気合いを入れて投稿するつもりです。

次のお話は、快斗キッドに正体がバレる編！！

次回もお楽しみに

評価・感想など送っていただけると嬉しいです。
それでは、また次のお話で・・・

世紀末の魔術師 7

きっかり10分後、探偵くんは再び老人に電話をかけていた。

「分かったぞ！シンイチ！インターポールICPOの犯罪情報にアクセスしたところ、年齢不詳・性別不明の怪盗が浮かんだ！！その名は・・・スコ
ーピオン！！」
「スコーピオン！？」

スコーピオン・・・これだけ聞けりや十分だ。と思い、盗聴器の電源を切る。

さて・・・スコーピオンは聞いたことあるな。インターポールかあ・・・。
またすごいヤツを敵に回してるもんだ・・・。ま、かくいうオレも
インターポールにはお世話になってるけどね。

さて、先ほどの電話を思い返してみよう・・・。
年齢不詳・性別不明・・・って、何にも分かってないんじゃない！

・・・え？待てよ？確か、あの電話の時あの老人は、探偵くんのことを“シンイチ”って言った！？“シンイチ”って・・・。“真一

”？“信一”？IQ400の頭がフル稼働で漢字を変換していく。

それとも・・・“新一”・・・？って・・・ええ！？

あの“工藤新一”！？いやいや・・・まさかね。

だって、彼って高校生探偵なんだし。あれは、どう見ても小学生・・・。

確かに推理力はそりやもう、べらぼうにすごいと思うけど・・・。

そういえば、このエッグの件を知ったときに紅子がいきなりやってきて・・・

「こんばんは、黒羽君」

「あ、紅子！？何でここに！？」

「黒羽くん、明日から大阪に行かれるでしょ？だから、急いだ方がいいと思って・・・。エッグを盗みに行かれる前にお知らせしたいことがあったのよ」

「エッグって・・・それはキッドが狙ってるんだろ？オレは関係ねえよ！」

「ふふ・・・まあ、いいわ。あなたが“もしも”怪盗キッドだというのなら、しっかりと聞くことね。これは忠告よ」

「忠告？」

「ええ・・・。さつき、占いをしていたら・・・

『姿変わりし光の魔人 白き罪人を滅ぼさんとす

だがその前に 光の魔人に影がかかる

その影は光の魔人の 最も恐れしものなり』って出たから・・・

。気をつけてね？それじゃ」

「お、おい、紅子！！・・・。まったく、何だってんだよ・・・。」

確か・・・ルシユファーだっけ？なんだかんだ言っで、紅子の占い毎回あたってるからな。

えーっと・・・“光の魔人”って言うのは、確か“工藤新一”だったはず。

ということとは、彼　小さな探偵くん、江戸川コナン「工藤新一ってことか？しかも、“姿変わりし”だし。あれはどう見たって、姿変わってるもんな。もともと、謎な存在だったし。「江戸川コナン」ってさ。前に調べた時、工藤新一と入れ替わるように現れたのが江戸川コナンだって分かったんだしね。まあ、そうだとすりゃ、あの推理力・行動力が納得できるけど・・・。何で小学生になってんのかわかんないけど・・・。まあ、オレの周りには「魔女」なんて人がいるから、不思議じゃねえんだけどさ。だとすると、あの電話の相手の老人は、隣に住んでるっていう『阿笠博士』って人か？確か、発明家・・・。

それにしても・・・“影”って何だ！？探偵くんの“最も恐れしもの”ねえ・・・。何だろ？

まあ、いつまでも悩んでたって仕方ないし、もうそろそろ探偵くんも戻ってるだろうし、オレもそろそろ戻るかな？

そして、戻ってきたオレが耳にしたのは「待ってください。警部さん！私じゃありません！」と必死に叫んでいる西野さんの声だった。

世紀末の魔術師7（後書き）

みなさま、お久しぶりです。ペロコです。

久々に次のお話が投稿できました。世紀末も7話目ですね。早いものです。その割にはあんまりお話進んでいないんですけどね；

さて、今回は以前お話した通り快斗^{キッド}に正体がバレる編！！というところで、紅子ちゃん出してみました。なんか、紅子ちゃんと哀ちゃんってかぶるんですよ。雰囲気というか。

謎な言葉を考えるのに、結構時間がかかりましたね。こういった暗号めいた言葉をきれいに作れる人はすごいな～と思いましたね。

快斗の心理は・・・どうなのでしょうね？

自分の周りに魔女なんて人がいるから、人が伸び縮みしてもそんなに驚かないんじゃないか・・・というのはうちの見解です。いかがでしたか？

次はお話をきちんと進めたいと思います。

戻ってきたキッドが耳にしたのは西野さんの必死な声。

探偵くんが動きます！！

では、また次のお話で・・・

評価・感想などいただけたら飛んで喜びます（笑）

世紀末の魔術師 8

どうやら、西野さんの部屋を調べていたら、例の指輪が出てきたらしい。

で、西野さんは否定してる・・・と。そういうわけだね。

お！探偵くんが例によってちょこまかと・・・。

「コォーナァァン！！！」と叫ぶ毛利氏のパンチをスルリと避けて西野さんに「羽毛アレルギーなんじゃない!?」と質問。

西野さんが肯定すると、「じゃあ、犯人じゃないよ!」と断言。

ホォ・・・。こんなにもキツパリと。

と思っ て見てたら、こつちを振り返った。

「いいから続けて・・・」と先を促す。

「寒川さんの部屋、羽毛だらけだったじゃない！犯人は羽毛枕まで切り裂いてたし、羽毛アレルギーの人があんなことするはずないよ!」とまたも断言。

さすが、工藤新一・・・。筋が通ってるし、それに納得だよ。ということで・・・。

鈴木史郎氏に確認を取りに、みんなで彼の部屋を出てロビーへ。

「それが私が承認になります！彼は少しでも羽毛があると、クシャミがとまらなくなるんです!」

なるほどねえ・・・と、そこに探偵くんの声。

「警部さん！スコピオンって知ってる？色んな国で、ロマノフ王朝の財宝を専門に盗み、いつも相手の右目を撃って殺してる、悪い人だよ！？」

「それじゃ、今回の犯人も・・・」

「そのスコピオンだと思うよ！たぶんキッドを撃ったのも・・・。キッドの単眼鏡モノクルにヒビが入ってたでしょ？スコピオンはキッドを撃ってキッドが手に入れたエッグを横取りしようとしてたんだよ！」

“キッド”という言葉が探偵くんの口から出た時に、肩が震えかけた・・・。あつぶねえ。」

ポーカーフェイスが出来てよかったよ、本当・・・。

ここまで推理した探偵くんに感心していると、横から

「何でオマエ、スコピオンなんて知ってたんだよ？」と鋭い毛利氏のツツコミ。

かなり慌てていたので、思わず助け舟を・・・

「阿笠博士から聞いた・・・」とつぶやいたら、急に振り返った。かなり疑われてるのかなあ・・・やっぱり。

「そうだよね？コナンくん？」

なんか、チラチラ見られてるし・・・もしかしてもう、バレた！？

「しかし、スコピオンが犯人だとして、どうして寒川さんから奪った指輪を西野さんの部屋に隠したんだ？」

という、警部さんの疑問。

そして、探偵くんの突然の質問。

「ねえ！西野さんと寒川さんって、知り合いなんじゃない？」

という、質問に西野さんはしばらく考えて、そして思い出した。

三年前にアジアで内戦により、家を焼かれた女の子のビデオを撮っ

ていたのを見つけ、注意したが聞かないので、殴つたらしい・・・。

こりゃ、恨まれてるだろうねえ・・・と思っていたら、毛利氏の迷推理。

なんとまた、西野さんが犯人と言いつ出した・・・。本当、大丈夫か？
警部さんにもツツコまれてるじゃねえか・・・。

世紀末の魔術師 8（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

昨日からテストが始まっているにも関わらず、なんと小説の投稿までやってのけるほど、テストの結果に自信がないのにパソコンをやっているという変な者です（笑）

いやぁ……。パソコン触ってないと落ち着かないので、必ず見るようにはしてるのですが……。

さて、ペロコの個人的な話は置いて……

今回、探偵くんが動きました！といっても、そんなに進んでない気もしますが……。小五郎さんがズレた方向に向かうと、すかさず訂正をする……。

そんなところにキッドは興味があるのでは？と勝手に想像。（妄想ともいう）そして、あの白鳥警部の視線……。となりました。今更なのですが、本当に謎です！キッドって。分かなさすぎて泣けてくるよ……。

はい、そんなこんなで進んでいる「キッドside」。今回が31話でした。前話で感想をいただけなかったので、キッドに正体がバレたところを皆さんがどう思ったのか分からないまま進んでしまいました。

次回は、事件解決……。までいけるかなあ？

コナンくん次第です（笑）

それでは、評価・感想いただけたらとても参考になります！どう思っただかなど率直に教えてくれると嬉しいです。

世紀末の魔術師 9

毛利氏の迷推理にあきれていると、またしても探偵くんの一言。

「でも西野さん、助かったね！だって、もし寒川さんがスコープオンに殺されてなかったら、西野さん、指輪泥棒にされてたよ！」

という、この特大級のヒントを得て、さすがにひらめいた毛利探偵。

「この事件、二つのエッグならぬ、二つの事件が重なっていたんです！1つ目は、寒川さんが西野さんをハメしようとしたもの。彼は西野さんに指輪泥棒の罪を着せるために、わざとみんなの前で指輪を見せ、西野さんがシャワーを浴びている間に部屋に侵入。自分の指輪をベッドの下に隠した……。そして、西野さんのボールペンを取ったんです！西野さんに罪を着せるために……。だが、その前に2つ目の事件が起こった。寒川さんがスコープオンに射殺されてしまったんです！目的はおそらく、スコープオンの正体を示す何かを映してしまったテープと指輪……。しかし、指輪が見つからなかったため、スコープオンは部屋中を荒らしたんです！」

・・・へえ・・・やるじゃん・・・。

「スゴいや、おじさん！名推理だね！」

いや、探偵くんでしょ？それは。

的確なヒントを与え、確実にゴールに導く・・・

「ということは、スコープオンはまだこの船のどこかに！？」

という警部さんの声にふと思ひ出す。

「そのことなんですが・・・救命艇が一艘なくなっていました・・・

」

「それじゃ、スコープオンはそれで・・・！？」

「緊急手配はしましたが、発見は難しいと思います」

「取り逃がしたか・・・」

そうかな・・・？まだ、ここにいるような気がするんだけど・・・。
すると、周りからは“安心した”との声があがる。

「しかし、スコーピオンがもう1個のエッグを狙って香坂家のお城に現れる可能性はあります・・・」と言うと、戸惑いが起こった。

「いや、すでに向かっているかも・・・目暮警部！明日東京に着き次第、私も夏美さんたちと城へ向かいたいと思います！」

と言えば、警部さんの了承をもらえた。

すると、毛利氏が探偵くんを置いていくと言い出したので、

「いえ、コナンくんも連れて行きましょう・・・。」と反対する。

ま、かなり驚かれたけど。そりや当然じゃないか。だって、彼はあの・・・工藤新一！

「彼のユニークな発想が役に立つかもしれませんからね・・・」

「こいつの！？」

「ええ・・・」と笑みを浮かべる。

“ユニークな発想”って言ったけど“ユニーク”なんて、期待していない。

オレが期待しているのは、その推理力。
だって・・・あの香坂家の城は・・・

と思っていると、目暮警部が

「ひとまず、今晚はもう休みましょう。鈴木会長、私達に部屋を貸していただけると助かるのですが・・・」と尋ねると

「ええ。かまいませんよ」と鈴木会長の承諾。

ということ、今日はもう寝ることになった。

なんだか慌しい1日だったなあ・・・。あ、寺井ちゃんに連絡入れねえと。

きっと心配してるだろうし。

そして、オレは寺井ちゃんにメールして、寝ることにした。

世紀末の魔術師9（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

久しぶりに、「キッドside」の更新をさせていただきました。
事件、無事解決！

ちょっと長めといいますが、セリフの多い回でしたが、まあ、推理ということでお許しください。

最近、感想にて「もうちょっと描写を詳しくした方がいい」とのご指摘があります。

で、実際に読み返してみても確かにそうだな～と思うことが多々あったので、次回からしっかりと書いていきたいと思っています。

こういった、ご指摘はすごく助かっています。

自分で読み返しても分からないものなどたくさんあるので、読者様の意見は大変嬉しいし、しっかりと反映していきたいと思っています。

さて、今回のお話は、事件解決編！

そして、寺井ちゃんのお名前が久々に出ました（笑）

寺井ちゃん、心配してるんじゃないか！？ということで、こうしてメールしておくという手段に出させていただきました。

今回は、いよいよ香坂家のお城編！

といっても、中の探索までは行かないかもです。

上にも書きましたとおり、たくさんのご意見・ご感想を心から待ち

望んでおります。

みなさんの意見を反映してよりよい作品にしていこうと思っています。
す。

これからもしろしくお願いしますね。

世紀末の魔術師 10

8月24日、晴れ。

船は予定通り東京へと到着。

そこで鈴木氏たちや、目暮警部と別れる。その際鈴木氏にエッグを借りておく。

まあ、理由として少々こじつけではあるが、「証拠品として」である。

うまい理由が思いつかなかったんだよ……。

でも、黙って盗ることも出来たけど、“黙って”ってのは、怪盗の名が廃^{すた}るってもんだしな！

乾さんは、寄るところがあるというので、別行動になった。それからオレ達は、2つに分かれて横須賀へと向かった。

車で山奥に入っていくと、例の城が見えてきた。みんな、門の前まで来て車を降りる。

「ドイツのノイシュヴァンシュタイン城に似てますね。シンデレラ城のモデルになったと言われている……」とウンチクを披露していると、また車がやってきた。

黄色のビートル……。

降りてきたのは、老人1人と、子供達が4人。

あれ？あのカチューシャの女の子……と思っていたと、毛利さんが「博士、どうしてここへ？」

と聞いた。ということは、この老人が例の「阿笠」っていう人だな。
ふーん……。

「いや、コナンくんから電話をもらってな。ドライブがてら来てみたんじゃないよ」と答えている横で、子供達が

「まるで、おとぎの国みたい!」「この中に宝が隠されているんですね!?!」「うな重何杯食べっかな?」と口々に叫んでいる。

で、毛利氏が一喝。

「いいか、お前達!中へは絶対に入っちゃいかんぞ!?!」
と怒るように言うと、

「はーい!?!」と素直な返事。

と、そこにまたしても車が到着。

乾さんが来たみたいだ。

「やゝ、悪い悪い。準備に手間取ってな……」と大きなリュックを背負っている。

毛利氏が「何ですか?それ……」と聞くと、

「なゝに!備えあれば憂いなし!ってやつですよ……」と答えていた。

とりあえず、全員そろったところで中に入る。

その際、毛利氏が鍵をかけさせていた。

と、ここまできてようやく思い出した。

あの、カチューシャの女の子、以前仕事帰りの羽根休めに寄ったマンションで

オレの事「ドラキュラ」って言った女の子だ・・・。
探偵くんの知り合いだったんだ・・・。

まったく・・・世間はせまいねえ・・・。

世紀末の魔術師10（後書き）

みなさま、こんにちは、ペロコです。

はい！世紀末の魔術師もとうとう10話目を迎えましたあ！！ありがとうございます！！

様々な方から、色んなメッセージをいただき、ありがたき幸せでございます。

さて・・・

今回は、とうとうお城到着！&歩美ちゃん＝コナンの知り合いという事実の発覚でございました。ようやく、最初のあの文章をつなげることが出来ました・・・時間かかりすぎですね。

ですが、今日から春休みということで、少しはペースをあげれたらと思っています。「もう少し早く更新して！」という意見もありますし・・・。

とりあえず、次のお話からお城内の探検編へと突入していきます。どんどん描写が難しくなっていく一方ですね。

キッド目線でお話が進んでいくので、描写がうまく書けないときも出てくるかもしれません。

もしも、「こうしたほうがいい」ということがあれば、検討させていただきますので、ぜひ遠慮なさらずに！（笑）

それでは、評価・感想などいただけたら嬉しいです。

これからもよろしく願いますね。

世紀末の魔術師 11

中に入ったオレたちは、沢部さんの案内で城の中を見て回る。

まずは、1Fから。それにしても・・・広！！でっけえんだなあ・・・。

で、到着したのは、騎士の間というところ。

西洋の甲冑とタペストリーが飾られている。すっげえ・・・。かなりの量があるよ。

ただ、かなり重そうだなあ・・・まあ、鉄だし当たり前なんだけど。みんなそれぞれ眺めた後は、部屋を出て2Fへ。

まず、貴婦人の間。

沢部さんによると、「大奥様は、よくここで一日中過ごしておられました。この部屋が一番気が休まるとおっしゃって・・・」だそうです。

確かに、すごく落ち着いた感じの部屋だ。かなりの数の絵画が飾られている。

そして、部屋を出て、皇帝の間というところへ・・・。

さっきの部屋とは違ってかわって、騎士の気高さというか・・・ものものしい雰囲気。

貴婦人の間が“暖”だとすると、この皇帝の間は“寒”って感じがな。

・・・とか考えていたら、乾さんがトイレに行きたいと言い出し、部屋を出て行った。

ここから出ると合流出来ないかもしれないということで、この部屋で待つことに。

待つこと約2分。

突然「うわぁ~~~~~!!」という乾さんの悲鳴が!!

あわてて声のした方へ……。ってアレ？トイレの方向じゃねえよ、こっち。

そして、乾さんを発見したのは、さっきの“暖”の部屋である貴婦人の間。

そこにいた乾さんは、金庫に手を入れたまま、しゃがみこんでいた。毛利氏が「こりゃ、一体!？」と目を見開くのも分かる。

なにせ、刀やら剣やらが10本ほど天井からぶら下がっていて、その真下に乾さんはいたのだから……。

沢部さんが中に入ってきて説明する。

「81年前、喜市さまが作られた防犯装置です……この城には、まだ他にもいくつか仕掛けがあるので、ご注意ください」

ということで、オレは乾さんの荷物調査を。

そしたら、出てくる出てくる……。ノコギリ・ドリル・その他もろもろ……。

物騒だなあ、もう。

「つまり、ヌケガケは禁止ってことですよ、乾さん……」と釘を刺しておく。

すると探偵くんが突然、「このお城に地下室は!？」と聞く。

沢部さんが無いと答えると、「じゃあ、1階にひいおじいさんの部屋はある?」

と聞くと、沢部さんは、

「それでしたら、執務室がございます」と言うので、
もう一度1Fへ降りて、その執務室へ行くことになった。

世紀末の魔術師 11（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

世紀末の魔術師 11 話目。とりあえず、ここまでです。

勝手な解釈“寒”と“暖”を入れてしまいました。

これは、うち自身が映画を見て思ったことなのです。明らかに、部屋の色が違ったもので。

さて、今回は話すことがありません（笑）

次は・・・長くなりそうですね。とにかく長い！とは言っても、話としてはそんなに進まないのですが。

一体、あと何話で世紀末の魔術師は終わるんでしょうね？とりあえず、春休み中には終わらせるのが、当座の目標でございます。4月はキッド祭りですね

映画にアニメに・・・

それでは、評価・感想などいただけたら嬉しいです。
また次のお話でお会いしましょう。

世紀末の魔術師 12

1Fへ降りてきて、執務室の中へ。

「こちらには、喜市様のお写真と、当時の日常的な情景を撮影されたものが展示してあります」と沢部さんが説明してくれた通り、かなりの写真の数。

ただ、探偵くんが夏美さんに聞いたように、夏美さんの曾おばあさんの写真は1枚もない。

これが示すところ・・・それは・・・と考えていると、

「おい！この男、ラスプーチンじゃねえか？」という乾さんの声が飛び込んできた。

それに反応したセルゲイさんが確認。

「ええ、彼に間違いありません。ゲー・ラスプーチンとサインもしてありますから・・・」

と言うセルゲイさん。

「お父さん、ラスプーチンって？」

「い、いや・・・オレも世紀の大悪党だったということぐらいしか・・・」

という毛利親子の会話を聞いて、乾さんが詳しく説明してくれた。

「ヤツはな、怪僧ラスプーチンと言われていて、皇帝一家に取り入ってロマノフ王朝滅亡の原因を作った男だ・・・。一時、権勢をほしいままにしたが、最後は皇帝の親戚筋にあたるユスポフ公爵に殺害されたんだ。川から発見された遺体は、頭蓋骨が陥没し、片方の目がつぶされていたそうだぜ・・・」と。

それを聞いた毛利さんが顔色を変えたのを見て、たまらず、

「乾さん、今はラスプーチンよりももう1つのエッグです！」と話を止めさせる。

それに対して毛利探偵がタバコを吸いながら、

「そうは言ってもなあ・・・こんなに広い家の中からどうやって探しいいんだ？」と聞いてきた。

それを見ていた探偵くんが突然「おじさん！ちょっと貸して！」と言つて、タバコを手取る。

「コラ！！」と毛利氏が怒ると、

「下から風が来てる！この下に秘密の地下室があるんだよ！」と反論。

もちろん、辺りは騒然。毛利さんが灰皿を取り出し、探偵くんはタバコの火を消しつつ

「・・・とすると、かくくり好きの喜市さんのことから、きっと何処かにスイッチがあるはず・・・」と床を探し出した。

すると、何かに気づいたのか、床の板を1枚剥がすと、そこには・

「それは！！ロシア語のアルファベット！！」

「それで秘密の地下室へのドアが開くのか！？」と毛利探偵と乾さんは興奮。

一方、探偵くんは冷静に「パスワードがあると思うよ。セルゲイさん、ロシア語で押してみて！」と指示。

すると毛利探偵が「思い出・・・“ボスポミナーニエ”に違いない！」と言つので、セルゲイさんはその通りに押してみる。・・・が、何も起きない。

「アレ！？」と顔を赤くした毛利探偵を横目で見てみると、

「じゃあ、“キイチ・コーサカ”だ！」と乾さんが気合いを入れて

提案。

押してみるが、やはり何も起きない。

セルゲイさんが、心当たりはあるか夏美さんに聞くと、探偵くんが、「バルシェ・ニクカッタベカ・・・」とつぶやいた。

「夏美さんの言ってたあの言葉、ロシア語かもしれないよ！」と推理する探偵くん。

「おい、何の話だ？」と聞く毛利探偵を「しいっ！黙って！」と毛利さんが黙らせる。

一方、探偵くんたちは、パスワードを必死に解読しようとしていた。切るところを変えてみたり・・・。

すると、急に青蘭さんから「それ、“ヴァルシェーブニツクカンツアーベガ”じゃないかしら？」という言葉が。

それを聞いたセルゲイさんもピンときたらしい。納得したようだ。

「英語では“The Last Wizard of the Century”・・・日本語にすると・・・」というセルゲイさんの言葉を継いだのは、青蘭さんだった。

「世紀末の魔術師！！」と・・・。

で、ここでまたもとぼけるのが毛利探偵。「世紀末の魔術師・・・？どこかで聞いたような・・・」「キッドの予告状よ！」「そうだ！こりゃ、とんだ偶然だな・・・」と毛利親子の会話。娘さんの方が覚えてるなんて・・・光栄ですね、お嬢さん。
まあ、偶然ではありませんけどね・・・。

「とにかく、押してみましよう！」というセルゲイさんが、ボタン

を押していき、全て押し終わると・・・

ゴゴゴゴ・・・とすごい音がして、床の板が開き・・・

そこには地下への階段が。

「でかしたぞ、ボウズ！」と言う乾さんの声が地下へと響いていた。

世紀末の魔術師12（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

いかがでしたか？いつもよりちよつと増量した、世紀末の魔術師12話目。

全部で20話ぐらいになるかもしれませんが。まだ分かりませんが。

さて、今回は、地下への扉・・・床OPENまでです。なんか、やたらと会話が多いのですが、まあいいでしょうと。うち的には、毛利親子の漫才のような会話スキですね。最後の会話のところとか。あそこは、なんとなくキッド口調で心の中でお返事をしていたと勝手に妄想（笑）

もう、妄想だらけですね。このお話。書いてて楽しいんですけど。

さて、次回。

地下への階段を降りた一同を迎えるのは・・・！？

みたいな感じで進めたら面白いんでしょうけどね。

まあ、ご承知の通りです。どこまで行くかな？

それでは、評価・感想・意見など、心からお待ちしております。

世紀末の魔術師 13

とりあえず、執事の沢部さんに懷中電灯を持ってきてもらって、秘密の地下への階段を降りていく。

螺旋状の階段がけっこう長く続いている・・・っと。
階段はここまでみたいだな。

一本道のようなので、とりあえず前進あるのみ。

みんな、気味が悪いほど一言もしやべらない。

何で！？と思っていたら、セルゲイさんが会話をスタートしてくれた。

「それにしても夏美さん・・・。どうしてパスワードが“世紀末の魔術師”だったんでしょう？」

「たぶん、曾祖父がそう呼ばれていたんだと思います。曾祖父は16歳の時、1900年のパリ万博にからくり人形を出品し、そのままロシアに渡ったと聞いています」

「なるほど・・・1900年といえば、まさに世紀末ですなあ・・・」

と毛利探偵も話に参加。

それにしても・・・^{なげ}長えなあ・・・このトンネル。
どこまで続くんだよ！？

と思っていたら、カラカラ・・・とかすかな音が。

気づいたのは、探偵くんとオレだけらしい。

立ち止まった探偵くんに「どうしたの？」と毛利さんが声をかけると
「今かすかに物音が！！」と探偵くんが答え、「スコピオンか！？」と毛利探偵。

「ボク、見てくる！！」と駆け出してしまった探偵くん。

それを毛利さんが追いかけようとするので、止めて、
「私が行きます！毛利さんはみなさんとここにいてください！」と
言って、後を追った。

本当、探偵って好奇心旺盛だよなあ・・・と思いつつ探偵くんにつ
いていく。

ライトの光が当たったのに驚いたのか、急に振り返る。

「なんだ、白鳥警部か・・・」とホツとした様子。

一緒にしばらく歩いていると・・・

「あぁっ！！オマエら！！」と探偵くんの叫び声に近い大声。

ライトの先には・・・「コナンくん！」と嬉しそうに言った、さっ
きの4人の子供たちだった。

事情を聞いてみると、落ちてしまつて戻れなくなつてしまつたらし
い。

ということで、危険なので一緒に戻ることに。

毛利探偵たちの元に戻り、テンションの上がつた子供達は歌まで歌
いだす始末。

「どういふつもりなんだ！？コイツら・・・」

「いいじゃないですか、毛利さん。大勢の方が楽しくて」

と毛利探偵と夏美さんの会話を聞きつつ、角を曲がると・・・

「あれ！？行き止まり・・・」「通路をどこかで間違えたのかしら
？」

いや・・・「そんなはずありません！通路は一本道でしたから」

それにしても、この双頭の鷲・・・と思っていたら、子供達が

「わぁ！鳥がいっぱい！」「あれ？変ですね・・・大きな鳥だけ頭
が二つありますよ！」と口々に叫ぶ。

その後ろで、小声でのクールな女の子と探偵くんの会話。

「双頭の鷲・・・皇帝の紋章ね・・・」「ああ・・・王冠の後ろにあるのは太陽か・・・太陽・・・光・・・」

なんか、ここだけ雰囲気が違うような気がする・・・。

あの女の子、紅子に雰囲気似てるなあ・・・

「もしかしたら！！白鳥さん！あの双頭の鷲の王冠にライトの光を細くして当ててみて！！」

と、急に指示が飛んできた。

「あ、ああ・・・」と返事をし、実行すると・・・

「あつ！光ったぞ！！」というセリフに重なるように、またしてもゴゴゴ・・・とすごい音がして・・・地面が下がり始めた。

「みんな、下がって！！」と言ってるのに、探偵くん、そのままだし・・・。まあいいか。

と、そのまま眺めると

「入り口・・・！！なるほど。この王冠には、光度計が組み込まれてるってわけか・・・」

と感心していたら、オレの立ってる場所も動き始めた。

「わ！！」と言って、飛びのく。

階段の出現。

下を照らすと、探偵くんがライトの光に照らされた。

そして、その奥にはまたしてもトンネル・・・

少年が「スッゲー！！」、毛利探偵が「なんて仕掛だ・・・」と、みんなそれぞれ驚きで開いた口が塞がらなかった。

世紀末の魔術師13（後書き）

みなさまこんにちは。ペロコです。

エイプリルフルー！！今日から、4月です。4月1日といえば、コナンちゃんとキッドが出会った日でもあります。……。なんだか懐かしいというか嬉しいというかで、自分で書いた「漆黒の星」を読み返したりしました。

さて、今回は……

探偵団との合流。そして、雰囲気の違い2人の会話。

哀ちゃんや紅子ちゃんに似てるというのは、これまたうちの勝手な偏見でございます。なんとなく似てるんですね……。ミステリアスといえますか。

快斗に代弁していただきました。

世紀末の魔術師もだいぶ佳境に入ってきて、なんか興奮しています。20話ぐらいですね。やっぱり。

春休み中に終わらせるのが目標なんです。……。微妙になってきました。

とにかく、今月はキッド月間！

テレビに登場しまくりですからね。

こっちの小説の方も、キッドを見守ってやってください。

それでは、評価・感想・ご意見などいただけたら嬉しいです。これからもよろしく願います！！

世紀末の魔術師 14

探偵くんが見つけたさらなる地下への道を進んでいくと、そこは、1つの部屋のような場所。ドーム状のような感じだ。何か、台のようなものもある。

カチューシャの女の子が、「まるで卵の中にいるみたい！」と言ったのが、的を得ている表現。

明かりをつけるため、ろうの乗った皿に、毛利探偵がライターで灯りをつけ、辺りはほのかに明るくなった。そして、そこにあつたのは・・・

「^{ひつ}柩のようですね・・・」とつぶやくと、毛利探偵が近づいてきて、「造りは西洋風だが、桐で作られている・・・それにしてもでっかい錠だな・・・」と、柩を観察。

すると、探偵くんが「あー！夏美さん！あの錠！！」と叫んだ。錠？と思っていると、夏美さんも何かを思い出したのか、「そっか！」と言いつつ、かばんの中から古い大きな錠を出しながらやって来た。

そして、その大きい錠を入れると・・・開いた！！

毛利探偵が「開けてもよろしいですか？」と尋ねると、了承の返事。力を入れて、なんとか持ち上げた。柩の中には・・・

「遺骨が一体・・・それにエッグ！抱くようにして眠っている・・・」

「夏美さん、この遺骨はひいおじいさんの・・・？」と毛利探偵が尋ねると、

「いえ・・・たぶん曾祖母のものだと思います・・・横須賀に曾祖父のものだけあって、ずっと不思議に思っていたんです・・・。もしかすると、ロシア人だったために、先祖代々の墓には葬れなかつ

たのかもしれませんが」と答えていると、セルゲイさん・青蘭さんも近づいてきた。

「夏美さん、こんな時には思いますが、エッグを見せていただけませんか？」とセルゲイさんが申し出た。夏美さんがセルゲイさんに渡す。セルゲイさんが受け取り、エッグを見ていく。

「底には小さな穴があいていますね・・・」

そして、開閉式のそれを開けると・・・「カラツポ!?」「そんなバカな!?!」「どういうことかしら?」と、毛利探偵や青蘭さんも覗き込む。

すると、カチューシャの女の子が「それ、マトリョーシカなの!? 私んちにその人形あるよ。お父さんのお友達がお土産に買ってきてくれたの!」と言い、それに対し、毛利探偵は「何だ!? そのマト・リョーシカ・・・って・・・」と疑問を口にする。

答えたのは青蘭さんだった。

「人形の中に小さな人形が次々入っているロシアの民芸品です」とセルゲイさんも、エッグを見てそう思ったようだ。固定できるようになっているらしい。

と、それを聞いた毛利探偵。悔しそうに「あのエッグがあれば!」!」と言うので、

「エッグならありますよ・・・。こんなこともあるうかと、鈴木会長から借りてきたんです・・・」と言って取り出すと、毛利探偵のどアップ。

「オマエ・・・黙って借りてきたんじゃないだろうな!?!」

・・・オイオイ・・・。怪盗キッド様はそんなことしねえよ!!

とは、さすがにいけないので、

「や。やだなあ・・・そんなハズないじゃありませんか!?!」とごまかしておいた。

すると、セルゲイさんが、持っていたエッグを手に取り、はめると、それはもうピッタリとはまった！！

「つまり、喜市さんは2個とエッグを別々に作ったのではなく、2個で1個のエッグを作ったんですね・・・」とセルゲイさん。

すると、やっぱり雰囲気の違い子供2人（1人は、年齢詐称）の会話が耳に入る。

「不満そうね？」

「ああ・・・あのエッグには何かもつと仕掛けがあるような感じがしてならねえ・・・それこそ、“世紀末の魔術師”の名にふさわしい何かが・・・」

お2人サン・・・いいとこついてますよ。

それにしても・・・この紅子似の少女、明らかに変じゃねえ？

雰囲気というか・・・年相応の発言をしてないというか。探偵くんは分かるけどさ。

何で！？・・・と考えていたら、毛利探偵がエッグをみてつぶやいた。

「それにしても見事なダイヤですなあ・・・」

イヤ、違うよと思い、口に出そうと思ったら先に夏美さんが言ってくれた。「ガラスですよ」と。

横目で探偵くんを盗み見ていると・・・お！！気づいたらしいね。

「セルゲイさん！そのエッグ貸して！！」と走り寄ってきた。

「また、コイツは！！」と怒る毛利探偵を抑えて、

「何か手伝うことは？」と尋ねると、「ライトの用意を！！」と答えた探偵くんが続いていく。

「ライトの光を細くして、台の中に！」と言うので、台にライトを入れる。

「セルゲイさん、青蘭さん！ロウソクの火を消して！」という指示

に2人も従う。

辺りが暗くなり、ライトの光のみの明るさとなる。

「一体、何をやろうってんだ？」と尋ねる毛利探偵に、「まあ、見てて・・・」と答え、

エッグのライト光にかぶせるように台の上に置いた。

すると、エッグは明るく光り始めた・・・

世紀末の魔術師 14（後書き）

みなさま、こんにちば。ペロコです。

世紀末も、14話目までやってまいりました。

いつもたくさんの方のメッセージありがとうございます！もう、本当に嬉しいです。こんなうちなんか、お褒めの言葉、たくさんいただいてしまって、なんか申し訳なく感じてしまうほどです。

さて、そんな私情は置いて、今回は・・・

2個目のエッグ発見&怪盗の疑問。

怪盗の疑問というのはですね。哀ちゃんのことですね。はい。この段階では、哀ちゃんのこととは知らないということなので、疑問に思っただけということになりました。

次の話は・・・

エッグの仕組みについてになるかな？どこまで行くか分からないのですが、まあ、いけるトコまで・・・（No計画）

こんな、計画性のないやつではございますが、
評価・感想・ご意見など心からお待ちしてます！！
それでは、これからよろしくお願いしますね。

世紀末の魔術師 15

光りだしたエッグの中身がどんどんと透けてきて、中に入っているエッグの中身である、皇帝一家の人形がネジも巻かずにせり上がってきた。こいつは・・・

「エッグの中に光時計が組み込まれているんですよ・・・」

中に組み込まれているガラスに、ライトの光が次々と反射し、エッグの上部についた大きなガラスから幾筋もの光があふれだした。

みんな、ビククリして上を見上げる。そこには

「二、ニコライ皇帝一家の写真です!」

「そ、そうか・・・エッグの中の人形が見ていたのはただの本じゃなく、アルバム・・・」

「だから、メモリーズエッグだったってわけか・・・」

「もし皇帝一家が殺されずにこのエッグを手にしていたら・・・これほど素晴らしいプレゼントはなかったでしょう・・・」と、みんな上を見ながらの会話。

「まさに世紀末の魔術師だったんですな、あなたの曾おじいさんは・・・」

「それを聞いて、曾祖父も喜んでいることと思います・・・」

と、毛利探偵と夏美さんの会話。まったくだよ・・・すげえよなあ・・・これ。

「ねえ!夏美さん・・・あの写真、夏美さんの曾おじいさんじゃない?」と探偵くん。

「・・・え?」

「あの二人で椅子に腰掛けて撮っている写真・・・」

「ホントだわ!!じゃあ、一緒に写っているのは曾祖母ね!??・・・」

やつとお顔が見られた・・・曾おばあさま・・・」と感動している夏美さんに

「あの写真だけ、日本で撮られたのですね・・・後から喜市様を加えられたのでしょうか・・・」と沢部さんが話しかける。

チラツと横目で探偵くんの様子をうかがうと・・・おや？何かに気づいたようですね。

と思っていたら、写真が消えてきた。時間ぎれかな。

セルゲイさんがエッグを取りつつ、夏美さんに言う。

「このエッグは、喜市さんの・・・いや、日本の偉大なる財産のようだ・・・ロシアはこのエッグの所有権を中のエッグ共々放棄します。あなたが持つてこそ、価値があるようです・・・」

「ありがとうございます」

と言っている横で探偵くんは台からライトを取り外す。それを横目で見てみると、エッグを受け取った夏美さんは心配そうに言う。

「あ・・・でも、中のエッグは鈴木会長の・・・」

「鈴木会長には私から話してあげましょう。きっと分かってくれますよ・・・」と毛利探偵が安心させる。

「何はともあれ、メダシ、メダシだ!!」と毛利探偵が満足そうに言っているのを聞いてたら・・・え?!レーザーポイント!

「あれは・・・!!危ない!!」と探偵くんも気づいたのか、持っていた懐中電灯を毛利探偵に向かって投げる。慌てて避けた毛利探偵の前を一発の銃弾が通り抜ける。

「何しやがる、コナン!!」って・・・アンタ、助けてもらつててそれはないだろ・・・とあきれていたら、今度は蘭さん。

ライトを拾おうとした彼女に、探偵くんの悲鳴のような声が響く。

「拾うな！！らああー！！ん！！！！」

思いつきり素だな、あれ。彼女の右目にレーザーポイントの光が・
・と思っていたら、オレの耳は聞き逃さなかった。

彼女が小さく「新一・・・」とつぶやいたことを。

これもまた探偵くんが飛び掛って彼女を間一髪のところ助ける。

「みんな！伏せる！！」と探偵くんが大声で叫び、辺りは騒然。パニック状態。

そんな中、夏美さんがエッグを取り落としてしまい、犯人が拾って逃走してしまった。

「クソッ！逃がすかよ！！」と未だ素のままの探偵くん。

「ダメッ！！」という彼女の制止も聞かず、後を追いかけてしまったので、

「毛利さん、あとを頼みます！！」と言い残し、後を追いかけた。

走っている途中、右目を撃たれて亡くなっている乾さんを発見した・
・

地下への入り口は、探偵くんが通った後なのか、開いたままだった。そして、その後を追いかけて、上へ上がるとそこは、すでに火の海だった・・・

世紀末の魔術師15（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

結局春休みの間に、キッドsideを終わらせることは出来ませんでした。本日、始業式……。なんと、高校3年生。受験生なんです（他人事）

さて！

今回は、エッグの仕組み&素の探偵くん。

エッグの仕組みについて描写するのがとにかく難しくて……。分かりますかね？

そして、もう一つのテーマ。素の探偵くん。

襲われた時、キッドは何をしてたんだ！ともなりますが、こんなところでトランプ銃を取り出すわけにもいかず、毛利探偵が撃たれそうになった時は、コナンくんの方が早く反応し、蘭ちゃんの時は、毛利探偵の言動にあきれてたということ……。 （逃）

まあ、普通に考えたら、キッドとしてあるまじき反応の遅さ。

さて、次回は……

キッドの思考ですね。そして、探偵くん、コナンくんの推理ショー開幕……。ぐらいまでかな？予定通り、20話ぐらいになりそうです。

今月はキッド月間！楽しませていただきます

それでは、評価・感想・ご意見などお待ちしてます！というか、送ってやってください。

これからよろしく願います！！

世紀末の魔術師 16

彼を追いかけて走っている途中、オレは考えていた。

彼女があの時つぶやいた、彼の本当の名前・・・“新一”・・・。
彼女は実は知っているのか？彼が工藤新一だということに・・・。

イヤ、それはないな。今まで何回か彼女に会ってるけど、そんな感じは受けなかったし。

・・・じゃあ、あれは？！あの時、何で・・・。

と、ここまで考えていて、唐突に思い出した。紅子の予言を・・・。

『姿変わりし光の魔人 白き罪人を滅ぼさんとす
だがその前に 光の魔人に影がかかる
その影は光の魔人の 最も恐れしものなり』

探偵くんの正体を知った時にも考えたけど、あの時は分からなかった。その“影”の内容に。

IQ400のオレの頭は、走りながらもフル稼働している。

もし・・・もしも、探偵くんが自分の正体を隠して、あの幼なじみの彼女と過ごしているのなら・・・。オレと同じように、相手に言

えない秘密だから

だから、彼女に隠して過ごしているとしたら……。

探偵くんの最も恐れしもの……“影”の内容は……。

“彼女に正体がバレること!!”

少なくとも、あの博士って人は知ってるみたいだけだな。彼のことを普通に『工藤新一』と呼んでいたし。

探偵くんのことだから、おそらくそれは、彼女を守るためにやっていること。

……整理するとつまりは、何でか知らないけど、探偵くんは子供になってしまって、それで幼なじみに（彼女を守るため）正体を隠して生活してるってトコか？

ったく……マジで事件体質なんだな。

で、知ってるのは、あの博士って人……。イヤ、待てよ？あの紅子似のおジョーサン……。彼女もやけに探偵くんに見え求めているって感じだったな。

何というか、あの2人の雰囲気は、秘密の共犯者みたいな感じが出てたような感じがしないでもないし……。うーん……。これは、保留だな。

それにしても、探偵くん、ドコ!?と、思っていたら人の気配。瞬時に気配を消し、その人がいる方へ・・・と、急に声が響いた。

「ちょっと待ったあ! テメエだけ逃げようたって、そうは問屋が卸さねえぜ!」

え? この声・・・毛利探偵!?

「アンタの正体は分かっている・・・中国人のフリをしているが、実はロシア人だ!」

って、今度は、白鳥刑事!?!...オレ、しゃべってねえぜ?

すると、『声』はさらに続けて言う。

「・・・そうだろ? 怪僧ラスプーチンの末裔まつえい・・・青蘭さん!」

この口調・・・探偵くんか? ビックリしたあ・・・。

というか、相手は国際的犯罪者。探偵くん、勝算はあるのか? しかも、相手は銃所有・・・。

ということで、スコピオンの正体に驚きつつも、(まあ、探偵くんのことだから、きっと何か策があると思うけど) いつでも補助できるように、トランプ銃を取り出し、そのまま見続けておくことにした。

さあ、名探偵・・・じっくりとその推理聞かせていただきますよ?

世紀末の魔術師16（後書き）

みなさん！こんにちは、ペロコです。

ようやく・・・ようやくここまでやってきました！本当に長かった（ハ・ハ・ハ）ほぼ3ヶ月、この話が続いています。ノンビリすぎてスイマセンm（――）m

今日は、シークレットファイルの発売日で、テンションが上がったため投稿させていただきました（笑）奇術愛好家も入ってるんですよ 見た方は、うちのを読んで幻滅しないでくださいね？

さて、今回は・・・

以前お知らせしたとおり、キッドの思考&コナンくんの推理ショー開幕でした。

ようやく、以前書いた紅子ちゃんの予言内容につなぐ事が出来てホツとしています。全てが繋がった感じかな？哀ちゃんの件は、きちんと考えてあるのでご安心を うちの妄想では、哀ちゃんのこともキッドは知っているということになっているので。

コナンくんの推理は、次のお話からとなります

まあ、映画と全く同じですが。実況中継風になってしまつかもしれませんね；

ということ、次のお話は・・・

コナンくんの推理ショー 全部いけるか微妙なところです。

前回、高3だと言ったら何人かの方が話に乗ってくださいって嬉しかったです（*ハ・ハ・ハ*）勉強も頑張らせていただきます。それでは、こんなうちでよろしければ、評価・感想・ご意見などいただけたら嬉しいです。

これからもよろしくお願いします！

世紀末の魔術師 17

未だに隠れたままの探偵くん。が、様々な人の声を使って、スコーピオンである青蘭さんを追いつめていく。

そして、たまに移動して銃の弾数を減らしていく作戦のようだ。タタタ・・・と移動し、そこに2発の銃弾。

「フン！最初は気づかなかったさ。浦思青蘭の中国名、プース・チンランを並び替えると、ラスプーチンになるなんてことはな！」と、寒川さんの声。

「オ、オマエは、私が殺したはず!!」

・・・そりゃね。確かに彼は死んでたよ？と、一体、鎧よろいが倒れ、そこにまたしても2発の銃弾。そして、彼女がそこに向かったスキに、
またも移動。

そして、一発の銃弾。と、ここで探偵くんの推理の続きが始まった。またしても白鳥刑事。

「ロマノフ王朝の財宝は本来、皇帝一家とつながりの深いラスプーチンのものになるはずだった・・・そう考えたアンタは、先祖になり代わり財宝の全てを手に入れようとしたんだ・・・」

なるほどねえ・・・でも、それは違うだろ？だからって盗んでいってことはねえし。

ましてや、そのために人を殺すなんてありえねえ。

「執拗に右目を狙うのも、惨殺された祖先の無念を晴らすためだろう・・・？」

「い、乾・・・」

というか、改めて考えると死んだはずの人間の声が聞こえるってかなり不気味だよなあ・・・と、ここまで来て、とうとう探偵

くんが彼女の前に姿を現した。

「ボク一人だよ……」「何ッ!？」

「これ、蝶ネクタイ型変声機って言うてね。。いろいろな人の声が出せるんだ……」と自分の胸元にある、赤い蝶ネクタイを手に取りながら言う。

ああ……これだったんだ……。奇術愛好家の時に、園子嬢の声を出してたの。(奇術愛好家8参照)

「オ、オマエ……。一体……」と言う青蘭さん。まあ当然の反応だわな。

「江戸川コナン……。探偵さ!！」

……。コレ、決め台詞なわけ? オレも言われたことあるし……。と、ここからより本格的な探偵くんの推理ショーが幕を開けた。

「寒川さんを殺したのは、アンタの正体がバレそうになったからだ……。寒川さんは、人の部屋を訪問しては、ビデオカメラで撮っていたからね……。とつさのことで裏返すのを忘れた写真……。それは、恋人なんかじゃなく、グリゴリー・ラスプーチンの写真だった! グリゴリーの英語の頭文字は「G」だが……。ロシア語では「(ゲー)」だ。だから、喜市さんの部屋にあったゲー・ラスプーチンのサインを見てもすぐには繋がらなかった」

……。へえ? なるほどねえ。

「寒川さんに写真を撮られたと思ったアンタは、彼を殺害しに行った……。そうだろ? 青蘭さん……。いや、スコープオン!！」

「ふ……。よく分かったねえ、坊や……」

いや、坊やじゃねえし。

「乾さんを殺したのは、その銃にサイレンサーをつけているところ

でも見られたつてとこかな？」

「オヤオヤ・・・まるで見ていたようじゃないか！」
え？そうなの？当り！？さっすが、名探偵

「でもおっちゃんを狙ったのは、ラスプーチンの悪口を言ったからだ！そして・・・蘭の命までもを狙った！」という探偵くんが書斎での会話がよみがえる。

『お父さん、ラスプーチンって？』 『いや、オレも世紀の大悪党だったということぐらいしか・・・』

と、青蘭さんの声が飛び込んできた。

「おしゃべりはそのぐらいにしな！可哀想だけど、アンタには死んでもらうよ！」

「その銃・・・ワルサーPPK/Sだね。マガジンに込められる弾の数は八発・・・乾さんとおっちゃん、蘭に一発ずつ。今ここで五発撃ったから、もう弾は残ってないよ・・・」

あ、これが勝算だったってわけね？

「ふ・・・いいこと教えてあげる。あらかじめ銃に弾を装填した状態で八発入りのマガジンをセットすると、九発になるのよ！つまり、この銃にはもう一発弾が残っているってこと！」

オイオイ・・・これはマジだぜ？だが、探偵くんは逃げることなくむしろ、余裕の表情。

「じゃあ、撃てよ・・・本当に弾が残ってんのならな・・・」
つて、オーイ！！

慌ててトランプ銃を取り出す。が、やはり探偵くんは動かない。
まだ、何か勝算があるのか？探偵くんの右目にレーザーポイントの

明かりが合わせられ・・・

「バカな坊や・・・」と彼女が呟いた後、一発の銃声が響いた

世紀末の魔術師 17（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

今回も読んでいただけてありがとうございます

最近、本当にたくさんの方にこの小説を読んでいただけてるということを実感しています。ありがとうございます（*ハハ*）

さて、今回は・・・

コナンくんの推理ショー

キッドの実況中継風になってしまいましたか・・・。たまに、突っ込みを入れる感じで（笑）

今更なことなのですが、ハッキリ言ってこの小説のキッドは、アホですね。もう、これ以上ないくらい。うちの書くキッドはなぜにアホになってしまっているんでしょう？他の作者様の書くキッドとはとにかくギザでカッコいいのに・・・。これも、やはり技術の違いですね（泣）精進いたします；

さて、今回は・・・

銃声の響いたあとのコナンくんの行方。そして、脱出して・・・ぐらいですかね。

だいたい完成しつつありますね、自分の中で。ようやくですが；
うちは、最初下書きをしてからパソコンに入力するタイプなんですが、ただ今19話目を執筆中です。

20話・・・かな、やっぱり。楽しみにしてくださいね！

受験勉強もありますので、出来るだけ早く少しでも完成に近づけるのが当座の目標です。なので、世紀末の魔術師の完成を頑張って急いでいます。

そんなうちに、励ましのコメントや、評価を下さる、心優しき方を

お待ちします！（笑）

いや、本当ですよ。待っています

それでは、これからもよろしくお願いしますね。

世紀末の魔術師 18（前書き）

宣伝

前回、後書きにて「うちのキッドはアホだ」と言っていました、うち自身が出来るだけキザさを追求して書いたのが「鎮魂歌 after」です。

カッコよさを読みたい方は、そちらもどうぞ

でも、まずは世紀末を読んでくださいね
それでは、ドキドキのシーンへGo

というか、こんなところで宣伝してもいいのか？

世紀末の魔術師 18

『じゃあ撃てよ・・・本当に弾が残ってんのならな・・・』 『バカな坊や・・・』

一発残っていた銃弾は引き金を引いた時正常に作動し、探偵くんの右目へと一直線に向かい、探偵くんの眼鏡を割って

って、ええ?! 割れてない!?! というか、弾き返した!?!

一瞬怯んだ青蘭さん。そのスキに探偵くんはあの超人キックを繰り出そうとする。

が! スコーピオンである青蘭さんもすぐに我に返り、新たにマガジンを装填する。

で、狙いを定めようと銃を構える・・・ので、危ない!!--と、オレは素早く青蘭さんの銃をトランプ銃から出たトランプで弾き飛ばすと、次の瞬間。オレも怯んだあの超人キックから繰り出された鎧の一部が青蘭さんに直撃!

・・・痛そ・・・。

もちろん、彼女は気を失ってしまった。

彼は彼女に近づき眼鏡を取り外しながら説明する。

「あいにくだったな! スコーピオン・・・このメガネは博士に頼んで特別製の硬質ガラスに変えてあったんだ!!--と。」

・・・博士? ああ、あのじいさんか。確か発明家だったよな。ってことは、そのメガネだけじゃなくおそらくは、あの蝶ネクタイ

も超人キックを繰り出すためのあの靴も……。そして、以前奇術愛好家のときに、園子嬢を眠らせたのもおそらくは、例の「博士」の発明品ってところか……。

スゲーな。特許とってるのか？あれ。

と、感心しているヒマはなかった。城が崩れ始めている。

慌てて探偵くんのところに駆け寄っていく。「コナンくん！大丈夫かい？」と聞くと、振り向くと同時にメガネをかけ直してしまいがった。

青蘭さんを抱き上げ、「さあ！ここから脱出するんだ！コナンくん！！」と

何かに気を取られた様子の探偵くんを急かす。

何とか火のあまり回っていないところから脱出に成功し、車のもとへと走る。

後部席に横たえ、メモリーズ・エッグを取り返す。

そして、後ろについてきた探偵くんに言う。

「僕は今から彼女を警視庁に連れて行くから、このエッグ、夏美さんに返してくれるかい？頼んだよ！！」と有無を言わさぬ口調で言い残し、車に乗って横須賀を後にする。

道中、無線で警視庁の警部さんに連絡を入れておく。

「あ、目暮警部ですか？今、そちらに向かっているところなのですが、スコープオンを捕まえました。現在気を失っておりますが、命に別状はありません。私は用事があるので、あとはよろしく願います」と。

無線の奥では、警部さんが呆気にとられていたと思う。

道が空いていたため、案外すぐに到着した。

急いで彼女を引き渡し、オレは用事を済ませにあるところへと急いだ。

そう、ある場所とは・・・

米花町2丁目21番地。工藤邸である。

世紀末の魔術師 18（後書き）

みなさん、こんにちは、ペロコです。

いやぁ……。とうとうここまで来てしまいましたね！自分でドキドキです。

そして、今日はキッドがアニメに登場　しっかりと楽しみたいと思います

さて、今回は・・・

銃撃戦&脱出&工藤邸へ。ということで、一気に進ませていただきます。

映画の脱出シーンは書かれていないので、どうしようと思ったんですが、そこは回避^{スル}の方向で（笑）

ただ、その代わりと言っては何ですが会話をきちんと交わしていたということにさせていただきました。そして、道中目暮警部に連絡も済ませていたということ

工藤邸に向かう理由は、もちろんみなさんお分かりだと思いますが、それは次回！

ということで、次回は・・・

工藤邸侵入後&毛利探偵事務所へ。

いよいよ、あの映画のクライマックス　しっかりと書かせていただくので、お付き合いお願いします

また、評価・感想・ご意見など本当にたくさんいただいてありがとうございます！これからも、「こうした方がいい」「や「面白い」「え」などの言葉、お待ちしてます。

これからもよろしく願いしますね！！

世紀末の魔術師 19（前書き）

やってまいりました！あの名シーン

……自信を持ってお届けできたならそれほどいいことはないのですが、イマイチかもしれません……。
とはいっても、まだラストまではいつていませんが。

さあ！いよいよクライマックス

楽しんでいただけたら嬉しいです（*ハ・ハ*）
では、どうぞ

世紀末の魔術師 19

工藤邸に到着したオレは、いくつかの張り巡らされたセキュリティを難なく突破し、中へと入らせていただいた。小声で一応「お邪魔します・・・」と呟きつつ。

初めて入る工藤邸の第一印象は“広い！！”とにかく広い。

これ、本当に一軒家だよなあ・・・？と考えつつどんどん奥へと進んでいく。

暗闇でも、オレの目はキッドをやっているせいか慣れているので、辺りを見回す程度には見えている。

「2Fかな・・・」と独り言を言いながら階段を昇っていく。

で、昇ってみたら、そこは部屋、部屋、部屋・・・。

さすが金持ち。一般庶民のオレン家とは違うねえ。

って、こんなところで時間食うわけにはいかなえんだよ！どこだ？

工藤新一の部屋は。

仕方がないので、片っ端からドアを開けては閉めていく。

4つ目まで来た時、それらしき部屋に遭遇。

ベッド、机、そしてずらりと本の並んだ本棚。大きな洋服タンス。タンスの戸を開け、中を物色させてもらい、帝丹の制服を取り出し着てみる。

・・・ウワ・・・ブレザーって着慣れてないせいか変な感じ。サイズはぴったり。

新聞とかテレビで見た感じだと、けっこう顔立ちはおレに似てたし、いじらなくてもOKかな。問題は髪の色。記憶にある工藤新一ヘア

ーにセツトし、これで準備は終了。
声も確か変える必要はねえし、これほど簡単な変装はおそらく、コイツ以外はありえねえな。

とか思いつつ、工藤邸を出ると・・・雨。傘ねえし。

さすがに借りるわけにはいかないで、濡れちゃうけど・・・ま、オマエのためだぜ？探偵くん。と、雨の中を毛利探偵事務所を目指して走り出した。

角を曲がると、彼女、毛利蘭さんが窓から顔を出していたので、慌てて隠れる。

彼女が中を向いた瞬間、一気に駆け出し、事務所への階段を昇る。

と、聞こえてきた声・・・彼女の声だ。・・・泣いてる？

「ホントに新一みたいで・・・」って、核心に迫ってるじゃねえか！！

「でも、別人なんでしょ・・・？そうなんだよね・・・コナンくん・・・？」

・・・？探偵くんの声が聞こえない？ほら、早く否定しねえと！と、そつと中をうかがうと、

あ、オレの愛鳥のハト・・・もう、元気そうだな

「あ、あのさ・・・蘭・・・」ってオーイ！！メガネ外し始めちゃってるじゃねえか！言っちゃダメなんじゃねえのかよ？“最も恐れしもの”なんだろう！？というより、彼女を守るためなんじゃねえの！？もしかして、オレの予想が外れてたってこと！？

さすがにこれ以上になると危ないので、姿を現すことにした。が、当の探偵くんは気づかずに「オレ・・・実は・・・」と話し出す始

末。

だが、彼女はドアの方を向いていたためにオレに気づいてくれた。

「・・・新一・・・」

「えっ!？」と探偵くんも振り向く。

「ホントに新一なの!？」

「・・・厳密に言うと、違うね(笑)」ということで、その質問はスルー。

「あんだよ、その言い草は・・・おめえが事件に巻き込まれたって言うから様子を見に来てやったのによ!」と言ったら、彼女はオレの方へ走り寄ってきた。

その後ろで探偵くんは・・・あれ、驚いてる。・・・って、あっちゃ。気づいちゃったみたいだね。

「バカ!！どうしてたのよ!? 連絡もしないで!！」

え? 連絡とかしてねえの? そりゃ、怒るだろ・・・。

「悪い、悪い・・・。事件ばつかでさ・・・今夜もまたすぐに出か
けなきゃいけねえんだ・・・」探偵くんからも早く逃げたいし。

「待ってて!! 今、拭くもの持って来るから!!」と、彼女は階段を昇っていつてしまった。

それを見送ったオレは・・・さっさと逃げることにした。まあ、無理だろうけど。

とか思いつつ、来た道を戻り始め、また雨の中を歩き出した時、声がかかった。

「待てよ! 怪盗キッド・・・」

はいよ。とまでは言わなくても足を止め、探偵くんの話を聞くことにする。

「まんまと騙されたぜ・・・まさか、あの白鳥刑事に化けて船に乗

つてくるとはな・・・」と言つ声を背後に、指笛で探偵くんが助けてくれたオレのハトを呼ぶ。

しっかりとつけられた愛鳥のハトは、開いていた窓から飛んできてオレの肩に。

まあ、今頃、本物が警視庁に帰つてるところだろうから、警部さん、混乱してるだろうなあ・・・

世紀末の魔術師 19（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。
やってきました。世紀末の名シーン

・・・の前半。（笑）

ということで、今回は・・・

快斗の変身&毛利探偵事務所にて、快斗（新一）登場。

いやぁ・・・やっぱりいいですね。この映画。

もう、何も語りません。今回は。素直に受け取っていただけたらいいなと思います。

次回は・・・

いよいよ、「世紀末の魔術師」最終話！！ジャスト20話というキリのいい感じでいけるのがすごく嬉しいです。もちろん、あのシーンも書きますが・・・おそらく描写は出来ません。というか、マジツクのタネが分かりません；

ということで、最終話を間近に控えたこんなうちに、励ましの評価・感想を！そして、ダメだしなど大歓迎！の意見などお待ちしています。

これからもよろしく願いしますね。

世紀末の魔術師20（前書き）

長い間、お付き合いありがとうございます!!

いよいよ、今回が「世紀末の魔術師」ラストとなります。

約3ヶ月かかった全20話・・・

最後までお楽しみ下さい

世紀末の魔術師 20

探偵くんはどうやら、オレとお話がしたいらしい　どんと話しかけてくる。

「オマエ、分かってたんだな・・・あの船の中で何か起きる事・・・」

「え？いや、全然！むしろ、成り行き（笑）」

と言うのは、何かイヤなので、探偵くんが勝手に推測してくれたので、調子を合わせておく。

「確信は無かったけどな・・・一応、船の無線は盗聴させてもらってたぜ」

と、ウソをつくかわりに、1つネタばらし。

・・・したのに！探偵くんはそれをスルーし、まだ話を続ける。

「もう1つ・・・オマエがエッグを盗もうとしたのは、本来の持ち主である夏美さんに返すためだった・・・」

オレは話を聞きながら、ポンポンとハトを空中から出し、体にとめていく。

「オマエはあのエッグを作ったのは、香坂喜市さんで『世紀末の魔術師』と呼ばれていたことを知っていた。だから、予告状に使ったんだ・・・」

「ほーう・・・他に何か気づいたことは？」と促せば、すぐに返事が返ってくる。

「夏美さんの曾おばあさんが、ニコライ皇帝の三女、マリアだつてことを言いたいのか？」

「マリアの遺体はまだ見つかっていない・・・」と後を継げば、すぐに返答。

完全に気づいているんだな、探偵くんは。

「それは、銃殺される前に喜市さんに助けられ、日本へ逃れたから・
・二人の間には愛が芽生え、赤ちゃんが生まれた・・。しかし、
その直後に彼女は亡くなった。喜市さんは、ロシア革命軍からマリ
アの遺体を守るために、彼女が持ってきた宝石を売って城を建てた。
だが、ロシア風の城ではなく、ドイツ風にしたのは、彼女の母親、
アレクサンドラ皇后がドイツ人だったからだ・・。こうして、マ
リアの遺体はエッグと共に秘密の地下室へと埋葬された・・。そし
て、もう1個のエッグには、城への手がかりを残した。子孫が見つ
けてくれることを願ってな・・とまあこう考えてみれば全ての謎
が解ける。」

はい、正解 長セリフご苦労様。おかげで、オレはハトで真っ白だ
よ；

ま、さすが名探偵だね。だけど・・

「キミにひとつ助言させてもらうぜ。世の中には謎は謎のままにし
ていた方がいいってこともあるってな！」と言うと、

「確かに、この謎は謎のままにしといた方がいいかもしれねえな・
・」と分かってくれた。

ではここで1つ、名探偵に質問を。

「じゃあ、この謎は解けるかな？名探偵・・なぜオレが工藤新一
の姿で現れ、やっかいな敵であるキミを助けたのか・・。」と尋ね
ていると、

「新一！！」と彼女の声。時間切れだな。

パチン！と指を鳴らし、俺は退散。ハトが夜空へ飛び立つ中、空中
で消えさせていただいた。

さて、解けたかな？あの謎は。

まあ、ハトを助けてもらったっていうのも理由の1つだけど・・

同じ立場だからさ。

もちろん、探偵と怪盗としては対極の立場なんだけど、幼なじみに正体を隠しているのはオレも同じ。彼女の涙ほど堪^{こた}えるものはねえからな。

そして、もう1つ・・・探偵くん「オマエの正体は知ってるぜ？」と知らせるためかな。

と思いつつ、工藤新一の制服を返しに再び戻ってきた工藤邸。簡単に中に進入し、制服を元通りにし、キッドへと姿を戻していざ、出発！

つて時に、明かりがついた。

「えっ!？」と後ろを振り返ると、あの紅子似の少女が腕を組んで立っていた。

「・・・それで？怪盗さんは何の用があつて工藤君の服を？」と尋ねられ、呆然としていたオレはようやく我に返った。

「勝手にお邪魔してスイマセン、お嬢さん。」と頭を下げ、胸に手を当てる。

「我が名探偵殿の窮地を助けるために少々拝借させていただきました」

「・・・そう。それで、工藤くんはもう大丈夫なのね？」

「ええ、おそらくは。・・・あの、1つお尋ねしてもよろしいですか？」

「あら、何かしら？」

「彼を・・・探偵くんを工藤新一だにご存知なんですね。なぜ・・・とお尋ねしても？」

「・・・彼を救ってくれたのなら、信用してもいいのかしら？」

「ええ。他言は決していたしません」

「そう・・・ま、彼が何もしなかったのなら信用してもいいのかも

ね。いいわ、教えてあげる。彼を・・・工藤新一を江戸川コナンにしたのが、この私だからよ。そして、私も彼と同じように姿が小さくなったもの・・・これぐらいでいいかしら？怪盗さん？」

「ええ、十分ですよ。答えていただきありがとうございます。それでは、この事は約束したとおり、決して他言はいたしませんので、ご安心を。では、私は帰らせていただきます。おやすみなさい、お嬢さん。いい夢を・・・」

と言つて、工藤邸の窓からハンググライダーで飛ばせていただいた。もう、雨は止み、オレの心の中の疑問と同じように晴れ渡っていた。彼女も知っていたんだな、彼の正体。そっか・・・。今度会う時が楽しみだな。

彼女はきつとオレに会ったことは言わないだろうし。紅子似だから。

そういえば・・・やっぱり疑問がまだあった・・・。

どうして彼女、確か・・・「灰原さん」って呼ばれてたな、彼女はオレがあそこ、工藤邸に行ったことを知っていたんだろう？

世紀末の魔術師20（後書き）

みなさま、こんにちは、ペロコです。

やつちやいました！これにて、「世紀末の魔術師」は終了でございます！お付き合いありがとうございます

さて、今回は・・・

気合いを入れて臨んだ今回のお話。映画のクライマックスということもあり、できるだけ丁寧に書こう！と思ったのですが・・・いかがでしたか？

うち自身が、コナンにハマったきっかけとなった、この映画。コナンを初めて見たのがこの映画だったんです。で、見事にハマりました。

キッドが助けた理由、ハトのことだけじゃないんじゃないか？という妄想からスタートし、こんなに長いことかかってしまいました。これも、書きたかったひとつなので。

最後の哀ちゃんとの会話は・・・オマケみたいなものです。もちろん、哀ちゃんが工藤邸にやってきたのは、センサーに反応した影を、阿笠邸で確認したため。工藤邸のセキュリティは、哀ちゃんのパソコンに繋がっていると、これまた妄想（笑）ゲストのような形で出演していただきました。

さて、次回は・・・

どうなるでしょう？この後、小休憩を入れたいのでその後ですね。お楽しみにしていてください。

それでは、こんな長い話に付き合ってくださいった心優しき皆様、本当にありがとうございます！

評価・感想・ご意見などたくさんいただけて、しかも褒めていただ

いて・・・ありがとうございます！パソコンの前で感動しています、いつも。

これからもよろしく願いしますね！！

それでは、次の小休憩で

いつでも、評価・感想・ご意見など待っていますので、いただけたら嬉しいです

小休憩2（前書き）

一応、ここで次のお話の予告風なのを書いていますが、読みたくなければスルーしてください。結構です。たいした内容書いていませんので・・・

では、お読みになる方だけどうぞ

小休憩2

よっ！突然・・・ってわけでもねえけど、再びこの「小休憩」に引っ張り出された黒羽快斗です。

・・・ん？紙？

“キッドに変装するべし”

・・・オイ。これ、ペロコからの命令ってことか？
まったく、面倒くせえなあ・・・。

P O M

はい、作者ペロコに強制召喚された怪盗キッドです。改めましてこんにちは。

今日は・・・羽根休めですね。

今月は特に忙しかったもので・・・。こうして、お時間をいただきました。

さて、私情は置いて・・・

先日までお話ししていた「世紀末の魔術師」、お楽しみいただけましたでしょうか？

このたび、読者数が8500人を越え、こちらとしましても嬉しい限りです。

作者は・・・今この部屋にはいないのですが、どうせどこかで隠しカメラでも仕掛けておいて、それを見ながら笑っているでしょう・

。。

とにかく、そんな作者はほっておきまして、ご愛読いつもありがとうございます。

「世紀末」は、探偵くんに関する様々な情報を知ることが出来た機会でした。

改めて、タダ者じゃないという感想は正しかったのだと思いましたね。

だって、初めて会ったとき、誰が「工藤新一」だと予想できたでしょう？！ビックリしましたよ。。。心臓に悪い。

そして、未だに灰原さんと仰るお嬢さんが、なぜ私が工藤邸に行ったことを知っていたのか掴めていません。

この怪盗キッドにもつかませないとは。。。なかなかやりますね。。。

。。。っだあああ！！めんどくせえ！

キッドは言葉遣い変えないとなんか違和感感じるから、頑張ってたけどここからは黒羽快斗として話させてもらう。一応命令は守ったし、文句はねえだろ。

さて！読者の方々から「次も楽しみ！」とか「次は何するの？」と、次への期待がかなりあり、オレとしてもかなり嬉しい。で、次の話なんだが。。。

アイツが出るんだよ、アイツ！

ほら、分かんたろ？アイツだよ、白バカ！

あの、探偵が集結した「黄昏の館」さ！

つたく・・・白バカが余計な話持つてくるから、こんなことになるんだぜ!?

・・・っと、ここからは次のお楽しみだな。

つてなわけで、次からも楽しみにしてほしいな。オレとしては、どこかでペロコもそう言ってるだろ、おそろく。

そういや、次で45話目なんだつてな。長^{なげ}えな、オイ。いつも、付き合ってくれてサンキューな。

それじゃ、次のお話で よろしく頼むよ。

小休憩2（後書き）

みなさん、こんにちはです。ペロコです。

44話目は、小休憩 本当の羽根休めです。

ということで、勝手に指令を出させていただきました。ふざけていてスイマセン。でも、楽しいです。こういうのは。

さて！読者数がとにかく増えていて、本当に読んでいただけてるんだな〜とかなり嬉しいです 感激です（*^_^*）ありがとうございます

文章力の無いうちが、こんなお話を書いていて、さらにたくさんの方に読んでいただけてるなんて、夢でも見ているのではないかと疑ってしまうほどです。

で、次のお話は本文中でも快斗が言っていたように「黄昏の館」となります。

快斗視点の探さんを書くのはどうも・・・書けるのでしょうか？
なんか、自分で書く決めておきながら今更不安になってきました；
頑張らせていただきます。

勉強がどんどん忙しくなっていくので、今まで以上に時間がかかることが予想されます。そして、この「キッドside」が完結しないまま受験本番に突入することになると思いますが、これからもお付き合いお願いします！！

次のお話からが「黄昏の館」本編です。
いつ投稿できるか分かりませんが、構想が決まり次第こちらに書かせていただきますので。

それでは、これからもよろしくお願いします!!
長くなってスイマセン。

黄昏の館1（前書き）

前回、いつ出来るかわからないと言っていました。が、考え出したら止まらなくなり、第1話が完成しました。

とうとう、「黄昏の館」スタートです

楽しんでいただけたら嬉しいです

それでは、どうぞ！！

黄昏の館 1

春眠曉を覚えず。

これは、春は寝心地がいいので、夜明けになっても眠りから覚めな
いという意味。

そして、もう1つ。秋の夜長。

これは、そのままの意味で、秋は夜が長いということ。つまり・・・

「いい意味に解釈すると、夜の方が時間が長いんだし、夜は起きて
て昼に寝てる方が効率がいいってことだよな」

「何ぶつぶつ言ってるの？」

「いや・・・昔の人はいいこと言うなあってことだよ」
「？」

「アホ子には分かんねえだろうなあ？先人の素晴らしさが！」

「何よ、バ快斗！青子にだって分かるもん！」

「へえ？」

「・・・っもう！知らない！！」

「・・・はあ・・・。ねみい・・・」

最近はずぼしいビッグジュエルもなく、きわめて平凡で平和な日々
を送っているオレ、黒羽快斗。

・・・そして、怪盗キッド。

外は紅葉が始まりつつある、秋の景色。

「平和だ・・・」

そんな平和だったはずのオレの秋は、1人のたった一言からバラバ
ラと崩れ去ることになる。

その一言とは・・・

「やあ、黒羽くん。おはよう。元気だったかい？」
という、この一言。

言葉の意味としては、朝の風景として別に当たり前の内容。ただ、その声の持ち主に問題があっただけ……。ここにいるはずのないこの声の持ち主は、なぜか気配を消して背後から現れ、唐突にオレにこの言葉をかけた。

この、甘ったるいイヤミな口調で……

「はっ……。白馬あ!？」

「失礼な人だね、キミは。朝からそんな大声で驚き、さらに人に向かって指をさすなんて……」

「オメエ……。なんで日本こっちにいるんだ？」

と、ようやくショックから立ち直ったオレは言葉を発することに成功した。が、コイツの切り替えしは、今までのように早かった。

「居ては都合の悪いことでもあるのかい、黒羽くん？まあ、こっちに戻ってきたのにはちゃんとした理由わけがあるのだけどね」

「理由？」

「そうさ。コレがイギリスにいた僕の元へと届いたんだよ」

と言って、ヤツは、黒い紙を取り出し、オレに渡した。

“貴殿の英知を称え 我が晚餐に御招待申し上げます

神が見捨てし仔の幻影”

「あんだあ？コレ……」

「どうだい？興味深いだろ……？」

神が見捨てし仔の幻影……。ねえ……。ふざけたこと抜かしやが

って！

と、内面は怒り心頭なのだが、表面上はボーカーフェイス。何の興味が無い風を装って「ん。」と渡された紙を返す。

「おや、いいのかい？」

「なんでオレにそんなこと聞くんだよ・・・」

「ふ・・・まあいいさ。僕がイギリスから帰ってくる間に調べてもらっていたんだが、コレは日本中の探偵たちに送られたそうだよ。

最近有名になってきているらしい眠りの小五郎・・・毛利探偵、そして、この僕含めて6人にね！しかもこれには、200万円の小切手が同封されていてね。それで急遽帰国したってわけさ！」

「・・・へえ・・・わざわざイギリスにまで送るなんて、面倒なことをするな、ソイツ」

「ええ！それは、僕の実力を知っていたからでしょう！なので、僕が帰国して参加できるように、この晚餐会は明日の夜に行われるようです」

「あつそ・・・じゃ、オレは寝る！」

・・・アイツ、何考えてんだ？わざわざ、あんなもんオレに見せてもしかして、オレに来てほしいのか？なんちゃって。

それにしても、毛利探偵か・・・接点多いなあ、何だかんだで。

ってことは、あの探偵くんもついてくるってことだよな。

ふーん・・・面白いじゃねえか！白馬の狙い通りってことがシャクだが、聞かされちゃやっぱ気になるし、今晚あたりにでも下見に行ってみるか。

で、夜。

書かれてあつた場所へと向かう途中にポツンと建っているガソリンスタンドを発見。

こりゃ、使える　ってことで、下見は終了。

明日に備えて、今日は帰路についた。

黄昏の館1（後書き）

みなさま、こんにちはです。ペロコです。

4月ももうすぐ終わり。そして、ゴールデンウィーク真っ只中ですが、みなさんのご予定はいかがでしょうか？うちは、おそろくどこにも行けません；

さて、今回は・・・

とうとうスタートした「黄昏の館」。全部で何話になるのか決まっています。少しづつじっくりと仕上げていきたいと思っています。

冒頭の会話は、なんとなく思いついたものなので、別に深い意味はありません。

探さんに対する快斗は・・・探さんファンには微妙にキツイのでしょうか？口調が難しい、彼・・・。頑張って本物らしく書こう！と意気込んでいたのですが、なんかおかしい；

違和感感じた方がいらっしゃったらスイマセン。

さて、次回は・・・

第2話目ですね。まだ、全体の構想をどんな感じに仕上げていくのか決まっていらないのですが、ま、原作を読んで頑張ります。コナンくん、出てきますよ（それだけ、決定）

それでは、黄昏の館もよろしく願いますね。

まだまだ、評価・感想・そして、「こうした方がいいよ！」という意見をお持ちの方など、メッセージをいただけたら嬉しいです。

けっこう、未確定な部分が多いので、反映されることがあると思いますので。

それでは、これからもよろしく願います!!

黄昏の館2

翌日。白馬が戻ってきて2日目。

いよいよ・・・ってほどもねえけど、今日が例の晩餐会。

なんか・・・わくわくするなあ　あの探偵くんが絡むとどうもね。

ってことで、大した準備をするわけでもなく、家を出る。

向かう先は、昨日発見したガソリンスタンド。

この店員さんに変装して、彼が来るのを待つ。

オレのハトに取り付けたカメラから映像が入ってきているし、いつでも準備OKなんだけど・・・雨降ってきやがったな。雷も鳴ってるし、なんかイヤな感じた。

と思っていたら、1台の車。カメラをズームにしてみると、運転席に毛利探偵の姿。

よし、行くか！と、ガソリンスタンドから出て、車の方へ森の中を走り、見つけた。

彼の車。

オレはトランプ銃を取り出し、一発。パシュッと音がしてトランプが1枚飛び出し、車のタイヤを切れ味のよくなっているトランプがかすり、タイヤがパンクする。

さて、オレは戻るか・・・。

ガソリンスタンドに戻って待つこと、10分。彼

毛利探偵が

入ってきた。

「あのお・・・すみませんが・・・」

「はい？」と、店員の格好で出迎える。

「車がパンクしちまって・・・。タイヤのスペアあります？」

「ええ・・・ありますよ・・・」

「そいつぁゝ助かった！この先にある、館に行きたいんだが、何でかパンクしちまって・・・」

「ああ・・・それなら、きつとコレのせいでしょう・・・」と、トランプ銃を構える。

「あん？・・・お、オマエ・・・!!」

「お休み、毛利探偵・・・」

パシュッと、トランプ銃から即効催眠性のカードが飛び出し、煙が出る。

その際、マスクをつけることを忘れずに。

ドサツと音がして、毛利探偵は眠りの中へ。では、お洋服お借りしますよ、毛利探偵？

服をはいで、ここでもともと働いていたおじさんと一緒にしばって放っておく。

そして、毛利小五郎としてタイヤのスペアを持って車の元へ走る。

車に到着したオレは、手馴れた手つきでタイヤを取替え、車を発進。

・・・あ、オレ、無免許だわ。・・・ま、いいか。

「お前ら、こっちが近道らしいからこっちから行くぞ！」と乗っていた蘭さんと、探偵くんに声をかけ、車は森の中へ。

・・・が、揺れる、揺れる！！ガタンゴトンとそれはそれは揺れる。
「・・・ったく、何が近道だ！あのガソリンスタンドの親父・・・

これで間違ってたたらタダじゃ済まさねえぞ！」と、外見は毛利小五郎としてしゃべっているが、内心では、この道は合っていると確信している。

何せ、オレが昨夜通ってたから・・・歩きだっただけさ。

と思っていたら、「あ、やっとまともな道に出たみたい！」と蘭さん。

「でも、近道っていうのは、本当だったみたいだね！」

「ん？」そりゃそうだろ。

「だって、ホラ、あれでしょ？ボク達これから行く黄昏の館って・・・」と、後部座席から身を乗り出し、指を指す。

その指の先には・・・確かに屋敷。だが・・・

「黄昏の館っていうより、まるでドラキュラ屋敷だな・・・」と呟く。

雨が降り、雷が鳴っているの、それなりの雰囲気は出ている。

助手席で、「ほ、ホントにいくの・・・？あんなところ・・・」と怯える蘭さん。

「バー口！『貴殿の英知をたたえ 我が晩餐に御招待申し上げます』なんて招待状と、200万の小切手もらったら、行くっきゃねえだろ！」と、あくまで毛利探偵として答える。

「でも、その招待状、差出人のところに何か不気味なこと書いてなかった？」と、蘭さんは尋ねる。

「ああ・・・『神が見捨てし仔の幻影』とか何とか・・・」と言いつつ、バックミラーで探偵くんの顔を見ると、それは嬉しそうな顔をしていた。

「ねえ・・・やっぱり行くのよそうよ。ホントにドラキュラが出たらいやだし・・・」と、蘭さんは未だに怖がっている。

自分で言ったとはいえ・・・もしかして、お化けとかの類、苦手なのかな？

ゴメンゴメンと思いつつ、フォローを入れる。

「フン！この日本にドラキュラなんていやしねーよ！日本の山奥に住んでるって言ったら、せいぜい山姥ぐらい・・・」と言いつつ、視線を前に戻すと・・・そこには、傘を差した・・・

「や・・・山姥！？」

急ブレーキをかけつつ、思わず叫んでしまった。

黄昏の館2（後書き）

どんどん広がる妄想ワールド・・・
みなさま、こんにちは。ペロコです。

今回も妄想全開でいかせていただきました
このゴールデンウィーク、やはり一日中家に閉じこもるようになり
そうです・・・が、外はきれいな五月晴れ お出かけになる方は、
楽しんでくださいね

さて、今回は・・・

妄想ワールド全開の前半。アニメとして放送された時は、確かパンクしてたはずとあやふやな記憶を思い出し、書かせていただきました。違っていたら・・・こっそりと教えてください（笑）

そして、毛利探偵との会話は、途中からキッドの声になったっていうことで どこからかは、おまかせです。

さて、今回は・・・

“山姥”と出会うわけですが・・・。探偵たち、何人まで登場させることが出来るでしょうね？未確定です。行き当たりばったりですね；

また、出来次第考えます。区切るところが難しい・・・。

いつも、たくさんメッセージありがとうございます 本当に励みになります（*ハハ*）また、感想や評価、そしてご意見などいただけたら嬉しいです

「最初から読んでたけど、感想送るの初めて」と言う方が何人かいらっしやって、なぜかパソコンの前で照れてるうちですが、これからよろしくお願いしますね！！

黄昏の館3（前書き）

このお話で、読者数が10000人を突破しました
みなさま、本当にありがとうございます（*^-^*）
こんなアホな快斗くんがみなさまに受け入れてもらえて
書いてるうちも、とても嬉しいです

どなたが10000人目なのかは分かりませんが、
そのミレニアムなカウントを踏まれた方は、うちがリクエストにお
答えます！

というのはウソです（笑）誰か分からないので・・・。
ってなことで、今回も楽しんでいただけたら嬉しいです
ではどうぞ

黄昏の館3

オレは叫んだものの、さすがにそれはないだろうと思いなおした。後ろで探偵くんが窓を開け、「おばーさん、どうしたの？」と声をかける。

すると“山姥”は、「見ての通り、私のかわいいフィアットちゃんがエンストしてしまつてね。誰か通リかかるのを待っていたのよ。あなた達もあの館に行くんでしょ？乗せてつてくれないかい？」

と、笑顔で尋ねるので、別に断る理由もないし、

「んじゃ、後ろの席にどうぞ」と勧める。

“山姥”が車に乗りながらお礼を言っていると、オレの横で蘭さんが「お父さん、行くんなら早く行こ！私、トイレ行きたくなつちやつたし・・・」

と、耳元で話しかけてきた。

・・・アップ・・・やっぱ青子に似てるなあって思つてたら、後ろの“山姥”は突然話し始めた。

「お嬢ちゃん？余計な事かもしれないけど、私の町の小学校の校長がよく言つてたよ・・・成功する人間はそれがチャンスだと分かる人間だつて・・・」またいつか同じようなチャンスに巡り合えるやり過ごしてしまつたら、いくら待つてもチャンスは来ない』とね・・・どうしてさつき、ガソリンスタンドに立ち寄つたチャンスに済ませなかつたんだい？」と・・・。

「えー？」と、探偵くんと蘭さん。

そりゃ驚くよ。そんな話、これっぽっちもしてねえし・・・。

「何で知つてるの？ボク達がさつきガソリンスタンドに寄つたつて・・・」

「簡単な事だよ、おチビちゃん」と、“山姥”は話し始める。

「カラッポの灰皿と、その下に落ちてゐる真新しいタバコの吸殻……灰皿から零れ落ちるまで吸殻をためてたつてことは、ヘビースモーカーの証拠。それなのに、灰皿は空^{から}。そんなことが出来るのは、10キロほど前にポツンとあつたガソリンスタンドだけよ……。見知らぬ老婆を車に乗せてくれた紳士^{ジェントルマン}が娘さんの前で車の窓からポイ捨てするわけないからねえ……。」と見事な推理。

確かにガソリンスタンドにやってきた彼は灰皿持ってたな……と一瞬遠い目をして、ふと我に返る。そして焦りつつ、「あ……あんた一体!？」と尋ねると、“山姥”は、

「私は千間降代……あなたと同じ探偵よ!眠りの小五郎さん?」と初めて名前を言ってくれた。

……ん?

「千間降代つて……。」

「安楽椅子に座つたまま、事件の話を聞いただけで解決しちゃうつていう、あの有名な……。」

へえ……おもしれえ……。

「とりあえず、この灰皿は預かつておこつかい?」と身を乗り出し、灰皿を手取る。

「あ、ちよつと!」と焦るが、それは演技。

笑みを浮かべた千間探偵は、「館に着いてからも私の前では吸わないでおくれよ?私はタバコの煙が大の苦手なのだから……。」とダメ押し。

でも、助かつた……と思つたのは秘密。

「くそ……。」と軽くにらんでおいた。

「さあ!館は目の前よ!!ビュンビュン飛ばしてちょうだい!!」と、テンションも高く千間探偵は叫んだ……。

雨の中、車を飛ばすこと15分。

ようやく到着した館の駐車場に車をとめ、改めて屋敷を見上げて一言。

「うひゃあ．．．近くで見るとますます化け物屋敷だな．．．」
と言ってる間に、蘭さんは急いで館の中へ。

傘を差し、オレらも玄関へ向かう途中、すでにとめてあった車に目が行く。

「ベンツにフェラーリにポルシェ！」

「物騒な車ばかりだねえ．．．」

と、次々に見ていくと．．．．．

「アルファロメオじゃねえか！！しぶいねえ．．．」

と近寄って見てみると、

「オレの女に触るじゃねえ！」という声がとんできた。

え？と振り返ると、「そいつは、オレが５年かかってやっと手なずけたじゃじゃ馬だ。よその男の汚え手きたねで触られてヘソを曲げられたら困るじゃねーか．．．。なあ、チヨビひげ．．．」「チヨ、チヨビヒゲ！？」

オレ！？と目をまん丸にしていると、千間探偵が

「あら、久しぶり！あなたも呼ばれてたのね．．．」と言い、それに対する返事が

「オウ！千間のバアさんか．．．」だった。

２人は知り合い？というか、誰！？

「でも、大丈夫？先週シカゴでマフィアに撃たれたって新聞に載ってたけど．．．」

「フン！そんな昔のことは忘れちまったよ．．．」

という２人の会話を聞いて、ようやく目の前にいる男が茂木遥史という、これまた探偵だということを知った。

中に入りつつ、未だ千間探偵と茂木探偵の会話は続く。

「で？そろそろ所帯を持つ気になったかい？あなた、あと3日で40でしょ？」

「フン・・・そんな先のことは分からねえな・・・。今オレに必要なのは、さつきから悲鳴をあげてるこの腹を黙らせる御馳走だけだぜ？」と答えた茂木探偵の後ろで

「なに！？コックが急病で来れなくなっただけ？話が違っじゃないか！ワシは、晚餐を楽しみにわざわざここへ来たんだぞ！？」

と怒鳴っている男の人と、「も、申し訳ありません・・・食材は買ってきてあるんですけど・・・」と謝っているメイドさんの姿。

「じゃあ、厨房を貸したまえ！ワシが作る！！美食と殺人はワシの脳細胞を高揚させられる唯一の宝なのだからな！！」と大声で怒鳴って立ち去る彼。

彼なら見たことある。

「ありやー確か、美食家探偵の大上氏・・・」と呟く。

「どういうつもりだい？こんな山奥に探偵を4人も呼んだりして・・・」と千間探偵が尋ねると、

「あ、いえ。お招きした探偵は全部で6名です・・・」とメイドさんの返事。

そこに蘭さんがトイレから戻ってきた。

「おいおい、あと二人もいるってのか？」と茂木探偵が尋ねると、「はい。女の方と、少年が・・・」と答えたメイドさん。

「少年ってまさか・・・新一！？」と言う蘭さんに、「違うよ！きつと平次兄ちゃんだよ！」と答える探偵くん。

そりやそうだよな・・・でも結局来てるじゃねえか・・・。

するとメイドさんは、「いえ、ご主人様にいただいたお呼びするリストにそのお二方も入っていたんですが、工藤様は連絡が取れず、服部様は中間テストが近いからと服部様のお母様からお断りの電話を頂きまして・・・。そのお二方がキャンセルになったので、毛利様のご家族を二人お呼びするのにご主人様からOKが出たんです」

と事情を説明。

ふーん・・・？そんな経緯があつたんだ・・・。

ところで、「服部平次」って？どっかで聞いたことあるような・・・？

「で？その探偵好きないかれた野郎はどこなんだ？」と尋ねた茂木探偵に、

「さあ・・・私もまだ会ったことがありませんので・・・」

と、メイドさんはビックリ発言をかました。

黄昏の館3（後書き）

みなさま！暑くなってきましたね。

関西も夏日が続いていますが、みなさまのところはどうですか？
と天気情報を語ってみたペロコです。

そして、前書きにも書きましたが、10000人突破ありがとうございます

うちの書く快斗が愛されてるのがすごく嬉しいです（*^_^*）

さて、今回は・・・

いつもより長めでお送りしましたバージョン（？）

登場した探偵は、“山姥”こと千間探偵。

ハードボイルド系の茂木探偵。

そして、美食家探偵の大上探偵・・・。

なんと、まだ3人！スイマセン。探さん出せませんでした・・・。
ちなみに、関東ではあまり名が売れていない設定になっている服部
平次くん。快斗は知らないということ（笑）

次回は・・・

ようやく！ようやく、探偵たちが全員揃います

ここまでの道のりが長すぎですよ。スイマセン。久しぶりに書く
探さん・・・。快斗視点で進みます。そこだけきちんと覚えておい
てくださいね

それから、学校の方が本格的に始まってきたので更新頻度が遅くな
ると思います。

こんなうちですが、頑張って書いていくので、コメントや評価など
していただけたら本当に励みになります！
これからもよろしく願いますね。

黄昏の館4（前書き）

テストから解放されて、再びここに来て、

「キッドside」の読者数が5桁という真実が
本当に嬉しくてたまりません！！

いつも、読んでくださってありがとうございます（*^_^*）
これからも頑張るので、応援してくれる心優しきお方をお待ちして
います！！

では、4話目お楽しみ下さい。

黄昏の館4

この屋敷の主人に会った事もないと言ったメイドさん。

「え？でも、リストもらってたんでしょ？」と尋ねると、

メイドさんは戸惑いつつ話し出した。

「はい・・・確かにリストはメイド採用の面接の時に頂いたんですけど・・・奇妙な面接で・・・。割のいい仕事だったので、応募者が殺到したんですが、いざ面接の部屋にはいたら、パソコンとこの晩餐会の説明書と招待客のリストが机の上に置いてあるだけで、誰もいなかったんです・・・。私の前に並んだ応募者が次々と首をかしげて部屋から出てくるので、変だなあとは思っていたんですけど・・・。」

すると、蘭さんが尋ねる。

「じゃあ、どうして採用されたか分からないんですか？」

「ええ・・・パソコンのモニターの指示通りに書類に目を通してたら、突然音がしてモニターに『あなたを採用します』という文字が出て・・・。」

オイオイ・・・。

「でも、声ぐらい聞いたんでしょ？主人からOKもらったって言うてたし・・・。」と聞くと、

「細かい話は、全て携帯電話のメールでやり取りしましたから・・・。」と答える。

マジかよ!？

すると、千間探偵は

「へえ」。面白いじゃないの・・・。わたしや、やっとゾクゾクしてきたよ・・・。」

って言い出すし、茂木探偵は

「フン！俺はその玄関の扉の妙な柄を見た時からしびれてたぜ？」
と言いだした。

その声を聞いて、蘭さんが注意深く見ていると、

「気をつけな、ベイビィ……。たぶん、そいつは血の跡だ……。」「
って言うもんだから

「ええ！？」と扉からのけぞった。

と、そこに新たな声が飛び込んできた。

「扉に対して、ほぼ45度の入射角で付着した飛沫血痕よ……。」「
ふき取ったみたいだけど、この館内のいたるところに血が染み込んだ跡が残ってるわよ。どうやら、この血痕の主……。1人や2人じゃないみたいね……。」「

と言いつつ、液体を階段の手すりに吹きかけている彼女……。」「
もしかして、槍田探偵？！うわぁ……。美人

って考えに浸っていたら、さらに声が飛び込んできた。

「ルミノール……。血痕に吹きかけると血液中の活性酸素により酸化され、青紫色の蛍光が放出される……。」「さすが、元検死官。いい物をお持ちで……。」「

槍田探偵が横を見ると、立派な鷹がいるもんだから、「え！？」と驚いた。

しかし、オレからはその声の主はバツチリ見えているわけで……。」「

「あ、驚かしてすみません……。英国でボクと行動を共にしてイギリス
たせいか、血を好むようになってしまったらしくて……。でも、
わざわざ帰国したかいましたよ……。長年隠蔽され続けた
あの惨劇の現場に、40年の時を経て降り立つことが出来たのだから……。」「
ボクの知的興奮を呼び覚ますには十分すぎますよ……。」「

出たああああ！！！！

この甘ったるいイヤミな口調はどうにかなんねえのか！？

「まあ、ボクがここを訪れた理由はもう一つありますが・・・そうだな、ワトソン！」

と鷹に呼びかけるロンドン帰りの坊ちゃん探偵・・・。

白バカ・・・いや、白馬・・・。

コイツが現れて、なにやら変な空気になってしまった。

と、メイドさんが思い出したように

「それでは、今来られた方はお部屋に案内しますので、その他の方はリビングでおくつろぎ下さい・・・。晚餐の仕度が整いましたら呼びに参ります」

と言って、オレ達3人と、千間探偵を部屋に案内してくれた。

黄昏の館4（後書き）

みなさま、こんにちは、ペロコです。

お久しぶり・・・ですね、このお話は。テストだらけだったため、なかなか投稿できていませんでした。スイマセン。

無事、今日終了しまして、解放感に浸っております

さて、今回は・・・

探偵だよ！全員集合 と、題しまして・・・（笑）無事に探さんを出すことができました。ま、小五郎の顔して「出たあああ！！！」と思っていたら面白いなと思ひまして・・・。

槍田さんが美人なのは、うちの意見です。クールビューティ

さて、今回は・・・

いよいよ、黄昏の館に集いし目的、晩餐会のスタート どこまで書けるんでしょうかね？謎です。まだ未確定です。計画性無しです。

そんなうちですが、しばらくはマイペースではありますが、このお話投稿できる状態にありますので、頑張つて更新していきたいと思っています！

では、評価や感想や、ご意見などお待ちしております
これからよろしく願ひしますね。

黄昏の館5

メイドさんについて、部屋へと向かう。その途中で千間探偵の部屋で千間探偵と別れ、オレ達はさらに奥へ。

「毛利様たちは、こちらでございます」

どうも、とお礼を言つて中に入り、荷物を置いて着替える。

あ、ちゃんと蘭さんは別の場所だよ？

で、着替え終わったオレ達はみんながいるリビングへ。

そこでは、みんな座つてオレ達を待つていた・・・いや、白バカと茂木探偵はビリヤードをしていた。他にもチェスだの、トランプだの・・・けっこう色んなものがある。暇つぶしには持つてこいつてわけね。

てなわけで、オレは千間探偵とチェスを、蘭さんと探偵くんは槍田探偵とトランプをすることにした。

しかし、千間探偵・・・強え・・・。ポーカーフェイスもつぶれて、思わず渋い表情になつちまうよ・・・。

「うゝん・・・」と、次どういこうか悩んでいたら、突然

「きゃああああ！！！」という蘭さんの悲鳴が。

「どーしたんだ、蘭！？」と思わず立ち上がり振り向くと、血の付いたトランプが・・・。

千間探偵がトランプを手に取り、

「おやおや、ここにも血が飛んでたみたいだねえ・・・」とのん気に言う。

すると茂木探偵が「そういえば、メイドが言つてたぜ？この館の物は、犯行当時のままほとんど動かしてねえってな・・・」とさらに言う。

そのせいで「じゃ、じゃあ、このリビングでも惨劇が・・・」とま
すます怯えてしまった蘭さん。

と、ここでギッツ・・・とにぶい音をたててドアが開いた。

「きゃっ!!」と言って飛びついてきた蘭さん。・・・役得

ドアの外にはメイドさんの姿。

「晩餐の仕度が整いました。ご主人様が食堂でお待ちです」と伝え
に来たようだ。

ゾロゾロとメイドさんの後をついて食堂へと向かう。蘭さんはすつ
かり食欲を失ってしまったようだ。顔から血の気が引いている。マ
ジで大丈夫なのか？

で、食堂に到着。長いテーブルの向こうには、いかにも怪しげです
と言いたげな“ご主人様”の姿が。そして、言葉を発した。

「崇高なる六人の探偵諸君！我が黄昏の館へよくぞ参られた。さあ、
座りたまえ。自らの席へ・・・」

なぐんて言う。テーブルの上には並べられた食器と名札。

ということ、それに従いみんな着席。

と、その直後、“ご主人様”は再び話し出した。

「君達を招いたのは、私がこの館のある場所に眠らせた財宝を捜し
当ててほしいからだ。・・・私が長年かけて手に入れた巨万の富を・
・・・命をかけてね・・・」

え？

「い、命だと!？」と言い返した瞬間、ドオオ・・・ン!!と外で
爆発音が!

大上探偵が「な、何だね、今の音は!？」と叫ぶと

「案ずることはない。君たちの足を断つたまでのこと・・・」

・・・それってつまり・・・

「まさか、車を!？」

「私はいつも警察や君たち探偵に追われる立場・・・たまには追いつめる側に立ちたいと思ひましてな・・・もつとも、ここに来る途中にあつた橋も同時に落としましたから、車があつたとしても逃げるのは不可能。もちろんここには電話はなく、携帯電話も圏外・・・。そう。つまりこれは、その財宝を捜し当てた方だけに財宝の半分を与え、ここからの脱出方法をお教えするというゲームですよ・・・。気に入ってもらえましたかな？」

黄昏の館5（後書き）

大変遅くなりました！！！m（――）m

みなさま、こんにちは、ペロコです。大変お久しぶりでございます。なかなか更新できず、申し訳ありませんです。

前回、ようやくテストが終わったと言っていたのですが、何なっとやることは多数存在していました……。今更の更新になっています。

さて、今回のお話は……

ようやく、“ご主人様”の影が出せました「役得」と思ったのは、もちろん顔には出していないませんよ？（笑）

本当に、どこできたらいいのか謎なお話です。

さて、今回は……

うちのお気に入りシーンが登場します 探偵一人ひとりに対する快^キ斗^トの気持ち、楽しんでもらえたらなと思います

問題は、いつ更新できるか分からないということだけですな・頑張ります。

さて、ここでみなさんに質問です！

原作・アニメでご覧になった方はよく分かると思いますが、あと2話ぐらいあとから、快斗も含めた探偵たちの騙し作戦が決行されます。はい、ここで質問です。どう進めたらいいと思いますか？原作に忠実に、最後までタネ明かしは置いておくのか、それとも、騙している心境を書きつつ進めていくのか……。

多くのみなさまの意見を聞きたいと思っていますので、それも含めたご意見・ご感想などお待ちしています。

叱咤激励など大歓迎です！

では、次のお話でお会いしましょうね
これからもよろしく願います。

黄昏の館6（前書き）

わお！！50話目ですって（他人事）

いつも読んでくださってありがとうございます（*ハハ*）
読んでくださってる皆様がいてこそ小説だと思っています。

これからよろしく願いますね。

では、記念すべき50話目に来た、「黄昏の館6」をお楽しみ下さい。

うちのお気に入りに来て、なんかちょっと嬉しいです

黄昏の館6

どうやら、“ご主人様”はオレ達を脱出不可能にしたうえで、財宝を探し出させ、見つけた人にはその半分と脱出の仕方を教えるという『ゲーム』がしたいらしい。

すると、“ご主人様”に向かって左側に座っていた茂木探偵が立ち上がり

「フン・・・虫が好かねえんだよ、てめえみてえな面を隠して逃げ隠れする野郎は!!」

と叫びながら“ご主人様”の頭にかかっていた布を取り外した。
が・・・

「さあ!!腹が減っては戦は出来ぬ!存分に賞味してくれたまえ。
最後の晚餐を・・・」

「マネキンの首にスピーカー!?クソツ!!」

そう、“ご主人様”の姿はマネキンとスピーカー。
つまり、本人はこの場にいなかったということだ。

「だ、誰が・・・一体誰がこんなことを!？」

と毛利探偵らしく呟く。すると、

「あら、毛利さんともあろうお方が知らずに来たんですの?・・・
ちゃんと招待状に書いてあったじゃない・・・『神が見捨てし仔の
幻影』って・・・」

「幻影ってーのは、ファントム・・・神出鬼没で実態がねえ幻ってこった・・・」

「にんべんを添える『仔』という字は獣の子供・・・ホラ、『仔犬』とか『仔馬』とかに使ってしょ？」

「『神が見捨てし仔』というのは、新約聖書の中で神の祝福を受けられなかった『山羊』のこと・・・つまりこれは『子山羊』を示す文章・・・。英語で山羊はGoatだが、子山羊のことはこつ呼ぶのだよ・・・」

「Kid・・・」

「な、なに!？」

「こついえば、もっと分かりやすいでしょうか・・・? Kid the Phantom thief・・・」

「お、おい、まさか・・・」

「まさかそれって・・・」

「そう・・・狙った獲物は逃さない、その華麗な手口はまるでマジック・・・」

あ、どーもV千間探偵V

「星の数程の顔と声で警察を翻弄する天才的犯罪者・・・」
「いやぁ・・・天才だなんて！褒められて喜ぶところなのか分かりませんが、一応、褒め言葉として取らせていただきますよ、槍田探偵？」

「我々探偵が生唾を飲んで待ち焦がれるメインディッシュ……」
あ、オレ、メイン？ やりい サンキュ、大上探偵

「監獄にぶち込みてえ気障な悪党だ……」
わお！ 過激だね、茂木探偵。

「そして、僕の思考を狂わせた唯一の存在……。闇夜に翻るその白き衣を目にした人々はこう叫ぶ……。怪盗キッド……」
あら。オレ、白バカの思考までくるわせたの？

しっかしまあ……。ここまで褒められると嬉しすぎて、「キッド」の名前が出た時、ビミョーに気配出したぜ、オレ。

さあ……。気づいたのは6人の探偵のうち誰？

もちろん、これはオレからの挑戦状。気配に敏感な探偵くんは気づいたかもね。

漆黒の星のときもエッグの時も気づいてたし。

あとの5人は……。どうだろうね？ みんなポーカーフェイスだし……。

黄昏の館6（後書き）

みなさま、こんにちは。今回も読んでいただいております。ありがとうございました。ペロコです。

最近、どんどん暑くなってきた、夏バテ気味です；

さて、今回は・・・

キターーーー（^^）v「黄昏の館」の中でのお気に入りシーン一応、誰が言ってるのか分からない方のために、「誰が言ったか」を快斗が言っていない部分を順番に名前を挙げておきますね。

槍田探偵 茂木探偵 千間探偵 大上探偵 探さん 毛利探偵（快斗） 探さん 毛利探偵（快斗） 蘭ちゃん。です。どうも、白馬探偵とは言えない・・・（笑）

一人ひとりに対する快斗の心情を書きたくて、黄昏の館を書き始めたときから、ここを楽しみにしていたんです（*ハハ*）書いてスツキリ。

さて、次回は・・・

そうですね。どこまでいけるでしょうか？（え）自分でも分かっていないので、ここでは「不明」ということで、結論付けていいですよ？いけるところまで・・・です！！

いつも、読んでくださってありがとうございます。これから、評価や感想、それにご意見などをお待ちしていますので、気軽にコメントしてください。

夏休みの間に「黄昏の館」を仕上げきってしまうつもりです。今のところ。どうなるか分かりませんけどね？

それでは、これからもよろしくお願いします m () m

黄昏の館7（前書き）

執筆遅れ気味で申し訳ありません。

51話目。かなり長くなっていることに
ふと気づくんですが、大丈夫でしょうか？
なんか、長編になってきました。（いつの間にか）
どっかで2つに分けるべき？

とりあえず、黄昏の館を頑張ります！
では、7話目どうぞ

黄昏の館7

「そ、それじゃあ、怪盗キッドが我々をこの晩餐会に招いたって言うんスか？」

と、口火を切る。

「ああ・・・どうやら世間に名の通った我々六人の探偵を集めて、知恵比べをやるうという趣向らしい・・・。自分が今までに盗んだ財宝と我々の命を懸けてね・・・」

とは大上探偵。ま、オレはんなことしねーし、しかも“盗んだ財宝”って・・・。オレは返してるっつーの！！

「多分、今もどこかで私たちの様子を見てるでしょうね。この館の至るところに隠しカメラが設置されてたから」
と槍田探偵。

「ええ！？」とわざとらしく辺りを見回すが、もちろんその存在は把握済み。ま、様子を見てるってのは当たってるけどね？肉眼を通してだけ。しかも、今日の前にいるよーん なーんて、内心でふざけていたら、ドアが開きメイドさんが登場。

「やっと来たわね、彼が言う最後の晩餐が・・・」と槍田探偵。
メイドさんが“最後の晩餐”をテーブルの上に置きながら言う。

「オードブルのフォアグラのマーブル仕立て、トリュフ入りジュレでございます。どうぞお召し上がり下さい」

うひょー うまそー！！と感動し、興奮していたら千間探偵が一言。

「ねえ、メイドさん？もしかして料理をテーブルに置く順番もご主人様から言いつけられていやしなかったかい？」

「あ、はい・・・。白馬さまから時計回りにと・・・」

え？白馬？何で？と疑問を口に出す間もなく、

「いやね・・・ゲームは始まったばかりだというのに、最後の晩餐

というのが私にはちよつと腑に落ちなくてねえ……」と千間探偵が呟く。

すると、

「ハハハ……毒なんか入っちゃおらんよ！料理はワシが作ったのだから！」と

大上探偵が弁明。そしたら白馬が

「でも、それを口に運ぶフォークやナイフやスプーン……。そして、ワイングラスやティーカップもあらかじめ食卓に置かれていましたし……。僕たちはこの札に従って席に着きました。まあ、彼が犯罪を犯すとは思えませんが、僕たちの力量を試す笑えないジョークを仕掛けている可能性はあります。自分のハンカチでグラスやフォークなどを拭いてから食べた方が賢明でしょう……」

……。おい。オレは喜ぶべきなのか？いやいや、そんなことはねえ！それにしても『笑えないジョーク』って……。と半目になりかけた時、横に座っていた茂木探偵が

「違えねーな……。奴のペースで事が進むのも氣にくわねーし、んならジャンケンでもして席替えするか？」

なんて言うから、焦って

「し、しかしそれで運悪く毒に当たったら……。」「というと、

「フン！そんなときや、それだけの人生だったと棺桶のなかで泣くんだな……」

と言い捨てられた。そんな無茶な……。

オレ、興味本位でこんなトコ来るんじゃないかった……。

で、みんなでジャンケン。勝った人から好きなところに座ることに。“ご主人様”に向かつて左回りに、大上探偵、オレ、千間探偵、白馬、茂木探偵、槍田探偵、探偵くん、蘭さんの順番に。氣を取り直し、食事スタート！！

「こりゃーうまい!!」うん、来てよかった!

「どうやら思い過ごしたったようだねえ・・・」

「いや、まだ分かりませんよ・・・」と言いつつ合っていると、

「どうかね、諸君。私が用意した最後の晩餐の味は・・・?」と“ご主人様”が話に参加。

「フン・・・おいでなすつたな・・・」と茂木探偵。

「では、そろそろお話ししよう・・・。私がなぜ大枚をはたいて手に入れたこの館をゲームの舞台にしたのかを・・・」

え・・・。まだ食っていたかったのに・・・。

「まずは見てくれたまえ!今、諸君の手元にあるフォーク、ナイフ、スプーン・・・そして食器類の数々を・・・」

そして、みんなそれぞれが見て、

「鳥?クチバシが大きくて、不気味な鳥のマークが付いてる・・・」と蘭さん。

ん?

「これ・・・鳥じゃねーか?」

「だとしたら、これはもしや・・・」

「もう、お分かりかな?それは半世紀前に謎の死を遂げた大富豪、烏丸蓮耶の紋章だよ・・・」

「か、烏丸蓮耶!?」

つてあの・・・かなり長生きした大富豪だよな?!

「食器だけではない・・・この館の扉、床、手すり、リビングのチェアの駒からトランプにいたるまで全て彼が特注した代物。つまりこの館は烏丸が建てた別荘・・・いや、別荘だった。4年前、この館で血も凍るような惨劇が起こったあの嵐の夜まではね・・・」

と、“ご主人様”は語りだした。

黄昏の館7（後書き）

毎度毎度、待たせてスイマセン。ペロコです。

夏休みに突入し、決意を新たに「執筆を頑張ろう！」と書いています。（普通は「勉強頑張ろう！」のはずなんですけどね？）

さて、黄昏の館も7話目。楽しんでいただけましたでしょうか？
ようやく、“ご主人様”が語り出す場面まで到達。・・・かかりすぎですね。もう少しペース上げたほうがいいのかな？全部で何話になるんでしょう。

探さんに対する快斗の反応だけではどうも、普通の高校生として。で、他の探偵たちにはキッドとして接してるような気がしますね。書いてて。

さて、次回。“ご主人様”の語りから・・・どこまででしょう？
できるだけ進めたいと思いますね。うん。頑張ります！！

いつも、コメントありがとうございます！勉強頑張れ！などのメッセージもいただけ大変感謝しております！！それに、辛口コメントも・・・もう、じゃんじゃん書いてください！しっかりと頑張りますので！！

それでは、これからよろしくお願いしますね。

黄昏の館 8（前書き）

「分けた方がいいのでは？」という意見をいただきました！！
他の皆様は、どう思っていますか？ぜひ参考にしたいので、
これからもコメントお待ちしております！！

では、第8話目どうぞ

黄昏の館 8

語りだす“ご主人様”。

「有能なる名探偵諸君なら、この館に足を踏み入れた時にすでにお気づきでしょう。飛び散ったおびただしい血の跡に……。そう、それは、この館がまだ美しさを保っていた40年前のある晩……。この館に財界の著名人を招いてある集会が開かれたのだよ。9歳で他界した“烏丸蓮耶を偲ぶ会”と銘打つてな……。だが、その実態は烏丸が生前コレクションしていた高価な美術品を競売するためのオークション。その品数は300点を越え、オークションは3日間行われる予定だった……。そしてその2日目の夜。オークションがたけなわ（11番の盛り上がり）だったこの館に、ずぶぬれの2人の男が訪ねてきたのだ。その2人の男は、寒さに震える唇でこう言った……。『この嵐で道に迷い、途方に暮れていたところ、山を見上げたら明かりが見えたのでやって来た。嵐が止むまでここにいさせてくれ』と。オークションの主催者は、最初彼らを入れるのを渋っていたが、彼らからお金の代わりに一枚の葉を渡され、態度が豹変した。主催者は彼らに言われるままにその葉を紙に巻いてタバコのように吸い、みるみるうちに陽気になり、彼らを館内に受け入れたのだ……。その様子を見た他の客たちも彼らに葉を勧められ、館内にその葉の煙が充満した……」

……。え？

「ま、まさか……。まさか、その葉っぱって……。ま、マリファナ……」。

おいおい、何かドンドンやばい流れになってきたじゃねえか……。それにしても、“ご主人様”はよくしゃべるなあ……。だが、ま

だまだ止まらない。

「しばらくすると、客だったある男が悪魔を見たような悲鳴を上げ、自分が競り落とした美術品を抱えて走り出し、ある女は涙が涸れるまで泣き続け、またある男は嬉しそうに自らの腕を手にしていたペンで刺した……。やがて客同士で美術品を奪い合うようになり、オークションの品だった名刀や宝剣で殺し合いが始まり、オークション会場は地獄絵図と化した……。そして、悪夢のような一夜が開け、八名の死者と十数名の昏睡状態の客達を残して、その2人の男は美術品と共に消えていた、というわけだよ……」

あ、終わった。

「し、しかし、なんでそんな大きな事件が世間に知られていないんだ？」と口に出せば

「おそらくその客の中にいたのだよ……。政界に顔の利く名士か、もしくはその一族がな……」

「なるほどねえ……。誰が誰を殺したかわからないその状況にそんな人がいたのなら……」

「ヘタに説明される前に事件をまるごと握りつぶした方が得策と判断したんでしょう……」

「フン……。それもその2人の男の計算のうちだったんだろうがよ……」

「まったく……。食欲をそそるステキな昔話だわね……」

と、集まった探偵たちが次々と言葉をつなげていく。これだから探偵ってのはやなんだ……。と思っていたら、メイドさん再登場。お、食後の紅茶だね。よかった。水だけかと思ってた……。すると再び“ご主人様”は言葉を発する。

「さて、もうお分かりかな？私なぜこの館を選んだのが……。それは、君達探偵諸君に再びあの惨劇を演じてほしいからだ……」

この館の財宝を巡って奪い合い、殺しあうあの醜態を・・・」

「フン・・・くだらん・・・」と大上探偵が一蹴。

「まあ、闇雲に捜させるのは酷だから、ここで一つヒントを与えよう・・・」

「ヒ、ヒント!？」

「『二人の旅人が天を仰いだ夜、悪魔が城に降臨し、王は宝を抱えて逃げ惑い、王妃は聖杯に涙を溜めて許しを乞い、兵士は剣を自らの血で染めて果てた』・・・」

「それってさっきの・・・」

「苦労しましたよ、この館に残る惨劇になぞらえて暗号を作るのは・・・。まさに、これからこの館で始まる命がけの知恵比べに相応しい名文句だと思わないかね？」

「・・・名文句・・・」

「バカね・・・」と檜田探偵。

「殺し合いつていうのは、相手もそうだけど、こっちもその気にならなきゃ・・・」

と、ここで“ご主人様”が割つてはいる。

「無論、このゲームから降りることは不可能だ・・・。なぜなら君達は・・・私が唱えた魔術にもうすでにかかってしまっているのだから・・・。さあ、40年前の惨劇と同じように、君達の中の誰かが悲鳴を上げたら知恵比べの始まりだ・・・。いいかね？財宝を見つけた方は、中央の塔の四階の部屋のパソコンに財宝の在処^{あじか}を入力するのだ・・・。約束どおり、財宝の半分と脱出方法をお教えしよう・・・」

パソコンに答えを入力・・・。

「うつ・・・」

へ？

「ぐおおお・・・っ!!」

おい!!

「なーんてな・・・」

「・・・おいおい・・・」

「悪いが、俺は降りるぜ。宝探しには興味がないんでね・・・」
と茂木探偵が立ち上がる。

「で、でも、ここからどうやって・・・」と蘭さんが尋ねると、

「フン！ここは海の真ん中の離れ小島じゃねえ・・・。山ん中を駆けずり回りゃ、運がよければ助かるさ・・・。じゃあ、アバヨ、探偵諸君！」と言い残し、

ドアを開けようとする彼を、思わずジト目で見てしまったオレに非はねえ!!

が・・・

「ぐっ・・・グアアア・・・!!」

とオレの左側で大上探偵が『悲鳴』を上げて倒れてしまった!!

黄昏の館8（後書き）

みなさま、こんにちは、ペロコです。

いよいよ、第8話目。そして、少々長めに挑戦。

ってことで、今回は・・・。

さつきもいったように、長めです。とはいっても、少しだけなんですよけど……。これ以上は、無理です！（笑）いよいよ、40年前の惨劇の内容も語られ、そして、ついに事件が・・・！！

大上探偵、ぶっ倒れました。悲鳴がかけない……。うまく伝わってたらいいですね。実際、どんな風に苦しむのかって分からないので、こんな感じで。

さて、今回は・・・。

次回も、ちょっとだけ長めに挑戦するつもりです！ので、やっぱりどこまでいけるか分かりません。でもまあ、そろそろ、騙し突入・・・かな？・・・やっぱり未定です。

夏休みに入っているので、少しでも早く更新できるように、頑張りますね！！

いつも、コメントありがとうございます！前書きにも書きましたが、分けるか分けないかの意見は随時募集中です。みなさまの意見を聞かせてください！

それに、評価や感想、ご意見などもお待ちしております！

これからよろしく願いますね。

黄昏の館9（前書き）

まだまだ分けるかどうかのご意見
お待ちしております！

では、今回もちょっと長めに挑戦しました。
楽しんでいただけたら嬉しいです

黄昏の館9

『悲鳴』を上げて倒れてしまった大上探偵。

ま、マジで！？さすがの茂木探偵も戻って来て、声をかける。

「おい、オッサン！二度目はもうウケねーぜ？」

いや、ウケる、ウケないの問題ではないだろう……。というか、ウケを狙っていたのか、茂木探偵は！！その横で、白馬が決定的一言……。

「22時34分51秒、心配停止確認。この状況下では蘇生は不可能でしょう……」

「何だと！？」

「そ、そんな……」

オレはいくら毛利探偵の格好をしているとはいえ、殺人とは縁がない人間。

どうしても近寄れず、遠くから眺める。

槍田探偵が、元検死官らしく、的確に検死していく。

「唇の色調が紫色に変化するチアノーゼが見られないわ……。それに、この青酸ガス特有のアーモンド臭……」

「じゃあ、さつきオッサンが飲んでた紅茶に青酸カリが！？」と

茂木探偵が言えば、その横では千間探偵が10円玉で調べ中。が、

「うんにゃ……。酸化還元反応はないよ……。どうやら、原因はこの紅茶じゃないみたいだねえ……」

「だったらいったいどーやって！？」

と、オレはそのまま疑問を口にする。というか、さすが探偵たち……。別に何か大きな一つのこととして捉えるんじゃないサラツと進めていっちゃうんだ……。

「さあ、賽^{さい}は投げられました……。自らの死をもつてこの命がけの知恵比べを華々しくスタートさせてくれた大上探偵のためにも、財宝捜しに精を出してくれたまえ……」

と、冷たい声で言う“ご主人様”。

コイツ……。マジで何考えてんだよ！人の命を何だと思って……とつかみかろうとしたが、茂木探偵の方が動きが早かった。すぐさまかけよって、

「てめえ……。ふざけるな！！」と首元をつかむと、マネキンの首がカン！と音を立てて床に落ちた。そこにあるのは、カセットテープ……。

カセットテープ……？

「タイマーにも繋がっているみたいだね……」

「食事をここに運ぶ時間も決められていたんですか？」と白馬がメイドさんに尋ねると、

「はい……。オードブルからメイン、紅茶の時間まで細かく……」と、肯定の返事。

「じゃあ、犯人は私たちの様子を見ながらしゃべっていたんじゃないのか……」

「テープの声を流してただけってわけね……」

と、ここまで来ていつになく静かだった、といっても、他の人が次々に言うから口をはさまなかっただけかもしれないけど、探偵くんが口を開いた。

「これで2つ分かったね。犯人は最初から大上さんを狙ってたってことと……。もしかしたら犯人は、ボク達の中にいるかもしれないってことが……」

なっ！！

「こ、この中に犯人がいるだとお！？」

もう容疑者の中に入るのはやなんだけど……。あのオフ会で懲り

ただけど……。

それに今この場合は探偵だらけ。オレ……マジでここまでくるんじゃないかった……。何で白馬のあんな誘いに乗っちゃったんだ？つて、今更だけどさ。

と、探偵くんがオレの疑問に答えてくれていた。自分の思考で少々混乱していたが……。

「だって、そのテープの声もこの中の誰かが前もって仕掛けておいて、ご飯食べながらみんなと一緒に聞いているふりしてたかもしれないでしょ？」

「た、確かにそうだが……」

オレは違う！！断じて違う！！すると、白馬は探偵くんのあとを継いだ。

「そして、この大上さんと同じ食卓についていた僕たちに気づかれずに、犯人は彼に青酸カリを飲ませて毒殺したんです……」

「ああ……俺たち五人の探偵の目の前でな……」

え？あ、そうか。探偵くんは勘定に入っていないんだ……。そりゃ、子供だもんな。見た目は。

「しかも、そのテープの声の内容からすると、この人が死ぬ時間も犯人には分かっていたようだねえ……」

「問題は、彼が倒れる直前まで口にしていたこの紅茶から、青酸化合物の反応が無かったこと……」

そうだよな……。

「じゃあ、まさか毒は紅茶の中じゃなくてティーカップの飲み口のところに……」

と、オレなりの推理を言うのだが、槍田探偵に一瞬で否定された……。

「彼、2、3度この紅茶を口に運んでたから……」

・・・あ、そう。なんだかなー・・・と落ち込んでいたら、蘭さんが久しぶりに口を開いて、オレの機嫌は浮上した。なんってったって・・・

「で、でも、皆さんが言ってる犯人って、怪盗キッドのことなんでしょ？彼って人殺しなんかしないって聞きましたけど・・・」

って言うてくれたんだから　おおー！もちろん、そうですよ、お嬢さんv

少なくとも、私が人を殺めるだなんて・・・。

って、そうか・・・。自分がここにいるからオレは分かっているけど、みんな“ご主人様”キッドって思ってた・・・。すっかり忘れてた。アハハ。

「ええ・・・僕が知る限りでは初めてのケースです・・・」

と、白馬らしい意見の言い方。まるでオレのことは何でも知ってます、みたいなの？

んなこと主張しても別に何の得にもなんねーだろ・・・。

「まあ、だべってても埒が明かねえ・・・。とりあえず、見に行ってみねーか？オレ達の車が本当に吹っ飛ばされたかどうかをよ！」と、茂木探偵が提案するので、それに乗る形でみんなで外に車を見に行くことになった。

出て行く直前、探偵くんが大上探偵の爪を見ていたのを横目で見ながら・・・。

黄昏の館9（後書き）

みなさま、こんにちは、ペロコです。

8月ですね。毎日暑い日が続いていますが、体調の方はみなさん大丈夫ですか？

今回は・・・。

探偵たちの考察、ですね。あと、快斗の激しい後悔。（笑）まあ、あんな簡単な誘いに乗っちゃうんですからね。自業自得です。（冷たいかな・・・？）

今回は・・・。

車を見に行くことになった探偵たちと、その他。そして・・・。
ぐらいですね。（バツサリ）

少しでも早く更新できるように頑張ります。

ご意見として、「心理描写が少ない」というのをいただきました。今回は、前回の話よりも快斗の心情を書いてみたのですが、これでもやっぱり少ないでしょうか。探偵たちの考察に、納得したり反発したり……。っていうぐらいしか書いてないんですけど。もし、何かまだありましたら、遠慮なく言ってほしいです。

評価や感想、そして、上に述べたようなご意見なんかもお待ちしております。
ています。

まだまだ未熟ですが、これからもよろしく願いしますね。

黄昏の館10（前書き）

まだまだ分けるかどうかのご意見
お待ちしております！

では、今回もちょっと長めに挑戦しました。
楽しんでいただけたら嬉しいです

黄昏の館10

外へ出たオレ達は、ボー然と突っ立っていた。

現場は、火事と言っていていいほどの明るさ。車はもちろん火だるま・・。

「オ、オレのレンタカー、丸こげ・・。」

「私のフェラーリもミディアムね・・。」と横で言う槍田探偵。

あ、槍田探偵のだったんだ〜と思っていたら、さらにその横で

「オレのアルファも、大上のオッサンのポルシェもパアだ！」

と茂木探偵。あゝあ。せつかく手に入れたって自慢してたのにねえ。

「じゃあ、あのベンツ、君の？」

と、槍田探偵が白馬に尋ねると、返ってきたのは否定の言葉。

「僕はバアヤに車でここまで送ってもらいましたので・・。」

はっ！バアヤも大変だ。・・ん？待てよ？ってことは・・。

「変だねえ・・。私は毛利さんの車に乗せてもらって来たし・・。

誰だい？あのベンツ・・。」

と、オレが初対面で“山姥”呼ばわりした、千間探偵が疑問を口にすると、メイドさんが返事をくれた。

「ご主人様の車だと思います・・。私が朝早くこの館に来た時には、もう停まっていましたから・・。」と俯きつつ。

それに素早く反応したのは蘭さんだった。

「だ、だったらやっぱり、この館には私たちの他に誰がいるんじゃ・・。」

と、不安そうに言う。すると、メイドさんが爪を噛みつつ、

「この分じゃ、私の車も向こうで燃えちゃってるかな・・。」と言った。

え？

「向こうって・・・メイドさんの車、ここに停めてないの？」と探偵くんが尋ねれば、

「ええ・・・。裏門に停めるようにご主人様に言われてたから・・・」とメイドさん。

「裏門の場所は！？」と尋ねつつ、走り出す。

「中庭を通り抜けて・・・」と説明を聞いたメイドさんの声を聞きながら、裏門へとみんなで走る。そして、ドアを開けると、そこにあつたのは・・・

「おー！！無事じゃねえか！」

メイドさんの車がそのままの状態でポツンと停まっていた。槍田探偵が

「何か怪しくない？この車・・・」と疑うのも分かるが、

「どーせ、奴が爆弾を仕掛け忘れたんっすよ！」

と、オレはきわめてプラス思考で考える事にした。だって、いつまでも落胆なんてしてらんねえしな。すると、千間探偵がメイドさんから鍵を借り、ドアを開けつつ、

「じゃあ、本当に橋が落とされているか見てこようかねえ・・・」

なんて言うから、オレを含めて茂木探偵と白馬も

「オレも・・・」といいつつ車のドアを開けて、乗ろうとした。

・・・のだが、

「これこれ、船頭が多いと、船が沈むよ・・・」と千間探偵に止められてしまった。

と、ここで白馬が一言。

「確かに・・・怪盗ならぬ、ファントムシップ幽霊船になりかねませんね・・・」と真顔で言ってくれやがった。

・・・白馬・・・オ、オメエはやっぱりいつもこうなのか・・・？

が、集まりし探偵たちはそれを見事にスルー。ケケツ。報われねえ

やつだな、オマエって。

すると、探偵くんが

「じゃあ、どの探偵さんに行くか、コインで決めれば？ボク、ちょうど小銭5枚持つてるし・・・」と言って、5枚の硬貨をボンネットの上に出した。

すると、それを見ていた千間探偵。

「あら、おチビちゃん。気が利くじゃないの！」と手を伸ばしてコインを取った。

・・・あれ？何でわざわざ？

「原始的な方法ではありますが・・・」

「まあ、しゃーねえか」

「じゃあ、コインの表の出た奴が・・・」

「車で橋を見てるって事で・・・」

と、白馬、オレ、茂木探偵、槍田探偵の順にコインを手に取り、いざ！

ピーン！といい音がして、左手の甲の上にパシッ！とキャッチ！

で、結果は・・・？

「行くのは、私と毛利さんと茂木ちゃんだね？」ということ、オレは行く方に決定！

つてことで、運転席には千間探偵、助手席にはオレ、後ろに茂木探偵が乗り、橋の元へと出発。

・・・したわけだが・・・

いやゝな沈黙が車内に漂っていた。

誰もしゃべらず、ただ車が進むだけ。

そんなに遠いわけではないので、5分ほどで着いたのが救いだっただけ。
到着後、オレと茂木探偵は車を降り、橋の方へ歩いたわけだが・・・。

「うひゃー・・・ひでえな、こりゃ・・・」

「橋が完全に落とされちまつてる・・・」

“ご主人様”の言ったことは本当だったってわけか・・・。

「オーイ！千間のバアさん！ヘッドライトを近めにしてくれ！足元が見てーんだ！」

という茂木探偵の申し出に「アイヨ！」と気のいい返事が返ってきた。

「犯人・・・動くかねえ・・・」

と尋ねると、

「ああ・・・これで終わるようなタマじゃねえよ・・・」と茂木探偵。

そんな会話をしていた次の瞬間。

背後でドォーン！！と車が爆発し、オレ達のほうへと走ってきた！何とか両端に避けてオレ達は無事だった。車はそのまま下へと落ちてしまったが・・・。

「せ、千間さーん！！」

と、オレは下へと叫んだ。背後で茂木探偵が笑っているのを感じながら・・・。

黄昏の館10（後書き）

みなさま、毎日暑いですね。ペロコです。

とうとう「黄昏の館」も10話目に！長いことかかってスイマセン。

さて、記念すべき10話目は・・・

メイドさんの車に乗って、茂木探偵&千間探偵と橋を見に行った快斗扮する毛利探偵。そして、ここでまたも災難が！！千間探偵の乗った車が橋の下に落ちてしまったのです！！

・・・ということになっています（爆）

そんな危ない状況の次回は・・・

いよいよ！（本当にいよいよですね；）

この話のメインといっても過言ではないでしょう！探偵たちの騙し作戦が決行されます！ここからは、完全にオリジナルが入ってきますので、ご注意ください

まだ、しっかりと辻褄を合わせたいので考え中です。ので、更新はまだ先になってしまうかもしれません。出来るだけ早く更新できるように頑張りますね！

いつも、感想やご意見ありがとうございます。

まだお待ちしておりますので、これからも読んでくれたら本当に嬉しいです！！

いつものことですが、異常に後書きが長くなってスイマセン。

黄昏の館 11

車が落ちていったあとをしばらく眺めていると、背後で

「さて…」と茂木探偵が話し出した。

「帰るか、チョビヒゲ…」

相変わらずオレのことは「チョビヒゲ」って呼ぶだもんな。

だが、「ああ」とだけ答えておく。

彼女は、おそらくもう…。

「チョビヒゲ…分かってんだろ？千間のバアさんがオレら呼び出したってことが」

「ああ…。あのコインを選んだ時にな」

「へえ？眠ってなくても多少は出来るんだな、え？眠りの小五郎さんよお？」

ハハハ。確かに、本来のあの人だったら、こんな答えは出てこないだろうな。

「オレだつて探偵なんだから！」

と、怒ったフリをして言い返しておくにとどめた。

現在夜9時。雨上がりということもあり、少々冷えている。

オレと茂木探偵は、来た道を歩きながら戻っているのだが。問題は…。

「千間さんをどうやって問い詰めるか、だなあ」

と、ふと口に出す。

独り言のつもりが、静かな夜にオレの声はよく響き、もちろんオレの横を歩いている茂木探偵にも聞こえたわけ…。

「そうだなあ…」と返事がかえってきた。

とりあえず！！

「とりあえず、槍田さんたちに『死んだ』って教えねえとな…」

「ま、それから考えるか。あのメイドさんと、お嬢さんと、あのボウズにはどっかに行ってもらっというて」

あ…

「たぶんコナンなら参加すると思うぞ？どれだけダメだって言っても…」

ま、探偵くんだからねえ。ダメって言っても盗聴とかはするだろうな。

「そんじゃあ、いいんじゃない？」

「え。いいのか？」

と言っていると、目の前に館が見えてきた。

「いいも何も、あのボウズがコインを選ばせたんだし、それなりに教え込んでんだろ？眠りの小五郎さん？」

あれは、素だけどね；

「あ、ああ」

「そんじゃ、ま。『探偵会議』といきますか！」

という茂木探偵が言っ、館のドアを開けた。すると、そこにはオレらの帰りを待っていた槍田探偵と白馬、それに探偵くんが立っていた。

槍田探偵がまず口を開いた。

「おかえり。…それで？」

それに茂木探偵が答える。

「ああ…ご覧の通りさ」

というか、もうみんな千間探偵だって分かってるんだね。まあ、オレにも分かるぐらいだから、当たり前なのかもしれないけどさ。さすがというか、何というか…。

と、ここで探偵くんが口をはさんだ。

「蘭ねーちゃんとメイドさんには、食堂で待ってもらってるよ！ボ

クたちはおじさんたちが帰ってくるのを待ってたんだ！」

「ちなみに、ここはカメラの死角ですから、もし音声が届いたら聞いても、小声ならばある程度は大丈夫でしょうし、ご安心を」と白馬があとをついだ。

「それで、どうするつもりなの？」

「ああ…それを相談しようと思ってな」

と、オレが槍田探偵に言う。

「そっちは何か考えあるか？」

と、茂木探偵が言う。

「ええ。このボウヤがね…死んだフリをするのはどうか、って…」

「は？死んだフリ！」

「うん！あの人の筋書き通りに探偵さんたちがお互いを殺しあつていくんだ！そのあと、ボクが千間さんに推理を話して、脱出方法を聞くよ！子供相手だったらきつと教えてくれるでしょ？」

「だが…」

探偵くん…頭の働きのすでに小学生じゃ誤魔化しきれないくらいになつてるけど、大丈夫なの！？

「僕は反対ですよ！そんな子供だまし…」

と、白馬は反対の様子。すると、オレの横で黙って話を聞いていた茂木探偵が

「よしっ！その作戦でいこう！どっちにしろ、オレらが生きてる間は問い詰めても吐かねーだろ！」

と探偵くんの案に賛成。

まあ、確かになあ…。それもそんな気がする。

「よし、分かった！俺も乗った！！…だが、どーやって『死ぬ』んだ？」

「それなら、部屋に拳銃があったから、あれを利用したらいいんじゃないかしら？」

と槍田探偵もヤル気。

「しょうがないですね。それならキッチンからケチャップを拝借しましょう。モニターで見ているとすると、ケチャップも血に見えるでしょうし……」

と、白馬もしぶしぶながら合意。

「蘭ねーちゃんとメイドさんには眠っててもらおう!」

と、探偵くんがいい、みんなそれにはすんなり合意。

「それじゃ、コナン!おめえにかかってんだから、しっかりやってくれよ!」

といいながら、背中をたたく時に盗聴器を仕掛け、準備OK!

「分かってるよ……」

と苦笑した探偵くんを見て、茂木探偵が一言。

「そんじゃ、いきますか!」

その声が合図となり、オレらは、作戦をスタートさせた。

黄昏の館11（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

まだ先になるかもしれないと言っていました、
とりあえずここまで完成したので投稿させていただきました。

ということで、今回は…

完全にオリジナル！『探偵会議』です。会話をしている場所は、玄関を入つてすぐのところ。というイメージで読んでください。

次回は…

探偵たちの騙し作戦決行です！原作どおりに進めるつもりですが、快斗の心情が入ってくる…つまり、作戦を実行しているということを理解したうえでお進みくださいね。

いつも、感想ありがとうございます。

ご指摘いただいた三点リーダについてですが、完全にうちが勘違いをしておりました。申し訳ありません。このお話から訂正してあります。

これまでのお話は、自分への“戒め”のような形として、残しておこうと思います。もし、そのせいで読みにくかったりするのであれば、必ずご連絡ください。メッセでも感想でも構わないので。その際は、全て訂正するという方向に考えさせていただきます。

では、これからも感想などお待ちしています！

次からもよろしく願います！！

黄昏の館 12

とりあえず、槍田探偵と探偵くんは食堂へ。

白馬はキツチンヘケチャップをとりに行った。

オレと茂木探偵は、時間をおいて食堂へと向かう。

「チョビヒゲ、すっかりやれよ?!」

「ああ…」と、小声で会話をしながら。

ガチャと、食堂のドアを開けるとみんながオレらを待っていた。

「どうだった?」と聞く蘭さんに、オレは

「ああ…完全に橋は落とされてたよ」と答え

「しかも、千間のバアさんが殺された」と茂木探偵が言う。

「ええ!?!」とか「そんな!?!」とかいった反応が返ってきたのは、当たり前だよな。

「ああ…車のライトをいじると爆発するように細工されてたみてーだぜ」

と茂木探偵は真剣な表情。おおっ! バツチリじゃん、演技!

「そ、そんなあ」と蘭さんは涙を浮かべている。

青子と似た雰囲気のある蘭さんの泣き顔は見たくないの、焦った表情を演技半分、本気半分で作って言った。

「とにかく、待っていてもやられるだけだ! 本当に我々の他に館に誰がいるか手分けして捜してみよう!」と。

すると、槍田探偵が

「じゃあ、私たち女3人でチームを組もうかしら。その方が連れションも出来るしね」

とウインク付きで言った。

あゝ。なるほど。トイレで眠らせるのね。すると茂木探偵がさり気なく、本当にさり気なく、

「おい、そういえば茶髪で色白の兄ちゃんはどうした？」

と、槍田探偵に聞いた。確かに、この場にいなーのに聞かねえのは変だもんな。

「さあ…彼が連れてた鷹に餌でもあげてるんじゃないの？」

と意味深な笑みと共に返事が返ってきた。ま、実際はキッチンでケチャップを袋につめてるけどな。

とりあえず、蘭さんとメイドさんを眠らせるのは、元検死官の槍田探偵に任せるとして、オレらは館探険といきますか！

ということ、茂木探偵と探偵くんとオレの3人で近くの一室へ。部屋に入ると、そこにはグランドピアノが置かれていた。

「ホォー、シャレたもん置いてあるじゃねえか…」

と茂木探偵が一言だけ呟き、ピアノの周りを3人で探索。

「ピアノのふちに引つかいたような真新しい傷がついてるな…」

と言うと、茂木探偵がピアノの鍵盤を叩きながらすぐに答えてくれた。

「そいつはおそらく鷹の爪跡だ。あの兄ちゃんもこの部屋に探りを入れたってわけよ」

へえ。白馬がねえ。

「あれれえ？ ピアノの鍵盤の間に何か挟まってるよ！」

と探偵くんが子供の口調で言うもんだから、何か気が抜けちゃった。脱力？

茂木探偵が挟まっていたものを手に取り、見る。

「こ、こいつは！！ 奴が言ってた宝の在処を示した暗号！？」

と、茂木探偵が叫ぶ。それを横から覗き込みつつ

「しかし、何でワラ半紙にガリ版刷りなんだ？」

と、探偵くんが何やら嬉しそうな顔をしているのを気配で感じつつ尋ねた。

「多分、まだコピー機が無かった時代に、誰かがこの文章を大量に刷って何かの目的で大勢の人間に渡したんだろーよ。つまり、奴が

言つてた40年前にこの館で起きた惨劇って話も、それになぞらえて作った宝の隠し場所の暗号ってヤツも、みんな眉唾もんだってこつた！」

へえ。なるほど。それにしても、さすが探偵。筋が通つてるなあ……。

そして、さっきから気になっていたピチャ……という水音。探偵くんがやっぱり子供らしく

「あれえ？ このピアノ濡れてるね？」

と言う。側には槍田探偵の持っていた霧吹き。にしても、かけすぎだろ、これ。

「こいつは、あの姉ちゃんのルミノール液……」

と呟いた茂木探偵に、

「じゃあ、彼女もこの部屋に……」

来てたんだ、と言葉を続ける前に彼に言葉をさえぎられた。

「おい、チョビヒゲ！！ 明かりを消せ！」

「へ？」

「早く……！」

「たく……何だつてオレが。しかも、チョビヒゲだしさ……と内心ぶつくさ言いつつ、電気のスイッチを切ると、そこには……。」

「ピ、ピアノに血で書いた文字！？ やっぱり何かあつたんだ。40年前に何かが……」

“私は烏丸に殺される 暗号解読の切り札をやっとつかんだというのに

千間恭介”

と書かれていた。

「切り札……」

と茂木探偵が呟く中、オレは唐突にひらめいた！ 切り札ってことは、つまり、トランプってこと。それと、例の暗号を合わせて考え

れば…と思った瞬間、

ダァン！！ と銃声が響いた。

「じゅ、銃声！？」

「中央の塔の方だ！！」

と、オレらは叫んで白馬の元へ。探偵くんとはここでお別れとなる。この銃声は始まりの合図。さあ、千間探偵…うまく引つかかってくれるかな？

黄昏の館12（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

久しぶりの連載の更新。お待たせいたしました。短編にうつつを抜かして、連載ほったらかしておりました。とりあえず、12話目です。

今回は。

毛利小五郎「快斗ということだけは忘れないくださいね！？男3人で館探索。コナンくんは、ほとんどしゃべっておりません。多分、前もって探さんと槍田探偵と一緒に見に来てたんじゃないかな？」と裏設定を作ってみました！…（笑）

次回のお話は。

突如響いた銃声。それは、作戦がスタートしたという合図。始まる悲劇（の演技）。千間探偵の再登場は、次々回を目途にしております。

いつも、感想ありがとうございます。もうすぐ夏休みが終わってしまうので、必死でございます。というか20日から補習再開。つまり、暑い中学校へ行って参ります。さらに更新が遅くなるかもしれないませんが、出来るだけ頑張るので、お付き合いをお願いしますね！まだまだ、感想やご意見、それに評価なんかもしてもらえるとすごく喜びます

黄昏の館 13

白馬のもとへ駆けつけたオレ達。オレはまず、白馬が持っていたケチャップを素早く取り、左側の内ポケットへと入れる。

茂木探偵が抱き起こして、

「ダメだ…心臓を撃ち抜かれてやがる!!」

と確認のふりをしている横では、カンカンカンと階段を昇っていく足音が響いている。

「だ、誰かが階段を!」

と叫び、オレはそれを追いかける。まあ、『誰か』＝槍田探偵ってことは分かりきってただけどき。今起きてるのって、探偵くんとオレらを除いたら彼女しか残っていないわけだし。

塔の階段を昇りきり、突き当たりのドアを勢いよく開け、中へ入ると、その部屋の正面には1台のパソコンが置かれていた。

「そういえば、宝の在処が分かったら、ここへ来いって奴が…」

そっか。ここだったっけ、そういえば。そして、ふと足元に目をやると、

「そ、槍田さん!?!」

彼女が倒れていた。何でこんなところで?

「見ろよ! 内側のノブを回すと針が出る仕掛けになってやがる!」

と背後から茂木探偵がやって来て言った。

「宝の在処をパソコンに入力した奴が部屋を出ようとしたら、毒殺される算段になってたんだ」

な、なるほど。それで槍田探偵は『死んだ』という設定なわけね。

「し、しかし、犯人はいつたいどこに!?!」

とオレがわざと聞くと、茂木探偵は、懷から銃を取り出し、オレに

突きつけながら言った。

「とばけんな！ この姉ちゃんが自分で仕掛けた罠にかかるわけねーし、あんたの娘とメイドはトイレでおねんねしてたぜ？ あの銃声がフェイクだとしたら、殺しが出来るのはあんたと俺の2人だけだ。俺じゃねーってことは、あんたしかいねーだろ？」

と言うやいなや、ドン！ と銃が火をふき、オレの右側約10cmのところを通り過ぎた。その瞬間オレは、服の上からケチャップの入ったポケットを押さえつけ、ケチャップが服に広がるようにする。

「フン…疑わしきは罰せよ。悪く思うなよ、眠りの小五郎さんよ」と茂木探偵がタバコに火をつけつつ言い放つ。

それを聞きながら、壁にもたれかかり、そのままずると座り込んだ。

そして、そのタバコを口にして、茂木探偵が毒にやられたフリをして倒れこみ、探偵くん以外は死んだことになった。

そして数秒後、彼がやって来た。カメラの死角を通り、スイッチを切る。

そして、パソコンに入力。…慣れてるな、やっぱり。カタカタとキーを打つ音が室内に響く。

打ち込んだ彼は、部屋を出て行った。

それから30秒後、オレは起き出し、パソコン画面を見る。そこには、

『宝の暗号は解けた 直接口で伝えたい 食堂に参られたし 我は7人目の探偵』

と打ち込まれており、

「はっ、キザだな」

と思わず呟いた。そして、盗聴器のスイッチを入れ、スピーカーを通してみんなにも聞こえるようにする。白馬も階段を昇ってきて、

探偵くんは推理を拝聴することに。

「ところで、チョビヒゲ。お前、何で盗聴器なんて持ってたんだ？」と茂木探偵。

「え、ああ……。近所に発明家のジイさんが住んでんだよ。その人が作ったのをもらっただけだ」

と、『毛利小五郎』なら変ではない（だろうと思われる）答えを返す。すると、

「すごい方なんですな」

と白馬が感心した。そうだな。これは、オレお手製だけどね

その時、スピーカーを通して探偵くんの声が聞こえてきた。

「通常、車に爆弾を仕掛けた人物が、自殺以外の目的でその車に乗るのは考えにくいけど、例外はある。その爆弾で自分が爆死したかのようにカモフラージュするケースだ。そうだな？ 千間探偵」

「始まった、始まった」

とスピーカーの探偵くんの声に呟く。

「そう、爆発の直前に車から抜け出し茂みに隠れ、こっそりこの館に戻ってきたあなたは、館内に取り付けた隠しカメラでオレ達をどこかで監視してたんだ」

「バカねえ。私は間一髪のところ爆弾に気づき、爆発から逃れてたつた今、この館にたどり着いたんだよ」

おいおい、それだといくら何でも帰って来るの、遅すぎだろ。ただけゆっくり歩くんだ？

「それにあの時、車に乗る人はコインを投げて決めたんじゃないか？ たかい？」

とまだまだ白々しい千間探偵の言い分は続く。が、

「投げる前からあなたが車に乗ることは決まってたよ。最初からコインを表にして左手の甲に乗せてたんだから。そのコインの上から

別のコインを持った右手をかぶせて隠し、はじいたコインをキャッチしたフリをして地面に落とし、最初に甲に乗せたコインを見せれば何回やっても表だ！」

と、探偵くんにあつという間に返された。そして、とどめの一言。

「大上さんの紅茶を調べるために出した10円玉が手元にあつたあなたなら、これくらい出来るよな？ “神が見捨てし仔の幻影”さん？」

でも、彼女は“^{オレ}KID”じゃねえぞ？つて、探偵くんはオレ〃毛利小五郎つて気づいてんのかね？

「ホオ…大上さんを殺した晩餐会の主催者が私だと言うのかい？ だったら教えてくれよ。私がこの食堂でどうやって大上さんだけに青酸カリを飲ませ、そしてどうして、その時間さえも予測することが出来たかを」

さあ！ ここからが推理ショー本番！ しっかりやってくれよ？ 探偵くん？

黄昏の館13（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

まだまだ残暑の厳しい今年の夏。体調などは大丈夫ですか？クーラーのつけ過ぎはしていませんか？（うちがしてます；）

今回のお話については。

まず、前回のお話で、千間探偵の再登場は次々回と言っていました。が、今回出てきました。最後の方に少しだけですが。

白馬・槍田探偵・おっちゃん（快斗）・茂木探偵と、続々と死んでいく中で彼ら探偵くんことコナンくんの姿は見えませんでした。どこに隠れてたんだろうね？（疑問にするなよ；）

まあ、とりあえず、探偵くんは千間探偵を食堂に呼び出し、推理ショーをスタートさせたわけですが……。スイマセン！途中でエンジンが切れたので、ここまでです；

そんな次回は。

今度こそ！推理ショー部分になります。どちらかというと、快斗の心理は会話に突っ込んだり納得したりだけになるかもしれませんが、そのところよろしく願いますね？

いつも、感想やメッセージありがとうございます。いつもいつも励まされています！本当に。更新スピードはどんどん遅くなっているかもしれませんが（今回はちょうど1週間）、今後ともお付き合いよろしくお願いします！！

黄昏の館14

スピーカーから聞こえてくる探偵くんと千間探偵のやり取りを、離れたところで聞いているオレ達は、探偵くんがどう攻めるのかを静聴していた。

「彼の紅茶には毒は入ってなかったし、私の席と彼の席の間には毛利さんがいた。それにあの席はジャンケンをして適当に決めた席じゃなかったかい？」

と、まずは青酸カリを飲ませた方法についてのようだ。

「席順なんて関係ないよ。あなたは前もって全員の分のティーカップに毒を塗っていたんだから。塗った場所はカップの取っ手のつなぎ目の上。そこは、大上さんがティーカップを持つ時、右手の親指の指先が触れる位置であり、彼が考え事をするときに思わず噛んでしまうツメのそばでもある。ツメを噛んだのは、あなたが声を変えて録音したテープが、宝の隠し場所への暗号を発表した直後。メイドに指示して紅茶を出す時間をその少し前にしておけば、暗号を聞いて考え込み、ツメを噛む大上さんだけを時間通りに毒殺できるとわけさ」

あゝ。確かに噛んでたね、ツメ。

「でも、あの時みんな用心のために一度食器類を拭いてから使ってたはず」

と千間探偵が言えば、

「確かに、名探偵として名の通った大上さんにしては不注意すぎるけど、彼がこの晩餐会を企画したあなたの相棒だったとしたら、自分が殺されるわけないと高を括くって、それを怠こつたのも無理はない」

た、確かに。大上探偵もオレの名前を使った1人だったのか！

「メイドさんがこの館に来た時すでにベンツが止まってたと聞いた時から疑ってたよ。こんな山奥の館にベンツを放置するには、ベンツに乗ってくる人間と別の車でその人を迎えに来る共犯者が必要だからね」

相変わらずすげえな、名探偵は。

「ちなみに、あなたがわざわざ待ち伏せて毛利探偵の車に乗ったのは、タバコ嫌いなのを彼に印象付けて食堂で死ぬのを大上さんだけにするため。指先に青酸カリがついた状態でタバコをつかみ、クチにくわえれば、あの世行きだ。さっきの茂木探偵みたいにな」

「あれ、待ち伏せだったんだ…」

とポツリと呟く。

「そっぴやチヨビヒゲ、千間のバアさんと一緒に来てたもんね」

とあの世行きになったはずの茂木探偵が言う。

「あ、ちゃんと手は洗ったぜ？」

と笑いながら。

「あのメイドさんを選んだのも、ツメを噛むクセを持っているのを面接の部屋の隠しカメラで知り、同じ手口でいつでも殺せると思ったから。そう…あなたは共犯者の大上さんを殺し、自分も誰かに殺されたかのように見せかけて、ここに招いた探偵たちを心理的に追いつめ、あの暗号を解読させて、隠された宝が見つければ皆殺しにする気だったんだ。40年前、烏丸蓮耶がやったようにな！ピアノに書かれた血文字の最後に名前があったよ、“千間恭介”って。あれは多分…」

「私の父の名前だよ…」

おっ！　とうとう千間探偵が自供開始したよ！

「そろそろ向かうとすっか！」

と茂木探偵の案により、みんな中央の塔から出て階段を降りていく。もちろん、スピーカーのスイッチは入れたままでね。

「ところで毛利さん？　1つ聞きたいのだけど、よろしい？」

と槍田探偵。

「何スか？」

「あのボウヤ…何者なの？」

「は？」

「確かにそうです。小学1年生にしては、言葉遣いや推理の組み立て方などおかしな所が多すぎる」

と白馬までオレを追求する。

「なぐに！　あれはオレの教育の賜物っすよ！　日頃からみつちり特訓してやつてんスから！」

「そうですか…」

と渋々納得してくれたようだ。さすがに、

「そりゃ、彼は工藤新一。つまり、高校生なんだから！　それも“日本警察の救世主”とまで言われたね」

とは言えねえよな。

なぐんてやり取りをしていると、探偵くんと千間探偵の会話も進んでいた。

「針で手紙に穴を空け、びつちり書かれている父の字を見つけたのはね。そこには、宝の隠し場所を示した暗号の事、父のほかにも学者が大勢呼ばれている事、そして、死期が迫り業を煮やした烏丸が見せしめのために、学者達を1人ずつ殺し始めたことが書いてあったよ。たとえ宝を見つけても自分は殺されるとね」

「その事、警察には言ったのか？」

「いや、針の字に気づいたのは20年も経った後だったし、その頃は蓮耶も死に絶えて、烏丸家は衰退し館も人手に渡っていたからねえ。その話を2年前に大上さんにもらしてしまったのが事の始まりだよ。彼はさっそくこの館を見つけ出し、目の色を変えて宝捜しを始めたけど、結局暗号は解けずじまい」

名探偵として名が通ってるのに？ あゝあ。

「多額の借金までしてこの館を購入し、引っ込みがつかなくなった彼は、ある日こう言い出したんだよ……『名探偵を集めて解かせよう！ 探偵たちを釣るエサは怪盗キッド！ 奴を招待主にして命がけのゲームを仕掛けるのだよ！ ワシとあんたが途中で彼に殺されたかのように見せかけてな！ そうだ、実際にメイドでも殺そうか？ 本当に命が懸かっているとすると、本気にならざるを得んからな！ なーに、罪は全部キッドがかぶってくれるさ！』」

へへえ……？ このオレ様の名を使っただけでなく、殺人者扱いまでしたわけか？ しかも、オレ、『エサ』だと？！ ふざけんじゃねえ！

と内心は腸が煮えくり返っているのだが、他の探偵たちの手前、ポーカーフェイス。

「じゃあ、あのメイドさんを選んだのって……」

「大上さんだよ。自分のクセからメイドの殺害方法を思いついたと喜んでいたけど、まさか自分がそうやって殺されるとは思ってなかったろうねえ。そう……彼があの時ツメを噛んだのは、私が予定外のことをテープに吹き込んでいたから。彼は食事の後にメイドを殺す計画を立てていたからね」

「でも、どーして大上さんを？」

と、探偵くんが尋ねた時、食堂が見えてきた。ということ、スピーカーのスイッチは切る。食堂のドアが開いているから、話は聞けるしね。

「宝の在処が分かったら、彼は私も含めて皆殺しにする気だと気づいたからだよ。みんなの部屋に仕込んだ拳銃による同士討ちに見せかけてね」

あちやく。そりやダメだ。…ってあの人、本当に名探偵って呼ばれてたのか！？ 殺人計画をオレの名前を使ってたてるなんてありえねえだろ！

黄昏の館14（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

まだまだ残暑の厳しい今年の夏。京都は蒸し暑さです。…厳しいに変わりありませんが。

文化祭の準備で日々忙しさにかまけて、勉強がおろそかになっております（苦笑）

今回のお話は

推理ショー！！…の途中まで。まだ、最後までいっておりません。長いんですよ・最後に近づくにつれて、字数が増えるのが、この小説の特徴のようです。

探偵たちは、現在、食堂のドアを1枚隔てた外にいます。そこで、直にコナンくんの声と千間探偵の声を聞いているということ！探偵たちの追及は、ごまかすことで何とかやりきった快斗くんでした

そんな中、次回のお話は。

よ、ようやく推理関連は完結、のはずです！ キリよく60話でいければいいんですけど…終わった後の、オマケみたいなやつぱりほしいですね？ なので、もしかしたら中途半端な数字で終わるかもしれないです。次回更新は…出来た日に（爆）

いつも、感想やメッセージありがとうございます！ 本当に本当に励まされています！（と毎回言っています）ありがたいな〜と思っています（*ハハ*）

もう、ラストパートに入っているので、出来るだけお待たせはしたくないので頑張って更新したいと思います！
これからもしよろしく願いしますね。

黄昏の館 15

食堂のドア越しに聞く、千間探偵と探偵くんの会話。

「烏丸に取り憑かれたようなあの男を止めて、探偵たちに暗号解読を続行させるには、ああするしかなかったけど、結果は40年前と同じ。暗号は解けず、惨劇を繰り返したただだったねえ……」

「なんだか、千間探偵の声がどんどん弱々しくなっている気がするんだけど、大丈夫なのか？」

「いや、あなたのお父さんは暗号を解いてみたいだけ？」

「え？」

ドアの隙間から覗くと、探偵くんは暖炉の上によじ登り時計を見ながら言い出した。

「変だと思わないか？ こんな大きな館なのに、時計はこの食堂にしかないんだぜ？」

まあ、確かに。他のどの部屋にも時計はねえよな。

「そう……暗号の頭の『二人の旅人が天を仰いだ夜』とは、時計の長針と短針がそろって真上を指す午前0時！ まずは、それに従って針を0時に戻して、と」

と、探偵くんは指で時計の針をぐるぐる回し、時間を0時にセット。

「そして、続きの暗号を解くカギは、あなたのお父さんが血文字で書き残した『切り札』！ 切り札とは、英語でランプのこと！

暗号の中の王と王妃と兵士はランプのKとQとJ！ そして、宝はダイヤ、聖杯はハート、剣はスペイドを意味してるんだ。つまり、宝と王はダイヤのK！ 聖杯と王妃はハートのQ！ 剣と兵士はスペイドのJってわけ」

とスラスラと説明。さすが探偵くん。3度の飯より暗号が好きってか？

「この館にあるランプの、それらの絵札の顔の向きに従って、0時の状態から、左に13、左に12、右に11と動かすと……」

といいつつ、そのように針を動かし、動かしきった瞬間、ガコツと音がして時計が外れて、カシイーンと音を立てて床へと落ちてしまった。オイオイ、高いんじゃないのか、その時計？

「塗装がはがれて内側から金が……。それに、この重さ。そうか、この時計、中身は純金なんだ」

と探偵くんが呟くように声に出すと、

「やれやれ」

と千間探偵はなんだか呆れた感じの声を出した。

「たったそれだけのために父が命を落としたとは……現実とはこんなものかねえ？」

いや、ガツクリきてる？

「さあ、約束だぜ千間さん？ この館からの脱出方法を教えてくれ！」

と、とうとう探偵くんは千間探偵に要求する。が、しかし千間探偵の答えは

「そんなもの、最初からありはしないよ。私はここで果てるつもりだったのだからね。大上さんは食事のあとでこっそり教えるという私の言葉を信じていたようだけど」

だった。ありやいや、やつぱり？ と思ったオレのすぐ横で茂木探偵が千間探偵へと口を開いた。

「フン、だろーと思ったぜ、千間のバアさんよあ？」

なんてカッコつけながら食堂のドアを開く。効果音が鳴るなら、パンパカパーン！ って感じ？ 探偵4人（見た目は）が集結！ っ
てね。

茂木探偵に続いて、オレもずーっと気になっていたことを言わせていただく。

「どうしてくれんだ、オレの一張羅……」

毛利探偵に返すのに、クリーニングしなきゃなんねえじゃん！ ケチャップは落ちにくいってのによ。

「だから言っただですよ。こんな子供だまし無意味だと」

と白馬は口についたケチャップを拭いながら呆れたように言う。槍田探偵は、それに言い返す。

「あら、文句ならあのボウヤに言ってくれる？ 子供相手ならきつと脱出方法を教えてくれるって言い出したの、あの子なんだから」
「まさか、私からそれを聞き出すために、死んだフリを？」

と千間探偵は目をまん丸にしている。まあ、そりゃね。死んだと思つてた人が目の前に出てきてんだしね。

「ああ、暗号を解いた奴も殺そうとしてたからな」

と茂木探偵はタバコを吸いつつ答える。ついでにオレも

「オレ達が生きてる間は問い詰めても吐いてくれないと思つてね」と加えておいた。

「モニターで見たらケチャップも血に見えるしね！」

と槍田探偵がケチャップを手に言う。

「でもまあ、蘭さん達を眠らせたのは正解でしたね。この悪趣味な芝居は若い女性のハートには酷すぎる」

白馬……。オメエ、やっぱり、ダメだ。ホラ見る、探偵くんも半目だぜ？

「い、いつから私が犯人だと？」

「このボウズがオレ達にコインを選ばせた時からさ」

と茂木探偵が探偵くんの頭の上に手を当てながら答える。

「あの時バアさん、手を伸ばしてわざわざ遠くにある１０円玉を取っただろ？ それでピーンときたんだ。あんたは他の奴に１０円玉

を取らせなくなかったんだって。青酸カリがついた指で10円玉を触られたら、酸化還元反応が起こり、トリックがバレちまうからな！」

「だから私達、犯人をあなたに絞りすぐに結束できたってわけ！」
「死体の右手親指のツメを見た時点でトリックは読めてましたしね」と、茂木探偵、槍田探偵、白馬の順に千間探偵の質問に答えている声を背に、窓へと近づく。さっきから気になるこの音…。

「さて問題は、ここからどうやって脱出するか」

「あら、何の音？」

「あ、多分、僕が呼んだ警察のへりの音ですよ」

と白馬。け、警察！？

「『呼んだ』？」

と怪訝な表情の茂木探偵に、笑顔の白馬。

「ワトソンのアンクレットに取り付けた手紙を、夜明けと共にガケ下に待機させていたバアヤの車に届けてくれたんでしょ！ よかった、他の車と見分けがつくように×印をつけておいて」

ハハ。バアヤも大変だ。それにしても、この音。へりの音だけじゃなくて…

「それならそうと、早く言ってよ！」

「あんな猿芝居させやがって」

と2人に詰め寄られるが

「鷹は鳩と違って帰巢本能に乏しいから不安だったんですよ！」

と主張している白馬の声を聞いていたら、ようやく音の正体が分かった。

へりの音と……建物の壁の剥がれる音だ。

黄昏の館15（後書き）

みなさま、こんにちは！ ペロコです。

約1週間で更新を頑張っている日々ですが…今回はちょっと遅れ気味でした。スイマセン。

さて、今回は…

まだ、キッドは出ていません。スイマセン。結構楽しみにしてくれている方が多いんですけどね。焦ります。とはいっても、次に出る（はず）です。今回は、探偵くんことコナンくんの推理&探偵たちのネタばらしですね
え…話すこと、特にないです（爆）

次回は…

お待たせいたしました！ キッド登場です！

最後の最後まで出てこない彼が持つていった意味深なセリフ…うちなりの解釈で言わせることになります。

みなさま、いつもコメントありがとうございます！

ほぼ、完成に近づいてきています。最後までお付き合いしてくれたらすごく嬉しいです（*^-^*）

それに、コメントをくれたら、もしかしたら更新が早くなるかも…

？（分かりませんが。）

やる気になるのは、間違いないです！

今後とも、よろしくお願いします。

黄昏の館 16

さて、事件も全部解決したし、（警察のヘリだけど）救助も来たみたいだし！

「蘭たちを起こしてこねえとな」

「じゃあ、私が行くわ。一応女子トイレだし？」

と、槍田探偵が起こしてくれることになった。

ということで、オレ達はヘリが待っている、というか、そこにしかヘリを下ろせないのだが、中庭へ先に行くことになった。

メイドさんについていき、中庭に出て、みんなでヘリに向かって手を振って降りてくるよう促す。

すごい音と風。着地：した。

いくら館の中庭が広いとはいえ、けっこうギリギリなんだけどなあ……。

上手だわ、誰だか知らないけど。

ヘリが着地したら、蘭さんたちがやって来た。

「蘭！ もう大丈夫か？」

「うん……。眠らされた時はビックリしたけど、槍田さんが説明してくれたし」

「ヘリが来てくれたし、とりあえずこれで……どこに行くんだ？」

と、最後は白馬に向けて聞く。

「警視庁のヘリですので、警視庁ですね。ご自宅へはそこから……」

「そうか」

勝手知ったる警視庁ってな。

「では、参りましょう」

と白馬が言っすぐ

「おじさん！ 高所恐怖症でしょ？ 外側に乗らないほうがいいよ

！」

と探偵くんがいい、それに乗っかるように

「そうでしたか。では、まず僕が乗らせていただきますね」

と白馬もいい、へりに搭乗する。

探偵くんの一言によってオレの“外側に乗ってあわよくば脱出しよう！”作戦は脆くも崩れ去った。トホホ。

で、結果として…。

前列左側から、白馬、オレ、茂木探偵、千間探偵。

後列左側から、メイドさん、槍田探偵、探偵くん、蘭さんの順番になった。

そして、全員座ったところで

「行つて下さい」

とオレの左側で白馬がいい、へりが再び飛び上がり、警視庁を目指す。

さて、困った。

え？ 何が？ それがさあ…。視線が痛いワケよ。

左に座っている白馬と、後ろに座っている探偵くんの視線がね。

これ…完全に正体バレてんだよね？ 探偵くんはともかく、白馬は何でだ？

あゝ、とにかく居心地が悪いし、早く出たいんだけど、探偵くんにおレの作戦を封じられて出られねえし。

どうしようか。

と、表情は変えずに必死で悩んでいると、後ろから蘭さんの声が聞こえてきた。

「結局来なかったのね、怪盗キッド」

おや？

「あら、来て欲しかったの？」

「あ、いえ……」

おやおや？ ご用とあらばすぐにでも参上いたしますのに。オレの右側では、茂木探偵と千間探偵が会話している。

「俺達を心理的に追い詰めるのは、大上のダンナの計画だったんだろ？ 何で奴を殺した後、死んだフリなんかしたんだよ？」

あ、そういえば、その謎は解けてなかったね。

「どうしても解いて欲しかったんだよ、父が私に遺したあの暗号を。私が生きているうちにね。あなた達のような名探偵が集まる機会なんてもう二度とないと思ったから……。どうやら、烏丸蓮耶に取り憑かれていたのは私だったのかもしれないねえ」

千間探偵……。そこまでして、謎を解きたかったんだ……とヘリの空気が重くなった時、千間探偵がヘリの扉を開け、空中へとダイブしてしまった！！

「バ、バアさん？！」

と茂木探偵が扉から下を眺めている横を押しつけるように、オレは千間探偵の後を追った。

ヘリからは、

「お父さん！！！」

と蘭さんの驚いた声が聞こえる。千間探偵に追いついたところで、一気に毛利探偵の変装を解き、千間探偵をお姫さまダッコする。

あゝ、久しぶりのオレの顔！ 何だかスッキリした感じた。
千間探偵には、丈夫なヒモをくくりつけておく。

これらの作業が終わり、オレから千間探偵に一言。

「オイ、バアさん！ 死に急ぐには年食い過ぎてんじゃないの？」
が、千間探偵の返事はオレの予想とは違っていた。

「バカ言ってんじゃないよ！ あなたを助けてあげたのさ」

「え？」

「あなたの名を騙って晩餐会を開いたお詫びにね。こゝでもしなきや、あなた逃げられなかったよ？ あの子達から。特に、妙な時計であなたを狙った、あのおチビちゃんからはね！」

「あらー、バレてたのね……」

オレの正体も、探偵くんから逃げられなくて困ってるのも、探偵くんの方が手ごわいってことも。

「タバコだよ」

と千間探偵は種明かしを始めた。

「毛利小五郎はヘビースモーカー。あなた、館に来てから1度も吸わなかったでしょ？」

あはは、未成年なもので。

酒とタバコは20歳からだしね。

「何者だい？ あの子達」

え？ うーん、そうだなあ……。

「“最も出会いたくない恋人” ってところかな？」

よしっ！ 決まった！！

「でも、残念だったねえ。あんた、烏丸の財宝を狙って来たんだろ？」

んなわけねえじゃん！ 白馬に乘せられて来たんだよ！

…とは言えるわけがないので、

「ああ、そのつもりだったけど止めとくよ」

と言いつつ、手を離す。

「あんな物、泥棒の風呂敷には包みきれねーからな」

ハンググライダーを操り、もう一度だけ黄昏の館を見てからオレは家に帰った。

黄昏の館16（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

1週間で更新できました！　ありがとうございます。

さて、今回は…。

キッド様登場　出せました。前回の後書きで、「意味深なセリフは」のところ、次に持ち越します。もちろん、うちのりの解釈でキッドにとつての認識は、探偵くん>白馬って感じですかね。しかも、それが千間探偵にバレていたと。（笑）

さて、次回は…。

ん？　次回？　はい！　その通りです。

『うちの何のオマケも準備せずに書いていると、本当に思いますか？』（鎮魂歌キッド風）

オマケあります。今回も。ですが、はっきり言っていたいたことはありません。大体のイメージは出来ているので、出来たら早めの更新を予定しています。

がしかし、出来ない可能性もありますので、そこだけは許してください。

今回のお話で、60話目。なんかすごいことになってきました。

いつも読んでくれてる皆様、本当にありがとうございます。評価やコメント、かなり嬉しいです（*ハハ*）まだまだ、感想もお待ちしています！

これからもよろしく願いますね。

黄昏の館 17（前書き）

「黄昏の館」オマケ話です。

ですが、以前から言っていたように本当に！ 大した話ではありません。

次に繋げる（！）という意味では大事っちゃあ大事なんですけど、読まなくても害はありません。

ではでは、ここまで了解した上で読みいただき、楽しんでいただけたら嬉しいです

黄昏の館 17

「黄昏の館」でことから、2日経った今日は月曜日、
ということは、学校もあるわけで。

登校してきて早々ではあるが、オレはいつものように夢の世界へと
旅立っていた。

そのせいなのか、またしてもアイツの一言で嫌な1日の幕開けとな
ってしまった。

…寝てて油断してたオレが悪いのか？

「“最も出会いたくない恋人”ですか…。光栄ですね、黒羽くん？」

「んあ？ 白馬？」

「はい」

「ふーん、白馬……ん？ 白馬あ！？」

「やっと起きましたか」

「おめえ、まだいたのか！？」

「失礼な。先週、僕が君に見せたあの招待状のところに行って来た
んですよ」

「ああ…なんか変な招待主だったやつのことだろ？」

「ええ」

「んで？ どうだった？」

「僕が推測したとおりでしたよ。昨日の新聞にも載っていたでしょ
う？ キッドの名を騙っていただけのようですね」

「ああ、そっぴや何か書いてあったなあ」

「ですが！ 新聞にも書いていなかったことがあります。それは、
本当にキッドが現れたということです」
「何ッ！？」

「オヤ、白を切るのですか？」

「…オレが何の白を切ってるんだよ」

相変わらず鎌賭けばっかりだなあ、コイツ。

まあ、そんなんじゃ天下の怪盗キッド様はのせらんねえぜ？

「そのキッドが飛び降りた千間探偵に言っていたそうですよ。僕と、そして『キッドキラー』と称されるメガネの少年のことを、“最も出会いたくない恋人”であるとね」

「キッドがか？」

「ええ。彼女に聞いたから間違いありませんよ。…光栄ですよ、黒羽くん」

「は？ 何が？」

「“恋人”ですよ。“最も出会いたくない恋人”ということは、つまり、“出会いたくないが、出会った時は楽しい相手”ということじゃないですか」

「いや、オレに言われても困るんだけど…」

まったく、やだね、探偵つてのは。ここまで深く一言一言を考えなきゃやっていけねえのか？ マジで夢ねえよ。

「かゝいと！ 何話してんの？」

「あ、青子…」

まったく、マズイ時に来やがって。

「僕が“恋人”と言われたことについて話していたんですよ」

「こ、恋人！？」

「え、快斗、そっちの趣味があつたのか？！」

「おい、黒羽！ どういうことだよ！？」

は~~~~ば~~~~。この騒動何とかしてくれよ。
何でそんな誤解の生じるような言い方すんだよ！

「オイ、違うに決まってるだろ！　オレはいたってノーマルだよ！
何考えてんだよ。しかも、何？　このギャラリーの多さ……」

「当たり前でしょ。あまりにも白馬くんがサラッと言うもんだから、
本当のことかと思っただんだもん」

「青子サン……」

オレのこと、何だと思ってるんだよ？

「ホラ、白馬も何とか言ってくれよ！　……って、アレ？　白馬は？」

「白馬くんなら、イギリスに帰る飛行機の時間がもうすぐだから、
警視庁に1回寄ってから空港に行きたいしって言っただけだよ？」

「は？」

あんニヤロ～。逃げやがったな！？

「で、快斗！　本っ当のところはどうなの？」

「まだそのネタ引つ張んの？　……オレは普通です！」

と呆れつつ主張したところで、チャイムが鳴った。白馬の奴、何し
に来たんだ？

「青子、オレ1限サボるって先生に言っただけくれ」

「ええ！？」

「じゃ」

「あ、ちょ」

と、青子に文句も言わせる間もなく、屋上へ。

「はあ……。今日はサボるっかなあ……。……よしっ！　サボろう！」
と即決し、今日は帰った。後で青子に怒られるだろうなあ。

帰った後、何をするわけでもなく、テレビを見たりマジックをしたりと、のんびり過ごした。

夕方になって、夕刊が届いたのを見て、新聞を読もうと思い立ち夕刊を開いたオレは、ある記事に目をとめて…「は？」とだけ呟き、目がすごいスピードで活字を追った。

『怪盗キッドの深まる謎』と見出しが出ている。

『一昨日、故・烏丸蓮耶の館にキッドの名を騙って探偵たちを集めた事件について、新たな証言が寄せられた。それは、実際にその現場にキッドが現れたというものである。証言によると、怪盗キッドは、毛利小五郎探偵に変装しており、ヘリコプターから飛び降りた千間降代探偵を助けた後飛び去った。その際、ヘリに同乗していた白馬探くと江戸川コナンくんのことを“最も出会いたくない恋人”と称していたという。』

江戸川コナンくんといえば、以前鈴木財閥の黒真珠、ブラックスターを守った少年として有名であるが、キッドとの関係はいかなるものなのか。以前から謎の多いキッドではあったが、今回のことですます謎は深まった。』

白馬あ~~~~~！！ オメエ、次会ったら覚えてろよ！？
こんなこと、いちいち警察に報告するもんじゃねえだろ！

…まさか、このためにギリギリまでこっちにいたとか言っただろう

か。

フッ…なめたマネをしてくれますね、白馬探偵も。

黄昏の館17（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

1週間よりも1日早く更新できました。あ、そんなに変わりませんか；

今回は…

実はひそかに準備していたオマケ話。嬉々として個人的には楽しみつつ書けたんですが、完成度はイマイチではないかと思っています。どうしてもあの意味深なセリフを探さんに追求してほしかったんです。うちは、こう解釈しましたが、みなさんそれぞれ違うと思います。

天然青子ちゃんは久しぶりに書きました。多分、普通の青子ちゃんとは違うと思います。

…新聞記事は、もう突っ込まないでくださいね（汗）

最後だけは、キッド口調にしてみました。出番少なかったしね。

ではでは、感想などいただけたら嬉しいです。

こんなオマケ話でスイマセン。

…前書きの部分は深読みありかもです（笑）

ではでは、これからよろしく願いしますね。

Special Talk

よっ！ みんな。黒羽快斗です。

「こんにちは！ ペロコです」（ペロコ・以下「同」）

お、いいとこに来たな、ペロコ。1つ聞きたいことがある！

「何さ？」

あの終わり方は何だあああつ！！

「何って…。恋人騒動？（笑）」

笑ってんじゃねえよ！ オレが可哀想じゃねえか！

「可哀想って言われてもなあ。最後にいつもより出番少なめやったから、キッドにしてあげたやん！」

お気遣いありがとうございます、お嬢さんv

「キ、キッド…」

でなくて！！

「あ、戻った」

オレは探偵くんとはよきライバルなの！ 何で変な関係にされなくちゃなんねえんだよ！

「いやあ、この方が面白いかと思ってさ」

ペロコのツボと、この小説を読んで下さってる読者様のツボは違うんだぞ？

そんな無責任なことしちゃダメだろ、普通。

「それは分かってんねんけどさあ…。…根本的には、キッドとしてあんな意味深なこと言うからアカンねやろ？」

うっ…。

「それに、せっかく探さん出てきたから追求させてみたかってん。

快斗に」

…それが本音か。

「もちろん！ あ、まだ理由を挙げるなら、まじ快ワールドにしたかったからかな」

何でだ？

「何でって…。気づいてないのか。じゃあ聞くけど、何でこんな風に話してるの？」

……何で？

「それでもIQ400かよ。見たら分かるでしょ。普通に考えてみておかしいじゃん、この状況。こんなことできるのは、最後だから特別に！ ってことに決まってるじゃんか」

あ、なるほど… って、え！？ 『最後』！？

「そうだよ？」

何で！？

「『何で』ばっかり言ってるなあ、もう。前々から決めてたよ？

あまりにもダラダラと長くても携帯から見てくれてる人は特に読みにくいやろうし。それに、個人的な事情ではあるけど、受験生やしね。これでも。だからやけど？」

そ、そんな。

「心残りは、キリよく60話で終われなかったことかな。小休憩挟みすぎたし」

じゃあ、この後のオレの活躍はどうなるのさ！？

「うん、それも考え中。中途半端で終わるのも何だし、続けようかなって思う自分と、そんなことできる時間はあるんかなって悩む自分がいるからさ。読者様の反応を見て決めようと思ってんだよね」
マジかよ…。

「まあ、中断というか、これで終わりになった場合は、話の最後が恋人騒動になるわ、天然青子ちゃんに迫られるわで災難な終わり方

になってまうけど、まあ、それも運命やと思とき？（笑）」

ゲツ。それはやだ！ しかも、せっかく忘れかけてたのに思い出させるなよ、そのこと。

「紅子ちゃんも出てほしかったけど、ムリだった…。残念」
出なくていいから！

「まあまあ。あ、話は戻すけど、連載として書けへんかった時は、オマケのような後日談的なものだけ短編で書きたいと思ってるし、安心してな！」

あ、マジで？　そういうことは早く言えよ。よかったあ。

そうだよな、ペロコがオレ様の魅力から逃れられるわけねえもんな！

「うっ。当たってるだけになんか悔しい…」

まあ、あれだな。この話の未来は読者様にかかってるってわけだ。

「そういうこと。」

そういえば、ペロコって関西弁なんだな。普段後書きでもそんな感じしないから、不思議な感じがするぜ？

「あ、そう？　これが一応普通になるんやけど。後書きとかはどうしても敬語になるしね。快斗相手にわざわざ敬語っていうのもねえ？」

失礼なヤツだな！　ま、いいけどな。

「それはよかった。これも個性の1つということで！」

まあ話は戻して、今後ともよろしく頼むよ。ペロコにはムリしてでもオレ様の魅力を書き続けてもらわねえとな。

「何でそんなに偉そうなんや」

こんな反則して、これで終わりってダメだろ。

「いや、そうなんやけど…なんか押されてる感じ？」

気のせい、気のせい。

「そう、かなあ。まあいいや。とりあえずは、ここまでお付き合い
ありがとうございました!」

そうだな。こんなに続けられたのも一重に読者様のおかげだしな。

「うん。かなり助けられたもん。やっぱり自信なかったし。あ、今
回は、後書きは書きませんので、ここで最後になります」

あ、そうなの？

「だから、ここで改めてご挨拶してるんやん」

そうだったんだ。

「ということで、こんなつまらない会話にお付き合いありがとうご
ざいました! 時間的にかなり厳しい時もありましたが、本当に書
いてて楽しかったですし、コメントももらえて幸せでした! 『名
探偵コナン〜キッドside』は、これで一応完結となります。

全部で62話かあ。すごいな…。あと、コメントもお待ちしております
ます! それに、希望も…」

ペロコこそ他人事じゃねえか…。

「いいじゃん、まさかこんなに続けられると思わなかったんだもん」
やっぱり読者様のおかげだな!

「うん」

ということ、また会う日まで!

「ありがとうございました。これからもペロコをよろしく願いま
す!」

(& 快斗)

2007.9.29

ペロロ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1827b/>

名探偵コナン～キッドside～

2010年10月9日17時33分発行